ISSN 0919－9608

北 海 学 園 大 学

人文論集

第 71 号

北海学園大学人文学部

2021 年 8 月

執筆者紹介

岡　田　一　祐　（日本文化学科：講　師）
谷　端　　郷　（日本文化学科：講　師）
丸　島　　歩　（日本文化学科：准教授）
森　川　慎　也　（英米文化学科：准教授）
荒　木　美智雄　（北海学園大学教務センター：元非常勤講師）
伊　藤　翔　太　（北海学園大学文学研究科：博士課程）
鈴　木　理　奈　（北海学園大学人文学部：非常勤講師）

北海学園大学　人文論集　第71号

2021（令和3）年8月31日

編　　集　テレングト　アイトル（日本文化学科）
柴　田　　崇（英米文化学科）

発 行 者　大　森　一　輝

発 行 所　北海学園大学人文学部
〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号
電話（011）841-1161

印刷・製本　㈱アイワード
札幌市中央区北3条東5丁目

ISSN 0919−9608

HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY

STUDIES IN CULTURE

No. 71 August 2021

CONTENTS

Hokkai-Gakuen University Society of Humanities 8th Symposium:
Research Results and Prospects ····· 1

A Human Geographic Approach to the Historical Disaster Studies
····· Go TANIBATA 4

What the Meiji period brought about in the history of hiragana?
····· Kazuhiro OKADA 18

The Diachronic Changes in Request Expressions
by Japanese University Students ····· Ayumi MARUSHIMA 37

Kazuo Ishiguro and Transgenerational Cosmopolitaism
····· Shinya MORIKAWA 53

История изучения частей речи и происхождение имени
числительного в русском языке ····· Rina SUZUKI 81

The Emperor's past life stories during the Insei Period
····· Shota ITO 116(三)

A Study of Teaching demonstration in "Circus" by Nakahara Chuya
── Criticality and Lullaby hidden Theme about Nostalgia
and Broken heat ── ····· Michio ARAKI 140(一)

FACULTY OF HUMANITIES
HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY
Sapporo Hokkaido Japan

北海学園大学

人文論集

第 71 号　　2021 年 8 月

目　次

北海学園大学人文学会第 8 回大会シンポジウム　記録
　これまでの研究成果と展望…… 1

　講演 1
　「歴史災害研究への人文地理学からのアプローチ」… 谷端　郷 4

　講演 2
　「平仮名の歴史における明治時代」…… 岡田　一祐 18

大学生等の依頼表現の変化…… 丸島　歩 37

Kazuo Ishiguro and Transgenerational Cosmopolitanism
　…… Shinya Morikawa 53

ロシア語における品詞分類の変遷と数詞の誕生…… 鈴木　理奈 81

院政期の天皇前世説話について…… 伊藤　翔太 116(三)

中原中也「サーカス」における「模擬授業」研究
　――「郷愁」「失恋」たる主題に隠匿された「批判性」と「子守歌」――
　…… 荒木美智雄 140(一)

題字揮毫：島田無響氏

北海学園大学人文学会第 8 回大会シンポジウム　記録

これまでの研究成果と展望

講演 1

「歴史災害研究への人文地理学からのアプローチ」

谷端　　郷（北海学園大学人文学部日本文化学科　講師）

講演 2

「平仮名の歴史における明治時代」

岡田　一祐（北海学園大学人文学部日本文化学科　講師）

司会

柴田　　崇（北海学園大学人文学部英米文化学科　教授）

日時　2020 年 12 月 10 日（木曜日）　14：30～17：00

会場　北海学園大学　豊平キャンパス　AV4 教室

主催　北海学園大学人文学会

開会の挨拶

○司会　それでは，定刻になりましたので第 8 回人文学会大会を開催いたします。

今年度の学会では順次，新任の先生方にこれまでの研究成果と展望についてお話をいただくという企画を立てました。今回 2 名，岡田先生と谷端先生に御登壇いただいて，それぞれの研究の成果と展望をお話いただきます。

今日のスケジュール簡単に御説明しますと，この後会長から御挨拶をいただきます。14 時 35 分から谷端先生の御発表 45 分，質疑 15 分を加えまして，一旦休憩を取ります。そして 15 時 45 分から岡田先生のご発表，終了は 16 時 45 分の予定です。

ちなみに本日 19 時半から 22 時までの時間帯にオンラインでの会の継続ですね，オフ会というのもございますので是非，入退出自由ですから御都合のつく時間にどうぞ御参加ください。

それでは大森会長から一言お願いします。

○大森氏　会長として一言御挨拶申し上げます。

今年こういう形で大会を開催することができましたこと，非常に嬉しく思っています。企画運営をしてくださった若い委員の先生方に心よりお礼を申し上げたいと思います。

谷端先生，岡田先生の御発表，非常に楽しみにしておりまして，大学で研究会をやるのは当たり前といえば当たり前なんですが，どうもそれ以外の仕事に忙殺されている状況で，昨日は実は午後 1 時から 5 時半までずっと会議でして，後半 2 時半から 5 時半まではここに 3 時間ずっと座っていて，もう何かだんだん叫びたくなってくるような気持ちでおりましたので，今日は大変いい気分でここに座っていられるだろうなと思っております。柴田先生からも御案内ありましたように，終わった後 19 時半から 22 時の予定でオンラインでの懇親会が予定されているようです。今年着任された

４人の先生方には，大学や学部のことも十分お伝えできないような形で，授業だけではなくて，委員会の仕事などもお願いしてまいりましたので，大変心苦しい思いでいたのですが，少しでも交流を深めていただければと思っております。

本日はよろしくお願いいたします。

◯**司会**　では，谷端先生，御用意をお願いいたします。

講演１　「歴史災害研究への人文地理学からのアプローチ」

谷　端　　郷

○谷端氏　谷端と申します。よろしくお願いします。

今日は，歴史災害研究への人文地理学からのアプローチという，大それたタイトルにしてしまったのですけれども，歴史災害研究という分野を地理学からアプローチしてきた私自身のこれまでの研究内容を紹介させていただきたいと思います。

これまでの研究の成果と，それから展望というお題をいただいたときに，やはり私にとっては博士論文の内容に尽きるということになるかと思います。2015年9月に博士論文を提出したということを考えますと，もう5年ちょっと経ってるわけですが，それから博士論文の研究を更に広げるというところができていないということを，今回の発表をまとめる中で改めて思い直したわけなんですけれども，今年から少し腰を落ち着けて研究できる機会をいただけたと思いますので，何とかこの機会を弾みにさせていただきまして，研究を進めていきたいなというふうに考えています。博士論文のタイトルなんですけれども，「近代日本の都市における水害被災地域の研究 ── 1930年代の京都市，大阪市，神戸市を事例として ──」であります。近代日本と言っても1930年代に当たるわけなんですけれども，その時代に京都，大阪，神戸という大都市で相次いで大水害が発生しまして，それぞれの災害の事例分析を博士論文の４，５，６章に並べまして，そしてその事例研究をもとに第７章で1930年代の都市の水害の特徴を考察したというのが博士論文の大きな枠組みであります。

今日の話としましては，その中の第６章に当たる神戸市の災害の事例を紹介して，あと第７章の博士論文全体の考察の部分でどういうふうにまと

めたのかをお伝えできればと思っています。

私の研究は歴史災害研究とか災害史研究という分野になります。ただ，歴史災害研究と災害史研究というのを厳密にどう違うのかと検討したことがあまりないのですけれども，これらの分野の研究というのが，主に理工系の分野の研究と，それから人文系の分野の研究という２つの潮流があると言われています。特に理工系の分野というのは研究の蓄積が厚くて，例えば地震学者が中心になって『日本被害地震総覧』という過去の地震の一覧を何年にもわたって積み重ねています。それぞれの地震について震源地が大体どこで，マグニチュードや震度がどれぐらいか推定していまして，ある地域での地震の発生頻度とか，周期の研究に役立てるという研究が一方であります。

他方，人文系の歴史学でも研究が行われてきました。当初は被害を受ける受動的な人間像，たとえば飢饉があって，それに苦しむ人々みたいな人間像で描き語られがちだったわけなんですけれども，北原糸子先生が，そうではなくて，もう少し能動的な人間像というのを打ち出すべきだと主張され，研究が転換しました。たとえば江戸時代に，地震が起きると江戸市中に「地震なまず絵」と呼ばれるかわら版が出回るのですけれども，北原先生はそういったものを分析して，災害に立ち向かう人間であるとか，災害に対する当時の人々の認識を研究のテーマとする災害社会史という分野を確立されました。その北原先生を中心に 2012 年に『日本歴史災害事典』を出版しまして，各災害について被害がどうだったか，さらにはそれに対して人間がどういうふうに対応したかなどが記述されました。これは北原先生の災害社会史のコンセプトが取り入れられた成果といえます。

こういった歴史災害研究の進展がありまして，国でも防災の政策をつかさどる中央防災会議で 2003 年に災害の教訓の継承に関する専門調査会が設けられまして，2010 年までの間に 23 個の災害について調査されて，報告書が順次刊行されました。この調査会のメンバーに北原先生も入ってますし，おそらくこういう取り組みが事典の編纂にも結びついていったんだろうと考えられます。

それから，同じ時期に京都の立命館大学に，歴史都市防災研究センターが立ち上がります。現在は歴史都市防災研究所に格上げされたわけなんですけれども，どういうところかといいますと，文化財を災害から守るということをコンセプトにして立ち上げられた研究機関であります。文化財をこれまで扱ってきた人文系の研究者と，それから防災を主にやってきた理工系の研究者がこの研究センターに参画することになりました。立命館大学は，文学部に地理学専攻があるのですけれども，その文学部に所属する地理学者や歴史学者が，文化財防災，文化遺産防災の取り組みに参画しました。そこで，人文系の研究者に割り当てられた研究テーマが，歴史災害研究になります。これを期に過去の災害，特に京都でどういった災害があったのか，それから現代でも学べるような減災の知恵を抽出するといった研究プロジェクトが始められまして，例えば「京都歴史災害年表」がまとめられてきました。

地理学の話をします。過去の事象を扱う地理学の分野に歴史地理学があるわけなんですけれども，ここで歴史災害研究が行われてきました。特に 1998 年の段階のまとめによりますと，まず自然災害の復原，ちょっと復原という言葉が地理学の専門的な言葉になるんですけれども，要は地図化ということです。被害の実態をなるべく地図に表して，被害の実態を空間的に明らかにするということです。次に，過去の災害の社会的対応と人間について，最後に，災害に対する認識とか，特に災害常襲地域における災害観の研究というのが，歴史地理学でよく行われてきました。私の研究は，中でも最初の復原研究に含まれます。これは昔から継続的に行われてきました。たとえば，寺院の過去帳を使って，江戸時代の災害でどこで何人亡くなったかを調べたり，考古資料，遺跡の発掘調査の成果なんかを応用する，あるいは地籍図・土地台帳や絵図などさまざまな歴史資料を活用して，過去の災害を復原することが行われてきました。2000 年代以降になってくると，よりミクロな地域スケールで，詳細な復原が行われてきました。

あとは地理情報システム（GIS）の活用があげられます。GIS と呼ばれるコンピューターマッピングのシステムを使って定量的に復原する方法で

す。例えば，遺跡の発掘調査の成果を用いて，ある時代の地盤高を推定します。それによってその時代の地形，高いところ，低いところが分かるので，洪水災害の遭いやすいところ，遭いにくいところを考えることができるようになります。このように2000年以降は特に分析の精緻化，詳細化が進められてきました。私はこれらの研究に取り組まれている先生方の近くで学生時代を過ごしまして，過去の災害を歴史地理学的に研究することをテーマに卒論や修論に取り組んできました。

私が最初に取り組んだのが阪神大水害と称される災害です。1938（昭和13）年ということで，日中戦争が始まった翌年に当たる時代です。梅雨時の7月3日ぐらいから降り始めた雨が，5日に特に大量に降りまして，総降雨量は461 mm，神戸の年間降水量の3分の1がこの3日の間に降りました。最大1時間雨量は，5日の9時から10時ぐらいにかけてですが，時間雨量60 mmということで，バケツをひっくり返したとか，滝のようにごうごうと降るとか形容される，そういうような雨が降りました。その結果，当時の言い方では山津波と呼ばれる，大規模な土石流が発生しまして，市街地で大きな被害が発生しました。神戸市内だけで死者・行方不明者が616名，神戸市の家屋の約7割が被災したといわれています。

この災害，神戸では大きなインパクトをもたらしたものでしたので，たとえば，手塚治虫の『アドルフに告ぐ』という漫画に描写があります。この漫画は第2次世界大戦中，ドイツ人のスパイが神戸等を中心に暗躍するというストーリーだったと思うんですけれども，その中に大水害についての描写があります。

それから，谷崎潤一郎の『細雪』にも阪神大水害の描写があります。たとえば，「普通の洪水と違うのは，六甲の山奥から溢れ出した山津波なので，真っ白な波頭を立てた怒濤が飛沫を上げながら後から後から押し寄せて来つつあって，あたかも全体が沸々と煮えくり返る」といったような土石流の様子が結構リアルに描写されています。あるいは，ふと貞之助は足のほうを見ると子蟹が2匹ちょろちょろちょろと歩いているのを見つけたというような，何かそういう通常とは違うような細かな様子も描写されていま

す。

こういうふうに，神戸の街では少なからずこの災害が語られることになります。ただ私ごとになるんですけれども，私は神戸で生まれ育ったにもかかわらず，恥ずかしながら，学生になるまでこの阪神大水害を全く知りませんでした。その反省も込めてこのテーマに取り組んでいます。

当時の神戸市は，中央にちょうど三宮とか旧居留地というような中心地がありました。それからやや西のほうに，平安時代の大輪田泊（おおわだのとまり）から発展した港町の兵庫があります。さらに西のほうは須磨や長田と呼ばれる地域です。特に長田は阪神淡路大震災のときに大きな火災による被害があった地域です。あと中心部の東方には，灘と呼ばれる地域がありまして，日本酒の製造が非常に盛んだったところです。これらの地域でどういう被害があったかを見ていきたいと思います。まず浸水は市街地全体で見られました。ただ，中心部の西側と東側で異なる被害の様相が見られました。西側は比較的浅めの浸水が広範囲に見られました。それに対して，東側は，あまり広範囲に浸水が広がっていないものの，深めの浸水が下流部まで続いていました。このように浸水は，東部と西部で違いが見られました。

それから家屋被害です。やはり東側と西側でちょっと様子が違いました。西側のほうは，山の中の谷筋なんかには，流出家屋が見られるわけなんですけれども，低地に入ったとたんに，あまり家屋被害，比較的重度の被害は見られませんでした。それに対して中部から東側にかけては，流出家屋や全壊家屋が直線状に，かなり下流部まで見られました。

この要因を見ていきます。まず東側です。東側の被害を土地条件図と家屋被害の場所とを重ね合わせてみると，段丘の間の狭い谷状の地形，つまり開析谷で家屋被害が目立ちました。これに対して段丘上では家屋被害がほとんど見られませんでした。

また，詳細に見ていくと，上流では家屋の流出が見られるわけなんですけれども，下流に行くとほとんど見られなくなってるんですね。どの川筋も大体そういうふうになっている。特にある線を境に，上流側では流出家屋は見られるんですけれども，下流ではほとんど見られなくなっています。

この線は何かと言いますと，当時の鉄道ですね。この一番北側の山に近いところを通ってるのは阪急に相当する鉄道なんですけれども，その鉄道の線路と，それから川とが交差する橋梁部分に土石流が集中してそこで大体止まったと考えられます。そこから下流はある程度勢いをそがれた土石流が流れて被害を抑えたと考えられます，こういうふうにより詳しく見ることによって当時の被害のあり方が，非常にリアルに分かります。

次に中央部，三宮とか神戸の中心市街地の被害の実態を見ていきます。三宮から北に斜めの道路がありまして，現在の新幹線の新神戸駅という駅があるんですけれども，そこから三宮に至る斜めの道路沿いに家屋被害が集中しました。この斜めの道路は旧生田川です。旧生田川は埋め立てられて市街地化されていたんですね。川の高さで言うと，新生田川のほうが高くて，この旧生田川沿いは低かった。さらに新生田川が当時トンネルだったんです。暗渠と呼ばれるトンネルになっていまして，その入り口付近で土石流が詰まり，オーバーフローして相対的に標高の低い旧生田川沿いに土石流が流れてしまい，そこに被害が多発することになりました。この辺りの被害の様子は絵はがきからも分かります。

それから，もう少し西に行って，これも神戸の比較的中心部なんですけれども，湊川という川が流れていまして，それも明治の終わり頃に付け替えが行われます。２つの川が流れて合流してから真南に旧湊川は流れていたんですけれども，それをもう少し西のほうに移す河川の付け替えが行われました。旧湊川近辺の災害はどうだったかと言いますと，上流で決壊した洪水が段丘と旧湊川の堤防との間を土石流が流れ込んでいって，それに沿って家屋被害や浸水被害が見られました。このように，河川の付け替えによって，被害が拡大してしまいました。

さらに，神戸の山間部の話です。山の中では集中豪雨のために土砂崩れが多発しました。特に山間部の道路沿いで比較的大きめの土砂崩壊が発生しました。この道路は，六甲山系の１つ再度山（ふたたびさん）の山頂付近にあった公園に行くためのドライブウェイです。このドライブウェイが当時整備されていまして，このドライブウェイ沿いで土砂崩れが多発したわけです。そうい

うふうに，当時の開発が被害を助長してしまいました。崩れた土砂は，斜面の下の谷沿い，宇治川という川が流れていたんですけれども，その谷沿いにあった家屋を押しつぶしたり，押し流したりしました。こういった谷間にあった家屋の中には，登山客相手の茶店なんかもあったと考えられるんですけれども，そういった家屋を壊してしまいました。さらに，土石流が発生して，この下流部の市街地のほうでも家屋の流出等々の被害をもたらしました。

このように，神戸の都市化が少なからず被害の大きさに影響を与えていたわけです。その辺りの，当時の神戸の背景ですね，都市化の背景というものについても少し押さえておきたいと思います。神戸市の人口のグラフを見ると，明治，大正，昭和と一貫して増加しているんですけれども，特に大正に入ってから昭和初期の増加の傾きというのが大きいので，特に大正から昭和にかけての急激な都市化というのがありました。こういった人口増加により市街地が拡大していきました。明治の中頃から徐々に市街地が拡大し，六甲山系がある北側の山際まで達しました。それから，東西方向に拡大していき，阪神大水害の 3 年前ぐらい前の地形図を見ると市街地は，平地部分をほぼすき間なく埋め尽くしていました。ですから，平地の低いところも，高くなっているところも，大体市街地となってしまって，特に川沿いの低いところで被害が多発してしまいました。

それから，街に人が集まってきたら，都市的な生活様式も成熟していきます。それで神戸の街の裏山，六甲山の辺りがいろいろと開発されていくことになります。明治に入ってから，外国人が別荘を建てたり，ゴルフ場を経営したり，もともとは外国人のレクリエーションの場だったんですけれども，大正時代に入ってくるとケーブルカーであるとか，あるいはロープウェイ，ドライブウェイとかが建設され，神戸市民の憩いの場としても整備されていきました。

特に，先ほど土砂崩れのところで紹介した再度山のドライブウェイというのは，1935 年，つまり水害の 3 年前に完成した観光道路です。これは昭和初期の恐慌後の失業救済土木事業で作られました。おそらく計画として

は付け焼き刃的なもので，工事も突貫で行われたと思われます。そういったところで土砂崩れが多発したという事例もありました。

ここまでをまとめてみますと，当時の神戸市の東部と西部で被害の様相に違いがありました。これは多くは地形というものに規定されます。ただ，被害の集中地域を詳しく見てみると，河川の付け替えがどういうふうに行われたかによって被害のあり方も違ってきました。被害の遭ったところの多くは明治時代後半以降，特に大正，昭和の時代に市街地が拡大したところだった。あるいは増加する神戸市民のためにつくられた観光道路で斜面崩壊が多発した。このように当時の都市化が被害のあり方に大きく影響したことが分かりました。

博士論文では神戸と同じように 1930 年代の大阪や京都でも分析しました。特に，地理情報システム（GIS）を使ってデジタルデータを整備しました。そして，面積計算などを行って統計的な分析から，浸水しやすい地形はどこかなどを検討しました。その博士論文のまとめのところなんですけれども，事例研究を３つ並べて，それをどういうふうにまとめるか，もう少し歴史災害研究的に言うと，個別事例研究をどう乗り越えるかが課題として挙げられます。それに対して私自身はどういうふうに考えたかといいますと，地域を比較する，あるいは地域を類型化するという手法をとることにしました。それによって，３つの災害の被災地域というのを分析して，比較検討してみて，当時の 1930 年代の都市の水害の特徴を明らかにしていこうと考えました。地域の類型化が大事だというのは，地理学で重視されてきた考え方なんですけれども，歴史災害のさまざまな事例を比較検討する際にも使えるのではないかと考え，この方法を採用しました。神戸の事例で，被害の大きかったところと小さかったところをそれぞれ類型化しました。このようなまとめを大阪でも京都でもやってみたんですね。それで当時の大都市における水害の特徴というのがどういったものだったかを考察しました。まずは大型の台風や集中豪雨が襲来しました。そして地形によって被害の大小もありました。ただ，山麓部は土砂災害，沿岸部は高潮災害という違いが見られましたが，そういった災害の危険性の高いとこ

ろに市街地が進出したという点では，同じような被害のメカニズムが見られました。また，山地開発に見られるように，防災面は当時軽視されていました。

都市水害の歴史は，大体戦後から始まったとみなされています。特に都市における大規模な水害というのは 1959 年の伊勢湾台風が始まりだと，そういうような見方がありまして，戦前というのが，例外として扱われて，都市水害の歴史の中に位置付けられていないという問題があります。いろいろと被害額なんかも戦後突出するので戦前と戦後で特徴が違うとも言えるんですけれども，1930 年代も戦後の都市水害と同じ文脈でくくるべきではないかというのが私の結論です。

すみません，時間を考えてなかったんですけども，第一次世界大戦後ぐらいから高度成長までを一続きの歴史として見ようと，そういうような歴史学の考え方に立脚しながら，第一次世界大戦後に都市化する場所で 1930 年代に大規模な水害が発生した事例と戦後 1950 年代くらいまでの都市水害の事例との間に共通点が見出せるんじゃないかと考えています。

それから，地域を比較しながら当時の被害の特徴を考えるというのは有用だというのが博士論文のもう一つの結論でして，それを使えば『日本歴史災害事典』とは違う視点でのまとめ方ができるのではないかというのが，今後の展望ということになります。

今後の課題として具体的には博士論文の書籍化ということと，事例研究をやはり積み重ねていく必要があるんですけれども，北海道の事例にも取り組んでいきたいと考えているところです。

すみません，後半駆け足になって申し訳ありませんでしたが，発表は以上で終わらせていただきます。

ありがとうございました。

○司会　では，これから 15 分程度，御質問を受けたいと思います。質問のある方は挙手をお願いします。

○質問者　よろしいですか。ちょっと部外者なのですが，今日は案内いただいたものですから来ました。なかなかおもしろい，興味深いご発表です

けども，ちょっと一つ，斜面崩壊の図がありましたよね。これはいつ，どういうふうにして作られたんですか。

○谷端氏　斜面崩壊は，ちょっと部署の名前忘れたんですけど，神戸市の経済部山地課という山をいろいろとメンテナンスしてる人たちが調査したものをもとに作られたと考えられます。

○質問者　今だったら航空写真だとかあるでしょう。かなり的確にできるんですけども，もし当時これ作ったとしたら，先ほどこのドライブウェイ沿いに崩壊が多いって言ってましたね。要するに道沿いっていうのは非常に見やすい，調査しやすいところですよね。そういったところで多く見えてきちゃったということはないんですかね。

○谷端氏　その可能性も否定はできないです。

○質問者　ちょっと 1938 年だと，米軍の航空写真は 1940 年ぐらいのやつだから，それより前っていうことなので，ちょっと全体的に同じ均一的な方法で調査をやるっていうことができないために何かちょっと偏りも出てきてるような気がするんですよね。

○谷端氏　分析の際にはその偏りにも気をつけたいと思います。

○司会　他の方はいいですか。ないようです。

私から一ついいですか。お話を伺ってると歴史地理というのは，文献等で復原するという方法を採っているようですが，戦前の看過されてきたところを検証なさった点で大変意義のある話だと捉えました。それで，このような視点もあるのではないか，という気持ちで聞いてもらいたいのですが，昨今のいわゆる気候変動を考えると，今後条件が変わってくることが予想できます。そのときに，過去の資料がどれぐらい役立つのか，いわゆる外挿ができるのかなというのが一つ目です。二つ目としてはどれほど実効性があるかは分かりませんが，シミュレーションの方法が今，AI 使ったりして非常に高度になってきていますけれども，そのようなテクノロジーとからめた，条件の変化についての研究は，お考えでしょうか。

○谷端氏　そうですね，その外挿という点で言いますと，やはり今日にかけて，この阪神大水害規模の水害は発生してないんです。これ以降山間部

に砂防堰堤，砂防ダムが建設されているので，それ以降土石流災害は発生していないんですよね。ただ，阪神大水害並の雨があまり降っていないというのも一方ではあります。ですから，仮に想定外の雨が降って，砂防ダムを超えて土石流なんかがやってきたときにどういう被害が起きるかというと，阪神大水害に近い，浸水とか土石流が考えられるかなと思います。ただ，木造家屋は大分なくなっているので，家屋被害がこんな感じで起こるかというとそうではないと思うんですけれども，もし想定外のことが起きたときに，どこで大きな被害が起きやすいかを推測することはできるかなと思います。また，浸水の深さとかも分かっているんで，そのシミュレーションとかもやりようはあるんだと思うんですけれども，あまりそちらのほうに技術もないので，進むことは考えていなくて，むしろ家屋被害を受けたような場所とか，あるいは地域がどういうふうに対応したかなどをこれからやりたいなと自分自身では考えています。

○司会　まだ5分程度時間がありますけれども，どうでしょうか。

○質問者　おもしろい発表でした。その中で，人文学に関係するもの，例えばこの中の資料として手塚治虫とか谷崎潤一郎を資料で見てたんですけど，論文の中ではどのように資料の整合性をとっているのでしょうか。

○谷端氏　今回，水害の社会的影響を紹介するために漫画とか，文学作品を取り入れたんですけど，論文の中では触れていません。

○質問者　大変興味深いお話をありがとうございました。最初のほうで，歴史学の分野からのアプローチとして災害社会史というのと，今日お話なさったことがどうつながるのかつながらないのかというか，戦前期の都市化による都市水害，第一次都市化の時代の都市水害の時期の人々の対応の仕方と，それから戦後のがどう違ってるのか，違わないのか，いずれにしてもその都市化という土地利用と災害というのに人というファクターがどう入っていくのかいかないのかというのを教えてください。

○谷端氏　そうですね，災害社会史との関係でいいますと，今のところそこにはまだ踏み込めていない段階かなというふうに思います。あくまで被害の要因分析にとどまっていまして，被害の大きかったところ，小さかっ

たところがどういったところかというのを，都市化と絡めて分析してきました。ただ，この後人々が災害からどういうふうに復旧しようとしたかとか，復興しようとしたかという話はありまして，何とかそういったところにこれから取り組んでいきたいなと考えています。

○質問者　ありがとうございました。単純な感想というかコメントとして聞いていただきたいんですが，都市化というふうなことで触れられている，都市における人間関係のあり方とか何とか，それは恐らく戦前の都市化の段階と戦後の都市化の段階では大分違うんじゃないかというふうに思うし，だからもう少し都市になっていったことと，そこで暮らしてる人たちの意識というか，生活のあり方とか，人間関係の作り方とか，特にその災害の後の緊急事態の中での生き方とかっていうのがどう影響していったのか，みたいなことが分かるとおもしろいなというふうに思いました。

○谷端氏　ありがとうございます。ご指摘を参考に今後取り組んでいきたいです。

○質問者　ありがとうございました。今の大森先生のコメントと関係するのかもしれないですし，あとは時間なかったんで，はしょったとこなんじゃないかなという気もしてるので少し伺いたいんですけど，京都は大阪と神戸と違って，古いタイプの水害だったというまとめだという言い方だったんですけど，その原因というのは京都の都市化のあり方が違ったということなのか，伝統的な何か，人間的な要因なのか，その辺りの要因について何か教えていただけたら有り難いなというふうに思いました。

○谷端氏　そうですね，京都の都市化のあり方が大阪や神戸とはちょっと違っていたと考えられます。第一次都市化期の都市化の原動力は重化学工業化の進展というところで，やはりそういったところは当時の工業都市とか，港湾都市とかですね，四大工業地帯と言われるようなところが，都市化のメインで，そういったところで高潮災害とか，あるいは土砂災害が発生してしまいました。それに対して京都は内陸盆地にあって，どちらかというと西陣織に代表される軽工業が盛んで，ようやく第二次世界大戦期間中，重化学工業の工場がぽつぽつと，桂川の周辺にも建ち始めて，戦後に

都市型の水害が多発していくような，そういうような傾向があります。したがって京都は戦前段階では大阪，神戸と異なる都市化の様相だったと考えられます。

○司会　時間ですけど，もしもうお一方ぐらい。いかがですか。

○質問者　ちょっと 1 点，これだけの大きな災害が起こったわけですから，今災害に関連していろんなところでハザードマップが作られてますよね。神戸でもやっぱりこういったことを導入して，ハザードマップって作られてるんですか。

○谷端氏　ハザードマップ自体は，もう本当に機械的に土石流危険渓流や急傾斜地崩壊危険箇所というのが記されているだけですね。ハザードマップに，過去の水害の事例について言及があるかというとそうではないんですね。ただ，70 周年とか 80 周年とか，一定の周期でこの災害について市や府県レベルで見直そうという動きはあります。

○質問者　ちょっと特異な例かもしれないですけども，十勝岳の山麓に上富良野町ってありますよね。あそこ，かつて噴火に伴う泥流で大きな被害が出た経緯があって，普通火山地域というと，火山災害，火山灰であるとか，それに伴った，あそこのハザードマップというのは泥流被害ですね，それを念頭において作ってますよね。ですから，特にそういう最近神戸でもそうですし，それからあと広島でも大きな土砂災害が起きてますよね。ですから過去にこういうことがあったということであれば，個々のそういう災害が起きた，起きやすいところ，そういったものを念頭にして，これは谷端さんにあれなんですけども，そういうハザードマップもできるといいかなと思いますけどね。

○谷端氏　おっしゃる通りだと私も思います。

○司会　では時間になりましたので，以上で谷端先生の発表を終了いたします。どうもありがとうございました。

（休憩）

それでは時間になりましたので，引き続き岡田先生の発表に移りたいと思います。

では岡田先生お願いします。

講演２　「平仮名の歴史における明治時代」

岡　田　一　祐

○岡田氏　よろしくお願いします。今回は平仮名の歴史において明治時代がどんな時代だったかということでお話ししたいと思います。

どういうスライドを作っていいか迷ったので，昨年別の場所でお話しする機会があった際に使った物を流用させていただきましたが，その点ご容赦ください。

まず簡単に自己紹介をいたしますと，専門は日本語学，特に近代の平仮名について研究しています。そのほかには文献をメインとしたデジタル技法に関する研究などにも取り組んでいます。特に 19 世紀の平仮名の歴史が専門で，江戸から明治に移り変わる 19 世紀に，日本の人々がどのように文字を捉え，それをどのように変えていったのか，あるいはどのように変わらなかったのかということに興味があります。また，19 世紀ということでは，日本の外の人々がどのように文字を学んでいたのかということにも興味があります。例えば植民地や（あまり植民地のことはできていないんですけれども），あるいはヨーロッパの人々が日本語を勉強してどのように文字というものを捉えていたのかということです。ほかにも，平仮名がどのように体系付けられているのかということに関心があります。そこから発展して，興味があるというほどのものですが，どのように頭の中で文字を処理しているのかということに関しても興味を持っています。それでは早速，本題に入ります。

平仮名はもともと万葉仮名の性質を受け継いで，一つの音に対していろいろな文字がある一音多字体の体系というものを持っていました。その後，明治時代にいたって変体仮名を対象化し，それによって本質的には一つに定まらないものを整理できるようにして，最終的に現在のような一音

一字体の体系になったというのが平仮名の歴史から見た明治時代の位置付けになるかと思います。このような観点をより細かく精密に明らかにすることをこれまでは目指してきましたが，もうちょっと新しく捉えられる観点がないのか考えるのが最近の研究です。

変体仮名というものがどういうものか皆様の事前の知識がいろいろ違うかと思いますので，簡単に変体仮名とはどういうものかお話ししたいと思います。スライドでお見せします（図１）。アーネスト・サトウという，イギリスの外交官で日本学者としても有名な人物が，日本語の学習書というものを 1873（明治６）年に横浜で刊行しています。それは基本的にはローマ字なんですけれども，ここにお見せするように日本の文字で書かれたものも出ています。この巻頭には仮名の一覧があって，サトウが文字の学習を重視していたことが分かります。実際サトウは，書道の勉強などもしていて，かなり文字のうまい人だったことが知られています。

この一覧は，１段目に片仮名があって２段目に今の平仮名の形に当たるものがあります。３段目から下から２段目までが変体仮名，一番下にローマ字の読みが出ている構成になっています。例えば一番右の「ほ」という字に対して，同じ「ほ」を表す複数の仮名が存在していたことがここで示されています。数の点ではかなり違っていて，例えば「わ」は同音の仮名が２種類しか示されていないわけですけれども，「る」などは７種類あって，同じ音に対して存在する仮名の数にはかなり差があることが分かります。これらの同音の仮名を今では変体仮名と呼んでいて，そのように呼び始める前の明治初期にはまだまだ使われていたといえます。

それでは，このサトウはこの仮名を全部使っていたのかというと，そういうものではありません。結局は同じ音なのに，全ての仮名を織りまぜて使うことは不合理ですし，全部の種類を使っているような単一の資料も基本的にはないはずです。どんなに多いものでも，このような仮名を多数集めた資料に現れるものの半分にも満たないはずです。それぞれの資料ごとに少しずつ違う種類の仮名が用いられた結果として，一箇所に集めるとかなりの数になったというように考えるべきものです。変体仮名を網羅した

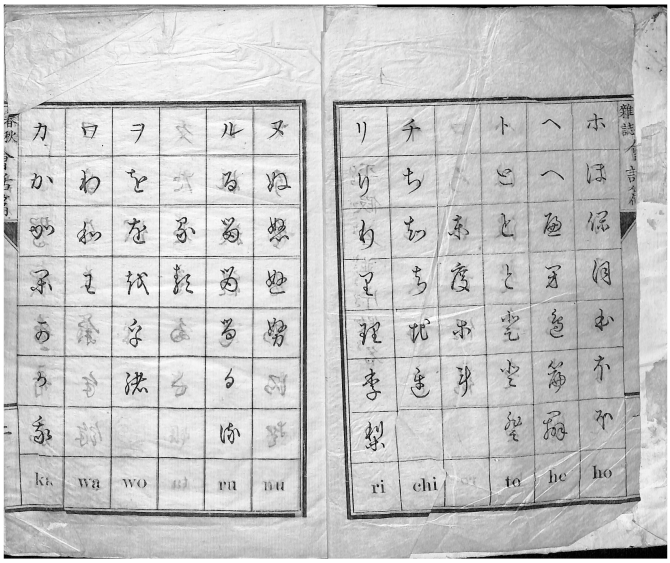


図 1　アーネスト・サトウ『Kuai-wa hen. Part III. Japanese Text. Exercises I–XIV』（1873？）より一部。岡田蔵。

仮名字書というものは，今のところ存在しないのではないかと思います。それは，こういう種類のさだまらないものを集めることにどれだけ意味があるのかと疑問に思う研究者が多かったということだと思うのですが，うまく規準を立てて少しずつでも集めて行くことは意味のあることだろうと個人的には思います。

それでは，変体仮名というものはどのようになくなっていったのでしょうか。まず問われるべきは，今使われている平仮名に統一されたのはいつかということです。教科書的回答としては，1900（明治 33）年の文部省令第 14 号の小学校令施行規則というものによってなされたというものです。これは同年に公布された勅令である小学校令の施行規則で，そういう実務レベルの規定の一部として出されたということです。この施行規則の第 1 号表において現在使用されている平仮名というものが定義されています。これをどう考えるかですが，一つには，この 1900 年に今まで変体仮名などをみんな自由勝手に使っていたものが，この表が出たので止めようという

ことでなくなったと考える。あるいは，1900 年頃にはもうみんな変体仮名を使わなくなっていて，その結果としてこの表が出て，最終的に確立したという二つの考え方が両極としてあるかと思います。

最近の研究の動向としては，1900 年には変体仮名というものは用いられなくなっていたのだという考え方が古田東朔によって示されていて，どれぐらい確実かというのはいろんな論点があるんですけども，それがかなり影響力をもっています。では実際問題どうなのかというところは，一概に言えません。まず，そうだと言えそうな例からお話ししましょう。活版印刷というものが明治時代に導入されますが，それが導入された時点ですでに変体仮名というものの使い方には史的な変化があったということを最近ちょっと書きました（岡田一祐「明治前期鋳造活字の平仮名書体における濁音表示と仮名字体意識」『年報新人文学』17，2020）。また，1870（明治２）年前後に活版印刷が導入されて，それから 20 年くらいを経て，1890 年ごろから活版印刷の印刷物では仮名字体が統一される傾向にあるということを報告した論文があります（小林ベター・ダニエル「明治前期の出版物における平仮名字体の使用傾向について」『国文論叢』48，2014）。スライドには初期の活版印刷の事例として『西洋古史略』（1873）という，本木昌造という日本に上海から活版印刷のシステムを導入した人の著した印刷物からお示ししています（ここでは省略）。左側が，その序文の草稿で，これを書いたのは池原香穉という国学者です。本木が中国から輸入した活字に平仮名の活字が含まれていなかったようで，やっぱり仮名の活字がなければ，日本語の文章を印刷するのは難しいと思うんですけれども，池原は，そこで仮名活字の下書きをしたとされる人物です。その池原の書いた序文の草稿が，長崎くんちで有名な長崎の諏訪神社に所蔵されていて，その序文とこの実際に印刷されたものとを比較してみると，池原が自在に使っていた同音の仮名がかなり変えられているということを見て取れます。池原は普通からすれば古風すぎる仮名を使う人なんですけども，例えば，原稿では「舞」という漢字から来た仮名があるのが，この印刷版のほうでは，活字は存在するはずなのに，今使うような「む」になっているというよう

に，池原の使う仮名が印刷版にはほとんど反映されていないということがあります。そういう活版印刷の現場でその場にある活字の状況を優先させてしまうということが既に明治初期から確認されるということです。

これは，樋口一葉の『たけくらべ』で，何年か前に東京の立川の料理屋さんが持っていた原稿が売られるときに，毎日新聞で写真に撮って記事になったものをちょっと拝借したものです（ここでは省略)。これを見てもやはり活字と原稿とでは，特に仮名の字体を維持していないということが分かります。もちろん，手書きでも必ずしも維持されるものではありませんが，それとはちょっと様子が違います。例えば，この「廻れば」の 1 文字目の「廻」ですが，それに付された振り仮名の 2 文字目が「王」という字から仮名になったものであったのが，印刷版では今と同じ「わ」になっているなどのものが確認されます。このように，活字印刷では，同音の仮名が多数あるという性質とうまく合わないということがあったようです。

しかし，活字ではそうなんですけども，文字が使われる全ての場面で，変体仮名が一斉に消えていったわけではありません。小学校における変体仮名教育というものは，1886 年頃から変化を始めますが，小学校というものができて以来先ほどお見せした 1900 年の小学校令施行規則まで，ずっと変体仮名は学校で教えられていました。1900 年になってからもそれでもう終わりというわけではなくて，1910 年から変体仮名教育自体は復活し，それから 20 年ほど存続します。ただし，教えていた時代があるというだけで，変体仮名の使用法や教育法というものが確立していたわけではなく，どう扱っていいのか分からないというあやふやな位置付けが続いていたと考えられます。ちょっと考えてみれば分からないでもないですが，教育の効用という点では，漢字は覚えると，読める言葉も増えていきますが，変体仮名はいくつ覚えてもとくに読める言葉は増えませんので，そういう意味で学校制度と相性が悪い存在であったと思います。

さて，1886 年から何が変わったかということですが，このグラフ（図 2）の示すように，小学何年生から変体仮名を教えるのかというところで 1886 年に変化があります。1886 年までは変体仮名を 1 年生から教えることも

珍しくありませんでした。それが，1886 年から変体仮名を１年生に教えない教科書が一気に増えるのです。1886 年にどういう教育の変革があったかというと，森有礼によって第一次小学校令というものが出され，教育の内容が一新されたということがありました。それに合わせて教科書を重視する政策も始まったので，教科書も一気に増えていきます。その中で変体仮名の教育に関しても変わっていくということを博論では明らかにしました。ただ，小学１年生には教えないのですが，小学２年生以降，あるいは小学１年生でも入学してすぐではなく，後半以降になって変体仮名を教えるということは 1900 年までずっと続いていたということです。

次のスライドは民間で作られた教科書からで（ここでは省略），変体仮名が用いられている実例です。1900 年以前にはこのように，変体仮名が小学４年生向けの教科書でかなり使われている。そもそも内容が難しいという問題はともかくとして使われています。こちらのスライドは国定第２期の小学６年生用教科書で，こちらでは韻文，要するに和歌の箇所で変体仮名が使われるという例です（ここでは省略）。例えば，この「見ゆる限りは桜なりけり」の最後の「り」に「里」に基づく仮名が使われているということが確認できます。これも同じく国定第２期の国語読本で（ここでは省略），韻文のところに変体仮名が，若干不自然な程度に使われており，それ

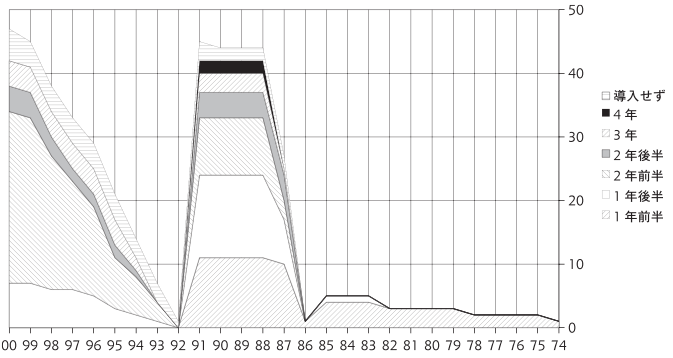


図２　教科書で異体仮名を導入する学年と刊行時期。岡田一祐『近代平仮名体系の成立　明治期読本と平仮名字体意識』（文学通信，2021），p. 208・表 9-3 に基づき岡田作成。

によって教えようとしているものですね。

また，個人や商品，お店などの名前に変体仮名は今でも残っています。人名に関しては 1947 年に変体仮名を使うことが禁止されていますが，それ以前にお生まれになった方は変体仮名で名づけられている可能性は当然あるわけなので，行政システムで名前の変体仮名を扱える必要が今でもあり，２年前に Unicode（現在最も広く使われている文字コード）に変体仮名が登録されました。このスライドはイガラシハルノさんという富山県の方のお名前が新聞の訃報欄に出ていたもので（ここでは省略），こういう変体仮名交じりのお名前などは，今まではコンピュータではなかなか扱いにくかったんですけれども，だいぶ使えるようになりました。このスライドがその Unicode における変体仮名の一覧で（図３），戸籍をコンピュータに登録するときに，変体仮名を読めない人が無理やり登録したという例が多少あって，そんな仮名は存在しないというようなものもあったりするんですが，今動いているシステムが優先ということで押し通されてしまった例も中にはあって，その人本来の文字というわけでもないはずで，ちょっとなと思ったりはします。

それはともかくとして，同じ活版印刷でも新聞では会社によって考え方が違ったようです。銭谷真人氏が横浜毎日新聞での仮名の統一に関していろいろ検討なさっていて，明治 20 年代初期ぐらいには統一傾向にあることをご報告なさっています（「『横浜毎日新聞』における仮名字体および仮名文字遣い：明治期の新聞における字体の統一について」『日本語の研究』10-4，2014）。ただ，氏は横浜毎日新聞しか見ていないので，読売新聞や朝日新聞ではどうだったんだろうというということで見てみると，読売新聞は 1908 年まで変体仮名を使っていますし，朝日新聞も 1904 年ぐらいまでは使っている印象です。ただ，朝日新聞では，大阪本社と東京本社とで止めた時期が若干違うようなので，ちょっとその辺を把握しきれてはいません。

古い活字を変えるというのは結構大変なことで，昔作ったもののまま作りつづける傾向にあるので，新しく作る活字で変体仮名を用意しなくなる

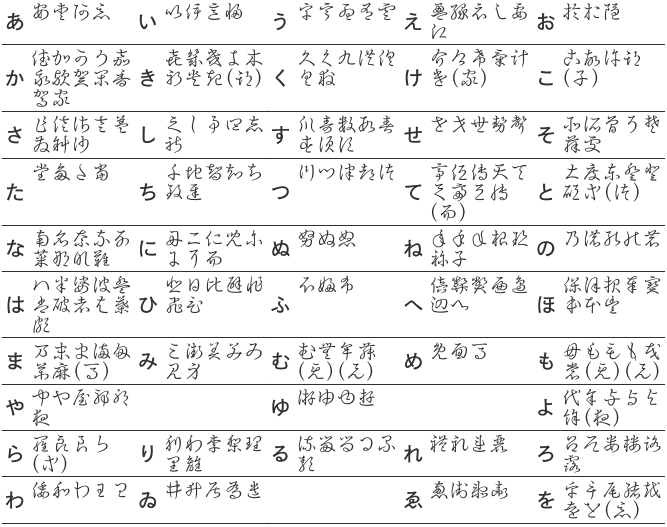


図 3　Unicode における変体仮名の一覧。https://www.unicode.org/Public/13.0.0/charts/CodeCharts.pdf に基づき岡田作成。複数の音価が認められた字体は，従たる音価を丸括弧で括ってある（例：期に由来する仮名がコとキにあるのは，キが従）。

のがいつかということで考えると，明治末期から昭和初期ぐらいになってくるようです。このように見ていくと，変体仮名がなくなるのがいつなのかというのはちょっと難しくなってきます。手書き資料では大正や昭和でも変わらずに用いることがあるということが報告されています。また，おじいさんがその孫を喜ばせようと思って書いた手紙の中に変体仮名や草書が多かったので孫はそれが読めなくて困ったということさえありますと 1957 年に書かれたものにあります。表記改革派の国語研究者の書いたものなので，主義主張が透けて見えるところではありますが，昭和 30 年ぐらいの頃でもまだ，明治生まれの方などは変体仮名や草書で書くことがやはりあったと考えられます。なので，変体仮名がいつなくなったかを単一の基準で言うことは困難であると言えます。ただ，それでも今の私たちに変体仮名が使われているという実感は特にないかと思います。生活の中で変

体仮名が読めなくて生活に支障をきたすということは今はないわけです。私の祖母は 1928（昭和 3 ）年生まれですが，変体仮名は読めないと言っていました。また, 街中で見掛ける変体仮名というのはもはや飾りであって，生活に関わるものではないわけです。そのため，変体仮名がいつなくなったかははっきり言えないとしても，1900 年の仮名統一から数十年をかけて変体仮名を使う人がいなくなっていったというふうに考えるのが妥当かと思います。

次にお見せするのは，Twitter 上で街中の変体仮名をコレクションなさっている方です（https://www.twitter.com/hengana_bot)。次のスライドは「生そば」というよく見る暖簾ですが（http://www.nanghi.com/blog/archives/2017/02/20170212_1200.php)，この「者」から出てきている変体仮名を見ると，もはや「む」のように撥ねてしまっていて，もう変体仮名の正しい形を理解できていないということが分かる，もはや飾りであるということが分かります。

それではどのように変わっていったかということを考えたいわけですが，言葉や考えというものは，規格品や工業製品ではないので，統制がかならずしもできるものではありません。政府が廃止したいと思っても，それだけでどうなるものでもありません。ただ，それが政策として数十年単位で行われると変わっていくこともあるというようなものです。例えば現代仮名遣いなどもそうで，今歴史的仮名遣いで書くことはまずありませんし，旧字体で書くということもありません。では変体仮名はどのように決まったのかということを見ていきたいと思います。

このスライドでお見せするように，幕末に来日したドイツ人のシーボルトは，平仮名と大和仮名というものを対比して，平仮名と大和仮名の両方を日本人は使っているということを書いています（「日本語文法大概」1832)。このシーボルトの言う平仮名と大和仮名とは何なのかというと，結論をいえば大和仮名は変体仮名のことと考えることができるかと思います。平仮名の方は中世の末期頃に誕生した言葉といわれています。明治初期ぐらいまでまずいろは歌で平仮名を勉強したのですが，そのいろは歌の

お手本に使われていた仮名が実質的に固定され，それを平仮名と呼んでいたのです。このスライドはいろは歌のかなり古い，鎌倉後期ぐらいの例です（ここでは省略）。若干後世のいろは仮名とも違いますが，ほぼ定まっているといえます。このスライドは室町末期のお家流のいろは歌手本です（図４，当日のスライドとは別の資料）。これを見てみると，「わかよたれそ」の「そ」が違うとか，「うゐのおくやま」の「お」が違うとか，「けふこえて」の「え」が，若干違って「江」であるというところがありますが，基本的には私たちが今使っている平仮名と同じものが使われており，それが平仮名と呼ばれていたということです。

いろは歌は手本として使うものなので，基本的には固定的で，変体仮名を区別するためというわけでもなく，単に平仮名というまとまりとして認識されていたと考えられます。中世末期以降，いろは歌の手本で平仮名と言われるようになると，それ以外のものをどう扱うか問題になったときにかぎり，一回性は高いものの，例えば大和仮名と言ったりもしたと考えられるわけです。ただ，ここで興味深いのは，私たちの思う平仮名が当時の人の認識として二つに分けることができたということです。日常の文字使用には関わってこないのですが，あえて分けるならば平仮名とそれ以外というところでやってきていたわけです。それが近代に至って教育制度が整備されると，国語という教科が対象化されます。教育課程が整備されていく中で，いろは歌手本の平仮名以外の言葉を指す言葉というものが教育の便宜上必要になり，何となく名付けないといけないようになって，変体仮名という言葉が 1880 年ぐらいに出てきます。ただ，この頃も変体仮名という言い方が固まっていたわけではなくて，いずれにしてもいろは歌手本の平仮名に対するバリエーションというような意味で使われていたようです。この変体仮名でない，要するに普通の平仮名を正体と呼ぶことはほとんど見受けられません。

ここで問題になってくるのが，国語国字問題というものです。近代にいたって西洋の文明と直面して脱亜入欧を果そうとしたときに，彼らには日本語という言語が壁に見えたというのが国語国字問題のひとつの出発点と

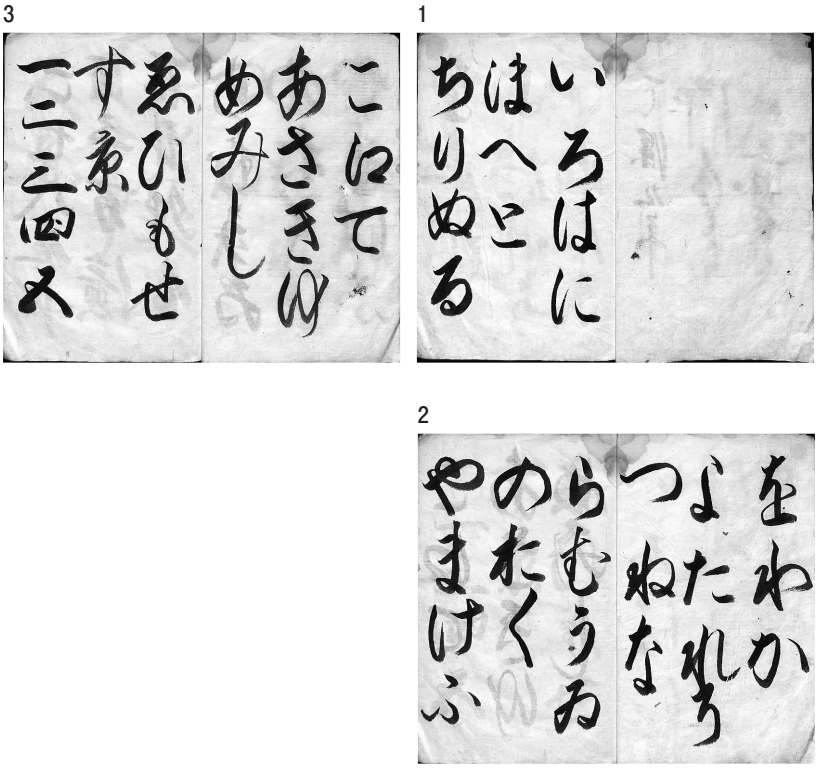


図 4　書写者不詳・天保 9 年写「御手本」より一部。岡田蔵。

してあります。当時の進歩的日本人のイメージとしては，日本語というものは，漢文や候文のどれを取っても平安時代の文法で読み書きをしているというところでちょっと見劣りするわけです。また，漢字というものは殊更に数が多く，学ぶ子供を苦しめ，しかも大人になっても誤字をするということで覚えきれないものという扱いです。それに対して西洋語というのは，アルファベットさえ覚えてしまえばすぐ読み書きができそうというイメージがある。つまり，漢字では必要になる文字を覚える時間なども，アルファベットには必要ないということで，合理的で，遅滞がないように見えたというところで，国語や国字を改良するという問題が設定される。次は，小西信八という東京聾唖学校の初代校長を務めた人物が教育論説誌に

書いた文章の一部です。彼は平仮名専用主義，つまり平仮名だけで日本語を書こうという人だったので，大分読みにくいと思いますが，「いぎりすのだいせいぢか ぐら-つとすとん うぢわ いぎりすことばの うちの ひびかぬ もじを はぶきて かく ことに あらためたらば いぎりすの き-よ-おいくひ 一ねんに五〇 まんぽんどを（わが 五ひ-やく まんえん）けんやくし，こども ひとりの き-よ-おいくに 一二〇〇じかんを はぶき うると いわれた ことが あります，わが くにでも かな ばかりで よみかきする ときわ 一ねんに 七〇〇〇まんえん を けんやくする ことができると いう くわしい しらべがきを じじしんぽ-おに みた ことが あります，」（小西信八？「せめてわかなのかたちでもきめたい」『教育時論』526，1899）と書いてあります。ちょっと注釈が必要なんですけれども，一番最初にイギリスの大政治家グラッドストンとありますが，これはイギリスの首相を務めたウィリアム・エドワード・グラッドストンのことではなく，イギリスの科学者で英語の綴り字を改良しようとした運動をした科学者にジョン・ホール・グラッドストンという人がいて，その人を混同した議論であり，大政治家というのは間違いです。二つ目の「ひびかぬ」仮名文字というのは何かというと，黙字の E というのが英語のつづりにはあって，例えば MAKE の E は読まれない文字であるということで黙字の E と言われますが，子供には分かりにくいのでそういうものはなくしてしまおうという運動をしていた人です。「時事新報に見たことがあります」というところは，時事新報はデータベース化がされていないため，いつ頃とも分からないとちょっと調べる気になかなかなれず，実際調べてみたことはありませんが，分かることなら調べてみたいなとは思っています。

ということで，教育問題を解決するという目的で国字改良問題というものが出てきています。それから 20 年ぐらい遅れた明治 30 年ぐらいにならないと，なかなか言葉そのものをどうするかということが話されるようにはなりません。ただし，多すぎる文字は，つまり漢字のことですが，国語国字問題の焦点ではあり続けました。

明治の 10 年代，20 年代前半ぐらいの議論というのはかなり空想的な議

論が多くて，実際書いてあるものを見ても，何をどう扱っていいのか分からないという感じが強くするんですが，明治 20 年代後半になってくると多少足のついた議論がされるようになってきます。その中で重要なのが，帝国教育会という教員組織の中で国字改良を建議した委員会です。そこで今の平仮名，さっきお見せした小学校令施行規則第 1 号表の仮名とほぼ同じ形のものを決議していて，それを文部省が見て使ったんだろうと考えられます。

先程はあまり取り上げませんでしたが，小西信八のような人々はそれまでに 2 回ほど仮名表記の統一試案というものを発表しています。1882 年なので，仮名統一の 20 年前ぐらいですね。いずれもいろは歌の平仮名に捉われない統一を模索したものでした。それはなぜかと言うと，当時の「平仮名」というものは，書く際にそれだけで書くというような性質のものではなく，先程触れた「え」や「お」などのように，今一般的に使わない仮名というものもあったという問題があります。そういう事情で自分たちが普通に使う仮名というものを選ぼうというような意識が彼らにはあったんだろうと思います。ただ実際には，これらは全然実行に移されませんでした。やはり一から選んだというラディカルさが嫌われたんだろうと思われます。実際帝国教育会の決議の中でも寺子屋の仮名，つまり平仮名に沿って文字が選ばれました。それは，いろは歌手本というものから生まれて，明治の学校でも使っていたものなので，それを中心に据えて教育を行っていた小学校教育との整合性もよかったということです。実際，帝国教育会の決議の先進的な箇所は取られていません。つまり，こういう新しい提案は使われずに，古いなじみのあるもので統一されたと考えられます。

最後に，大ざっぱにまとめれば，平仮名は 19 世紀末から 20 世紀半ばにかけて統一されたということをお話ししてまいりました。今までは大体こういうところを研究してきていて，そのやり残しや，先ほど申し上げたような，平仮名というものはどういう体系を持っていたのか，どのように認識されていたのかということをこれからやっていきたいと考えております。

若干オーバーしたと思いますが，以上です。ありがとうございました。

○司会　では質問いかがでしょうか。

○質問者　二つ教えてください。一つは，変体仮名というか，統一される以前にたくさんあった仮名というのは，どうやって書き分けていたのか分からないので，全く恣意的に行ってそのときの気分で書き分けていたのか，それとも何らかの法則性のようなものがあったのかということを教えていただきたいと思います。

二つ目は，歴史の話で，明治 33（1900）年に，一旦統一されて学校教育の中では，それ以前からだと思いますけどそれが使われるようになって，変体仮名というのは基本的に使わなくなったけれども，1910 年に教育の中で変体仮名が復活してそこから 1930 年まで 20 年間変体仮名が，学校教育の中で，また教えられるというような，ただ教えられ方にはいろんな揺れというか，とまどいもあったというふうな話だったと思います。まず復活した経緯，なぜ 1910 年に変体仮名をまた，もう一度学校教育の中に取り入れなければならないということになったのかということと，1930 年にそれをなぜもう 1 回止めようとなったのかを教えてもらいたいと思います。

○岡田氏　ありがとうございます。

一つ目ですが，活字印刷で字体が変えられてしまうということを，最初のほうにお示ししたかと思うんですが，かなり美的な感覚といったものが優先されたようではあって，必ずしも機能的な理由に基づいて変体仮名が使われていたわけではなさそうです。ただ若干，語が始まる文字とそれ以外の文字とで，英語の大文字と小文字のような間柄で使い分ける傾向はありましたが，それは法則としてあるのではなく，かなり恣意性が優先されるようではあります。なので，そういう性質も変体仮名が廃止される理由の一つであったと思われます。

二つ目のご質問ですが，1910 年に変体仮名を復活させようとしたことはなくて，巻き添えで復活したというのが事実です。1900 年の小学校令では，変体仮名が廃止されただけではなくて，漢字制限，音読みの表音化というものも行われています。例えば，光という字を昔の仮名遣いでは「く

わう」と書くんですけども，それを「コー」と書くような書き方，棒引き仮名遣いと言われる仮名遣いが音読みに限って採用されます。そこで，棒引き仮名遣いを廃止する目的で保守派を中心に反対が巻き起こり，その棒引き仮名遣いを否定した箇所を削除するついでになぜか変体仮名も復活したという流れになっています。それで，復活はしたんですけども，先程も申し上げたように，韻文に限るというように，文部省がなるべく教えないという姿勢を貫いて，20 年後に，特に何か変わったわけではないんですが，ひっそりと教科書から抹消したという経緯になっています。

○質問者　非常におもしろい研究です。一つの言語が混沌としたところから徐々に近代化と合理化をしていくシステムがあります。しかし，現代言語学の中では，どうしても均一化して合理化していくなかで，人間の個性とか無意識とか文学的なことができなくなって感受性が消えていくと。そこからすると変体仮名は攻撃的であるとも考えられるわけです。そのように考えると，岡田さんの研究は，ずっと合理化の道をおし進んでいるんですけど，変体仮名が文化とか，方言とか，反対の方向については何か，検証したことはありますか。

○岡田氏　そうですね，今までそういうのはやったことはないですね。

○質問者　個性のあると言ったのは例えば本木昌造かな。その人の個性の，その本人の美的感度，それは事実でもあるし，漢字字体から考えると，その字体が書体といいますか，本人のアートなんです。それを抹消して，全部均一化するとアートが消えるというか，文化の大きな損失，こう考えて行くと，変体仮名というのは混沌ですけど，それと同時に一種の人間のパロールとして全部考えるとですよ，パロールはもっと変えれる。これは現代言語学の中ではどのように考えているんですか。

○岡田氏　仮名の使い方とその作家の個性との関係がどのように捉えられるのかというのは確かに課題かなとは思っています。個人的には今のところやったことはないですけども，なかなかどういう意図でこの文字を使ったのかというのを考えるのは難しいところはあるんですけれども，そういう書道的な観点というものなどを踏まえて考えていければというふうに

思っています。

○質問者　もう１個，この変体仮名を読んでみると，主観的な美的なそういう面があるんです。もう一つ，音声としては，傾向としてはどのように考えているのか，変体仮名の音声，漢字の音声，そして均一化した言語の中の音声，音声とその書く文字として，視覚としてものを表現する漢字ですると。

○岡田氏　基となる漢字をどのように書き手が意識していたのか，読み手が意識していたのかというのは，かなり教養の違いが出るものだと思います。池原などはかなり教養のあるほうなわけなので，もしかしたら背後にある漢字の音というのを聞きながら書いていたのかもしれませんが，一般庶民レベルではそういうことはなかったというふうには思います。個人的にはこういう教養人のものより，庶民のものに興味があるので，そこまでこういうことを考えたことはないんですけども。

○質問者　先ほど，新聞社によって変体仮名が消える時期に差があるというお話でしたよね。それは保守的か革新的かということを表してるんですか。

○岡田氏　多分そういうことだと思います。横浜毎日新聞はその当時はかなり革新的で。

○質問者　朝日の場合は，大阪と東京で違いがあったと，どちらか，地域的な性格を表してるんですか。

○岡田氏　そうですね，関西のほうが遅くまで残っていたようです。

○質問者　その大和仮名とかが意識されだしたのが中世末期という話なんですけれども，その辺と仮名遣いとかというのは何か関係があったりするんでしょうか。

○岡田氏　それはちょっと分からないですね。その平仮名というものが一番最初に出てきたのが，歌学とかというものとも特に関係のある場面ではなかったりするので，どういうところから平仮名という言葉が出てきたのかというのはちょっと問題として残っています。禅僧の詩文の中に出てくるのが初出例として報告されています。

○質問者　ありがとうございます。

国学者は変な仮名遣いをするというのがあるんですけれども，何かそれは何か理由があったりするんでしょうか。

○岡田氏　国学者が変な仮名を使うのは，要するに古事記とかの仮名を自分の著作に取り入れたいという動機なので，それ自体は理由があることではあります。

○質問者　それというのは，土地とか場所とかで何か違いというのは出てくるんですかね。

○岡田氏　土地とか場所ではあんまりないと思うんですけど，流派が多少，鈴廼屋一派と気吹舎一派では若干違うということはあります。

○質問者　先ほど，辞書の類いがないという部分，でも今はすでにそうそうこう累積されていて，誰がどんなふうな使い方をするかみたいな，把握されてますよね。あれを網羅する作業は一切ないんですかね。

○岡田氏　そうですね，あんまりそれをみんなで集めようという作業は進んで，個別分析が若干積み重なってきているという段階かなとは思います。ただ，皆さん，その仮名を分ける基準が一致してないので，それを単純に集めるということも難しくて，個人的にはそこをある程度統一した分け方をできるようにしていくべきではないかなと思ってるんですけど，あんまり，そんなことしてもしようがないんじゃないかというふうに言われてしまったりもします。

○質問者　ちょっと教えていただきたいんですけど，TRON のプロジェクトで坂村さんたちが，要するに異体字を集めるということをしましたよね。対象物が少ないわけですから，要するにバリエーションというのは有限で，実際やろうと思えばできるかなと思うんですけども，完全に網羅するということはわけないですよね。

○岡田氏　そうですね，やっぱり基となる漢字が自由に選べてしまうということと，その崩し方がやっぱりバリエーションがちょっと定めにくいというところがあって，敬遠されたところはあるのかなというふうに思います。ただ，それ自体はやはり用例主義でやっていけば埋まっていくことだ

とは思うので，そういうふうにやっていけるんじゃないかなとは思うんですけど。

○質問者　古文書の自動解析とか，そういったときにこれ使えますよね。

○岡田氏　そうですね，はい，現に使われています。

○司会　まだあれば，もう一方ぐらい。

○質問者　中世末期にいろは仮名が生まれた情況とか，なぜそれが生まれたかいうのは。

○岡田氏　いろは仮名が生まれたのと，平仮名という名前ができたのはちょっと時代が違っていて，いろは仮名ができたのは恐らく鎌倉前期ぐらいではないかと思います。そういうものができたのは，やはり，子弟の教育に何か平仮名のお手本があったほうがいいということでできたのかと思われます。その時代によく庶民に理解された平仮名の中で特に形の取りやすいものが選ばれたのではないかというようなことが言われています。ちょっとその時代の資料が，やはり潤沢ではないので，なかなか確実なことは言えないんですけども。

○司会　どうでしょう。よろしいですか。

では，何かあったら７時半からのオンラインの懇親会で伺いましょう。

それでは時間になりましたので，これで第８回の人文学会を終了したいと思います。御登壇下さいました岡田先生と谷端先生，どうもありがとうございました。

大学生等の依頼表現の変化

丸　島　　歩

1．はじめに

ナカミズ（1992）では日本語母語話者（大学生）と日本語学習者（留学生）の学校場面における日本語での依頼表現について調査を行っている。ナカミズ（1992）での主旨は非母語話者の表現を母語話者と比較することであったが，論文が発表されてからすでに 30 年近く経過しており，母語話者の言語使用に変化が起きている可能性があると考えた。本論文は現在の大学生等の依頼表現について行った調査結果を分析し，ナカミズ（1992）と比較したものである。

2．先行研究

日本語の依頼表現についての研究は，母語話者の表現を相手との関係や依頼の負担度と関連付けて分析したものと，日本語学習者の中間言語分析や日本語教育への応用を見据えて学習者の依頼表現と比較するものとに大別できる。

岡本（1986）では男子大学生を対象に，同性で同学年の親しい人と疎遠な人に 6 つの依頼の場面でどのような表現を用いるかを質問紙形式で調査を行っている。親しい相手には「－て［よ］」「－てくれ［よ］」等の依頼型，疎遠な相手には「－てくれ（る，ない）［か］」「－てもらえ（る，ない）［か］」等の意向打診型が特に多く用いられていた。また，疎遠な相手に対してより敬語を伴った表現が多かった。依頼型より意向打診型のほうが意味的に間接性を持っており，疎遠な相手にはより間接的な表現が用いられると言

える。さらに岡本（1986）では依頼された相手のコストの高さを含めた実験課題を，口頭での回答による調査で行っている。コストが低いほど依頼型が，高いほど意向打診型が用いられる傾向があった。また，コストが低い方が依頼の際の文節が短い傾向も見られた。

高村（2013）では，大学生と大学院生を対象にアンケートを行い依頼内容の負担度にも注目して分析を行っている。その結果，負担度が大きいほど「もらう型」の割合が大きくなった。この傾向を高村は，「もらう」のガ格は依頼者であるため，「相手が自分に対して何かをしてくれるという意識よりも自分が何かをしてもらうという意識がより強く」なるのではないかと述べている。さらに，負担がおおきいと「否定型」を用いる割合が大きくなるという。高村はこの理由を「相手が依頼を断りやすくなる」「依頼者の腰が低いという印象を受ける」と説明している。また，負担が小さくても女性は男性に比べて「もらう型」を多く用いるといい，これを「「女らしさ」に含まれていた気遣い・繊細さを表現するため」と説明している。さらに「～してもらってもいい（かな）／もらうことってできる（かな）」「～してほしいんだけど＋α」のような非常に婉曲的な表現を多く使うという結果が得られている。

平川ほか（2012）では，相手にものごとを頼む際の表現を要求表現として，ポライトネス理論に立脚して要求表現の使い分けに及ぼす社会的距離，社会的地位，要求量の 3 要因が与える影響について大学生を対象に質問紙を用いた場面想定法による実験を行っている。その際，丁寧度と間接度を区別して分析を行っている。その結果，3 要因の認知が高まると丁寧な表現が使用されたが，間接度には影響を及ぼさなかった。

日本語教育への応用を目指したものとしては金（2000）などがある。金（2000）では，授受補助動詞である「～てくれる／くださる」「～てもらう／いただく」に焦点を当て，東京か東京周辺に住む日本語母語話者 300 名にアンケート調査を行っている。その結果，聞き手が家族の場合は「くれる型」がもっとも多く用いられた。聞き手が家族以外の場合は，中学生と友人は「くれる型」，先輩と先生は「いただく型」がもっとも多かった。

槌田（2003）では，日本人学生と韓国人留学生の依頼の談話ストラテジーを語用論的ポライトネスの観点から比較している。日本人学生は「前置き」を難しい依頼内容の場合や目上に対して使用しているのに対し，韓国人留学生は目上にしか使用していなかった。また文末表現については，日本人学生は目上に対しては「言いさし[1]」を，同級生相手には「言い切り」を使用しているのに対し，韓国人留学生は易しい依頼内容の場合と相手が同級生の場合に用いており，日本人学生よりも「言いさし」の使用率が少ないという違いが見られた。

和田ほか（2010）では，日本語母語話者，中国語母語話者，韓国語母語話者の大学生・大学院生，日本語学習者は上級者に限定して，依頼用件の負担度，親疎関係，上下関係の因子を組み合わせた談話完成テストを用いて調査分析が行われた。分析は特に前置き表現を中心に行われている。中国語母語話者は日本語の依頼で「すみませんが」や「すみませんが，よかったら～」という前置きを多用しており，これは中国語での「如果的方便的話」にあたる表現で，言語語用論的転移であると指摘している。韓国語母語話者も日本語の表現では本題のまえに「すみませんが」を多く用いている傾向が見られた。これも韓国語による依頼表現をそのまま日本語に置き換えたものであると考えられる。

昨今の新しい言語行動に含まれる依頼表現としては，携帯メールを扱った大坂（2014）などがある。4年制大学の学生99名に対して，自己主張場面として3つの場面を設定した質問紙調査を行っている。場面の一つとしてアルバイトのシフト交代の依頼が含まれている。正当性が低い条件のほうが高い条件より，女性のほうが男性より有意に文字数が多かった。また，正当性が低い条件のほうが高い条件より有意に謝罪の回数が多かった。

本稿で比較対象とするナカミズ（1992）も母語話者と学習者である留学生の日本語での依頼表現を明らかにしたものである。ナカミズ（1992）では中国人，韓国人，アメリカ人の日本語学習者と日本人大学生に質問用紙

[1] 文末を言い切らない中途終了発話のことである。

を用いて親疎関係，聞き手が目上か同列か，依頼の負担に分けて 6 つの場面を用意し，どのように依頼するかを問うている。質問紙で得られた回答内容を確認するために，口頭で質問する場合もあった。結果から依頼の発話行為全体の枠組みを示したうえで，依頼表現そのものの言語形式の分析も行っている。「V＋たい形」「V＋ほしい」などの「願望表現」，「……わけにはいかない」「V＋いただけない」などの「聞き手の都合を聞く表現」，「V＋ください」などの「直接的依頼表現」が観察された。この中では「聞き手の都合を聞く表現」が多く「願望表現」は少なかったが，日本人学生も留学生も聞き手が目上，特に負担が軽い依頼の場合には「願望表現」が比較的多く使われていた。また，日本人学生は親しい同等の相手に軽い依頼をする場合には「くれる」の否定形を用い，親しくない同等の相手にはより丁寧度が高いと考えられる「もらえる」の否定形が用いられていた。相手が親しい同等の者でも以来の負担が重い場合は「もらえる」の否定形が多く用いられていた。留学生の場合はこの親疎や依頼の負担の重さを「くれる」の否定形から「もらえる」の否定形への切り替えではなく，常体から丁寧体への切り替えで行っていた。さらに，聞き手が同等の相手には「くれる」「もらえる」の否定形が多く用いられていたが，それに「(か) なぁ」「(か) しら」がついている場合があった[2]。

3．方法

ナカミズ（1992）では依頼する相手を親しいクラスメート，親しくないクラスメート，親しい教員，親しくない教員の 4 パターン，計 6 場面を設定して調査を行っている。本研究ではまず，ナカミズ（1992）と同様の項目で数名の大学生を対象に予備調査を行った。その結果ナカミズ（1992）とは異なり，立場が同等であるクラスメートに依頼する際には LINE 等のコミュニケーションアプリを用いることが多いというコメントが得られた。

[2] これらの表現をナカミズ（1992）では「ぼかし表現」としていた。

そこで，本調査では 6 場面のうちクラスメートを相手として設定をしている 3 場面を口頭の場合と LINE 等の場合に分割し，計 9 場面で行うことにした。調査はオンラインアンケートサービス Google form を利用し，対象者は日本国内の大学・短期大学・専門学校に通う学生とした。回答の前に通っている学校の所在地[3]と性別，生年月を回答してもらった。調査項目を表 1 にまとめる。なお，回答は全て自由記述とし，口頭場面については「直接会って頼む場合，どのような行動をしてどのように言うか，セリフも含めてできるだけ具体的に答えてください。」，LINE 等で依頼する場面では「LINE，WeChat，KakaoTalk 等を使って頼む場合，どのようなメッセージを送るか，できるだけ具体的に答えてください。絵文字を使う場合は文字化けのおそれがあるので，「[4](汗)」「[5](笑顔)」のように絵文字のあとにかっこ書きで絵文字の意味を添えてください。」のような説明を加えた[6]。

4．結果

回答者は 41 名で，全員が日本人学生であった。そのうち 39 名は北海道の大学に通う大学生であった。男性 15 名女性 25 名で[7]，1 名を除いて 1998～2001 年の生まれで回答時の年齢は 18～22 歳であった。依頼表現そのものについてはほとんどの回答者が述べていたが，その前後の言動について何をどの程度記述するかについてはかなりの個人差があった。そこで本稿では依頼表現そのものに焦点をしぼって分析することとする。

---

3 地域性を考慮する場合に言語形成期を過ごした場所をデータとすることが多いが，項目が大学等での場面に限定されているため，言語形成期よりも学校の所在地が重要であると考えた。

4 実際には丸括弧の前に汗をかいていることを示す絵文字が表示されている。

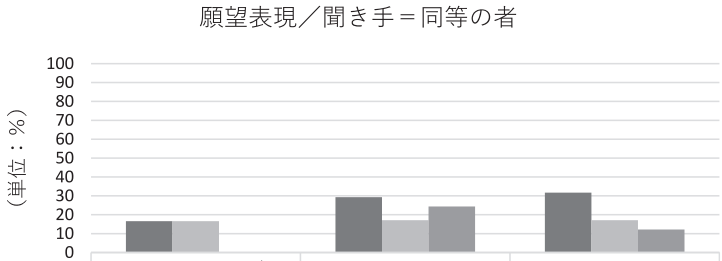
5 実際には丸括弧の前に笑顔の絵文字が表示されている。

6 本調査ではオンラインで行ったこともあり，あらかじめ詳細な指示が必要であると考え，このような説明を付すこととした。

7 性別について「答えたくない」と回答した回答者が 1 名いた。

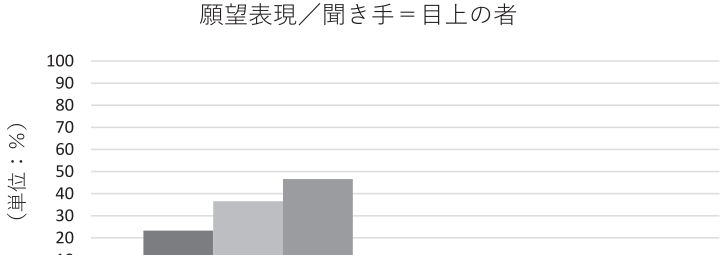
表 1：調査項目一覧

場面	質問項目	口頭／LINE 等	同等／目上	親疎	頼みやすさ
場面①A	あなたは昨日気分が悪かったので，大学の講義を休みました。その講義のノートを親しい日本人のクラスメートに貸してもらうように頼みたいと思っています。その時にあなたはどうしますか。	口頭	同等	親しい	頼みやすい
場面①B		LINE 等			
場面②A	あなたは昨日気分が悪かったので，大学の講義を休みました。その講義のノートを親しくない日本人のクラスメートに貸してもらうように頼みたいと思っています。その時にあなたはどうしますか。	口頭		親しくない	
場面②B		LINE 等			
場面③	明日あなたは大学の授業で発表する予定でしたが，週末に友達があなたのところに遊びにきたため，発表の準備ができませんでした。そこで，発表の日を延期してもらうように先生に頼みたいと思っています。その授業の先生はあなたとあまり親しくない日本人の先生です。その時にあなたはどうしますか。	口頭	目上	親しくない	頼みにくい
場面④	明日あなたは大学の授業で発表する予定でしたが，週末に友達があなたのところに遊びにきたため，発表の準備ができませんでした。そこで，発表の日を延期してもらうように先生に頼みたいと思っています。その授業の先生はあなたと親しくしている日本人の先生です。その時にあなたはどうしますか。	口頭		親しい	
場面⑤	大学のレポートを書くためにあなたの先生の部屋にある本を貸してもらうように先生に頼みたいと思っています。その先生はあなたと親しくしている日本人の先生です。その時にあなたはどうしますか。	口頭		親しい	頼みやすい
場面⑥A	あなたはひどい風邪をひき，2 週間入院することになりました。少し前に旅行をした時，お金を使いすぎたので，今入院費を払うお金を持っていません。親しい大学の友達に 5 万円貸してもらうように頼みたいと思っています(1 カ月後お金を返すと約束する)。その時にあなたはどうしますか。	口頭	同等	親しい	頼みにくい
場面⑥B		LINE 等			



	エレン･ナカミズ（1992）	口頭（2020）	LINE等（2020）
場面 1	16.6	29.3	31.7
場面 2	16.6	17.1	17.1
場面 6		24.4	12.2

図 1：願望表現／聞き手＝同等の者



	エレン･ナカミズ（1992）	口頭（2020）
場面 4	23.3	12.2
場面 3	36.6	7.3
場面 5	46.6	12.2

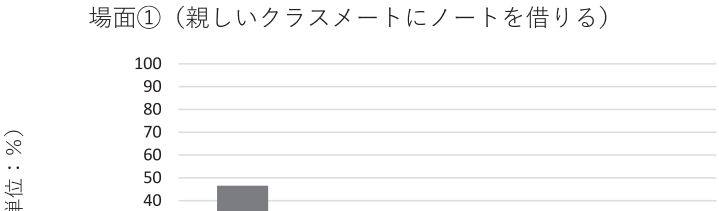
図 2：願望表現／聞き手＝目上の者

まず，願望表現の使用について比較したい。ナカミズ（1992）では依頼の際に目上相手に願望表現を用いることが多かったが，本調査では同等の者相手の場合の方が願望表現をよく用いる傾向があった（図 1，2）。また，ナカミズ（1992）では親しい教員に軽い依頼をする場合（場面 5）で特に願望表現が多く使われており，依頼の内容が願望表現の使用に影響を与え

ていることが見受けられる。本調査では同等の相手でも親しい相手に願望表現をより多く使う傾向があった。ただし頼みにくい内容（場面 6 ）の LINE 等での依頼の場合は願望表現が使われる傾向が少なかった。願望表現を使用するか否かの選択は，親疎や依頼内容だけでなく，コミュニケーションの方法にも影響を受けていることがわかる。

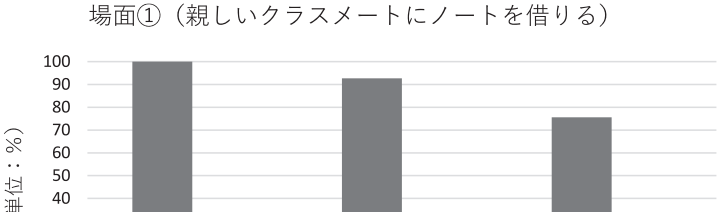
次に，「クレナイ」形と「モラエナイ」形，常体と丁寧体の使用状況を見ることとする。ナカミズ（1992）同様，本調査でも親しくないクラスメート（場面 2 ）や頼みにくい依頼（場面 6 ）では「クレナイ」より「モラエナイ」を使う割合が高くなった。この割合には口頭か LINE のようなテキストベースでの依頼かはあまり影響がないと思われる（図 3 ～ 8 ）。ただし，重い依頼（場面 6 ）においては LINE 等では「くれない」の割合がやや高くなっている。ナカミズ（1992）では親しいクラスメートには常に常体を用いるが，本調査では親しいクラスメートでも丁寧体を使うケースが見られた。口頭より LINE 等での場合に，親しいクラスメートより親しくないクラスメートの場合に，軽い依頼より重い依頼の場合に，それぞれ丁寧体が用いられる割合が高くなっている。

次に，文末の和らげ表現についての比較を行う。ナカミズ（1992）ではクラスメートに依頼をする場合に終助詞「（か）なぁ」「（か）しら」を使うケースが見られたが，本調査では少なかった（図 9 ）。特に「かしら」は全く観察されなかった。ナカミズ（1992）では親しくないクラスメート（場面 2 ）や重い依頼（場面 6 ）で特によく使われる傾向があり，頼みにくい場合にこのような表現が多用されると結論付けている。本調査では口頭では同様の傾向が見られるが，LINE 等では親しくないクラスメート（場面 2 ）での使用頻度は低く，単純に頼みやすさと相関しているわけではないと考えられる。本調査では「～（もらえ）たりする？」「～ことってできる／可能？」など，ナカミズ（2020）とは異なる和らげ表現が散見された。



	エレン･ナカミズ（1992）	口頭（2020）	LINE等（2020）
くれる（否定）	46.6	19.5	17.1
もらえる（否定）	3.3	2.4	4.8

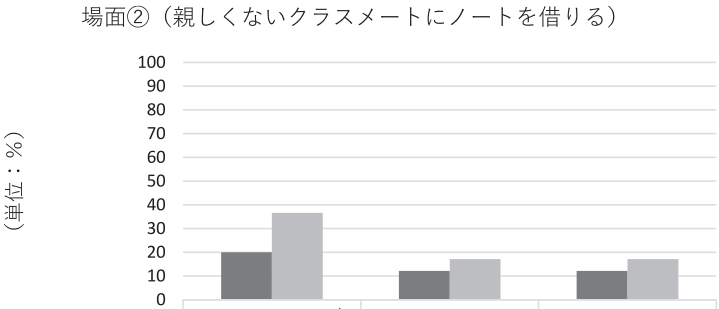
図 3：「くれる」「もらえる」の否定形（場面①）



	エレン･ナカミズ（1992）	口頭（2020）	LINE等（2020）
常体	100	92.7	75.6
丁寧体	0	2.4	22

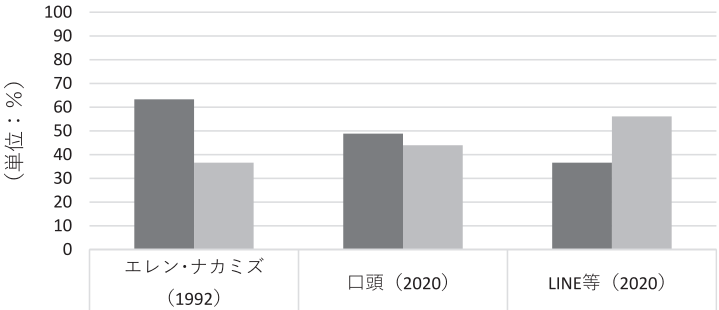
図 4：「常体」「丁寧体[8]」（場面①）

[8] 本調査で丁寧体と常体の合計が 100％にならないのは，具体的な依頼表現について明記していない回答も含まれているためである。



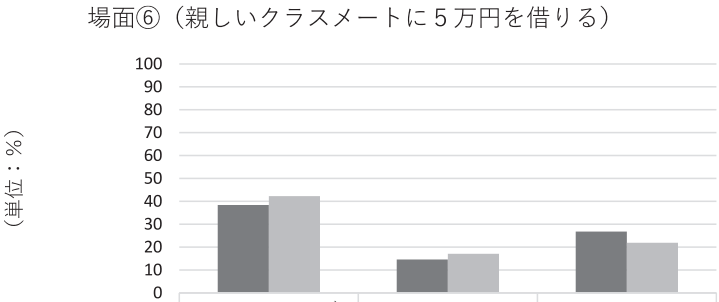
	エレン･ナカミズ（1992）	口頭（2020）	LINE等（2020）
くれる（否定）	20	12.2	12.2
もらえる（否定）	36.6	17.1	17.1

図 5：「くれる」「もらえる」の否定形（場面②）



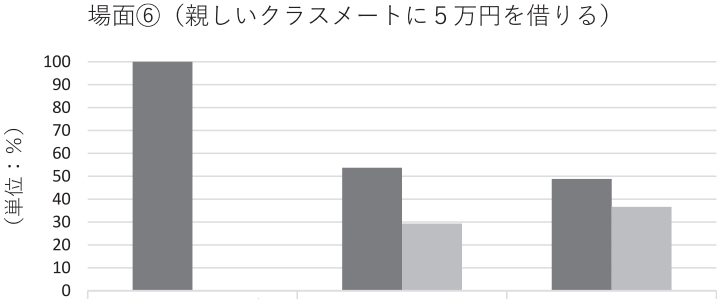
	エレン･ナカミズ（1992）	口頭（2020）	LINE等（2020）
常体	63.3	48.8	36.6
丁寧体	36.6	43.9	56.1

図 6：「常体」「丁寧体」（場面②）



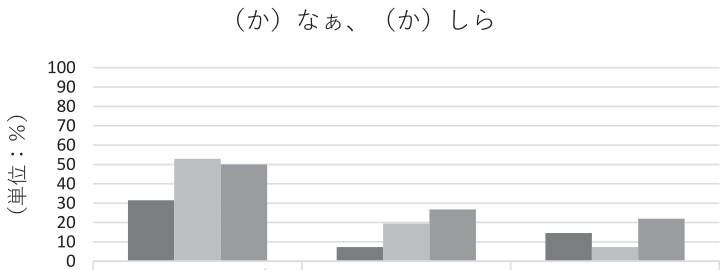
	エレン･ナカミズ（1992）	口頭（2020）	LINE等（2020）
くれる（否定）	38.4	14.6	26.8
もらえる（否定）	42.3	17.1	21.9

図７：「くれる」「もらえる」の否定形（場面⑥）



	エレン･ナカミズ（1992）	口頭（2020）	LINE等（2020）
常体	100	53.7	48.8
丁寧体	0	29.3	36.6

図８：「常体」「丁寧体」（場面⑥）



	エレン･ナカミズ（1992）	口頭（2020）	LINE等（2020）
場面 1	31.5	7.3	14.6
場面 2	52.9	19.5	7.3
場面 6	50	26.8	22

図 9：「（か） なぁ」「（か） しら」

5．考察

ナカミズ (1992) と比較すると，まず大きく異なる点は親しいクラスメートに対する丁寧体の使用の有無である。ナカミズ（1992）では親しいクラスメートに対しては，全く丁寧体が用いられていない。これに対し 2020 年の本調査では，相手が親しいクラスメートであっても丁寧体が用いられる場合があった。特に頼みにくい依頼については 30～40％ほどが丁寧体を用いるという結果が得られた。また多くはないものの，頼みやすい依頼であっても丁寧体を用いるという回答があった。そして，口頭より LINE 等で依頼した場合により丁寧体が用いられやすい傾向が見られた。これは音声言語と文字言語の違いであり，文字言語のほうがより丁重な表現が好まれるためだと推測できる。LINE のような文字言語で即時的に多彩なやり取りができるツールは，1992 年の時点では普及していなかった。このようなメッセンジャーアプリの登場で，大学生の言語生活も大きく変化したと言えるだろう。

丁寧体の使用については，親しくないクラスメートであってもナカミズ (1992) より本調査のほうが，その割合が高かった。特に LINE での依頼で

は，半数以上が丁寧体を用いると回答した。口頭でのコミュニケーションに限って比較しても，より丁寧な依頼表現が好まれるようになったと推測できる。

また，依頼表現の形式は本調査とナカミズ（1992）では大きく異なった。ナカミズ（1992）では「～タイ」「～テホシイ」などの願望表現が現れる割合が高かったが，本調査では願望表現の出現は少なかった。また，ナカミズ（1992）では目上相手に願望表現が用いられるケースが多いが，本調査では同等の者相手に用いられる場合のほうが，その割合が高かった。

さらにナカミズ（1992）では同等の相手に依頼する際の相手の親疎関係や依頼の重さが「クレナイ」と「モラエナイ」の区別で説明できる部分が大きかったが，本調査ではそもそも「クレナイ」「モラエナイ」を用いた割合がそれほど高くなかった。「モラエナイ」については，相手が親しくない場合や重い依頼など，より頼みにくい場面で用いられやすいという傾向は比較的一致している。本調査では多数派を占める表現が現れづらく，依頼表現のバリエーションがより多様化していると考えられる。

ナカミズ（1992）では，「（か）なぁ」「（か）しら」が「ぼかし表現」として挙げられていた。終助詞の「かな」「かしら」の基本的な意味は「自問」であり，語用論的には相手に問いかける場合にも用いられるが，応答の要求性は強くない（任 2006）。この要求性の弱さが依頼表現での和らげとして機能していると言えるだろう。本調査では「かしら」は全く出現しなかった。「かしら」は女性語，「かな」は男性語とされることが多いが，任（2006）は「場面的にも文法的にも「かしら」を使いうる環境があるにもかかわらず実際の使用が少ないということは非常に興味深いことである。「かしら」は女性性の強い表現形式とされるが，日常の生活では，「かしら」を使いうる状況であっても，「かな」を使用するのである」と述べており，「かしら」が役割語的に機能することがあると指摘している。現在の若年層においてはほとんど「かしら」は用いられないと考えて良いだろう。では性別を問わず「かな」を用いるようになったかと言えば，本調査では「かな」の出現も多くなかった。それ以外の和らげの機能を有すると考えられる表現と

して「～(てもらえ) たりする？」「～ことってできる／可能？」等，ナカミズ（1992）で言及されていない形が散見された。現在の若年層においては，「かな」の使用は少なくとも依頼における和らげの機能としては限定的になり，新しい表現にとって代わられつつあると言えるだろう。

6．展望

以上のように，ナカミズ（1992）と本調査で日本語母語話者の学生の依頼表現にさまざまな相違点があることが観察された。親しい友人間でも丁寧語を用いるようになったり，依頼の際に願望の表現があまり用いられなくなっているといった言語形式の変化も大きいが，この 30 年近くの間でモバイルデバイスが普及したこともあり，そもそも若年層のコミュニケーションの方略は大きく変化していると考えられる。その証左として，口頭で依頼をする場合の設問でも「LINE か電話で連絡する」と回答しているものが散見された。また，場面⑥のように非常に負担の重い依頼についての設問では「友人に借りず親に相談する」のようにそもそも友人に頼らないという回答も見られた。ナカミズ（1992）でそのような「直接口頭では頼まない」「友人には頼まない」という回答がどのくらいあったかは示されていないが，この 30 年で友人関係やそのコミュニケーションの手段が大きく変化している可能性も考えられるだろう。

また，世代差だけではなく地域差の影響がある可能性も考慮しなければならないと考える。本調査での回答者はほとんどが北海道の大学等に通う学生であったが，ナカミズ（1992）では回答者の出身地や居住地は示されていない[9]。両者の地域的な差異が大きいかどうかはわからないが，地域差が依頼表現やその発話行為にどの程度影響したかについては，現在の若

[9] 「V＋もらわれへん」「V＋くれへん」など関西方言での例が挙げられていること，筆者が論文発表当時，大阪大学大学院の大学院生であったことから，大阪やその周辺に居住する学生に対して調査が行われた可能性が高い。

年層の依頼表現にどのような地域差があるかについての調査が必要だろう。今後の研究の進展が望まれる。

日本語の発話行為の研究は先行研究の項で述べたとおり，日本語教育を見据えて行われるものも多い。若年層のコミュニケーションの方略の時間的変化が激しいことに鑑みれば，ナカミズ（1992）のような母語話者と非母語話者の比較研究を，そのまま教育に援用するのは必ずしも望ましいとは言い切れない。これらの基礎研究の知見のどの部分を教育に活用するかは慎重な検討が必要であるとともに，若年層の発話行為に関する研究が引き続き盛んに行われることを期待したい。

謝辞

本論文は，2021 年 3 月に行われた第 45 回日本社会言語科学会研究大会でのポスター発表をもとに加筆・修正したものである。発表時にコメントやアドバイスをくださった方々に御礼申し上げる。また，筆者が 2020 年度に北海学園大学で担当した人文学部日本文化学科 3 年生対象のゼミナール「日本文化専門演習Ⅰ」内で調査項目の検討を行った。大学生の言語行動について積極的に意見を述べたり，回答への呼びかけを行ったりしてくれたゼミ生達に感謝を述べたい。

参考文献

エレン・ナカミズ（1992）「日本語学習者における依頼表現 ── ストラテジーの使い分けを中心として ──」『待兼山論叢　日本学篇』26，49-69.

大坂綾（2014）「正当性の文脈が携帯メールによる自己主張方略に及ぼす影響」『北星学園大学大学院論集』 5，115-127.

岡本真一郎（1986）「依頼の言語的スタイル」『実験社会心理学研究』26（1），47-56.

金昌男（2000）「日本語母語話者における依頼表現の使用実態について ──「～てくれる／くださる」「～てもらう／いただく」を中心に ──」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 3，30-43.

高村英里奈（2013）「依頼表現について ── 文末表現の焦点を当てて ──」『東京女子大学言語文化研究』22，39-51.

槌田和美 (2003)「日本人学生と韓国人留学生における依頼の談話ストラテジー使い分けの分析 ── 語用論的ポライトネスの側面から ──」『小出記念日本語教育研究会論文集』11，41-54.

任利（2006）「「かしら」「かな」における性差の史的変遷」『筑波日本語研究』11，47-66.

平川真・深田博己・樋口匡貴（2012）「要求表現の使い分けの規定因とその影響課程 ── ポライトネス理論に基づく検討 ──」『実験社会心理学研究』52-1，15-24.

和田由里恵・堀江薫・吉本啓（2010）「依頼表現における日本語学習者の中間言語 ── 中国語母語話者・韓国語母語話者の母語転移」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 5，171-177.

Kazuo Ishiguro and Transgenerational Cosmopolitanism

Shinya Morikawa

Introduction

Kazuo Ishiguro was infuriated in his essay that appeared in the *Financial Times* in 2016. In the essay written immediately after the result of the Brexit referendum set off the political earthquake across the globe, Ishiguro wrote without hesitation that he was "angry towards those who voted Leave." Brexit would, Ishiguro argued, be a wrong decision because it would probably bring about the collapse of the pan-European ideal of the EU as "a much-envied region of liberal democracies living in near-borderless friendship." But he was not angry merely because of the imminent crisis of the near-borderless friendship in Europe and the political mayhem caused by the then prime minister David Cameron, but also because the referendum outcome suggested that more than half of the British population no longer cared deeply about a fundamental attitude that Britain had nourished for the last seventy years towards people from outside. Ishiguro wrote that "[t]he Britain I know — and deeply love — is a decent, fair-minded place, readily compassionate to outsiders in need." Decency, fair-mindedness, and compassion were, Ishiguro suggested, being replaced by hatred, discrimination, and xenophobia on the rampage through Britain. In the essay Ishiguro displayed a hint of desperation by appealing to British people for their "essentially decent heart" and urged them to rethink about the consequences of the country's decision: "we need

to have some faith in the people of Britain [. . .] I still retain that faith." But what really is puzzling about the essay is his claim that Britain is readily compassionate to outsiders in need. A history of the migration to Britain in the twentieth century clearly demonstrates otherwise: a series of Commonwealth Immigrants Acts, the 1971 Immigration Act, and the 1981 Nationality Act considerably restricted immigrants' entry to Britain (Mason 26–28). Although it is universally acknowledged that Britain is, and has been, "a country of immigration" and for the last several decades well known for its multiculturalism, it also contains "hostility" and "multicultural racism" against immigrants in general and ethnic minorities in particular (Panayi 23). It is a little far-fetched to claim as he did, therefore, that Britain has been a country compassionate to outsiders in need. The reality of contemporary Britain is sharply at odds with that of the very Britain Ishiguro evoked in his essay. But if so, where did his peculiar image of compassionate Britain come from?

Ishiguro's faith in the overall generosity and fair-mindedness of British people can be traced apparently to his own childhood in England. He described himself in the same essay as "a 61-year-old man of Japanese birth who has lived here [in England] from the age of five; who has observed and experienced this society from the perspective of a small, visibly foreign child who was for years the only such child in his school or his wider community." The only foreign child notwithstanding (but where were his sisters?), he has never said in any interviews that he had ever encountered racism and hostility in England in his childhood. On the contrary, he often recalls that he was "the focus of attention" at school and in the community where nobody had ever seen any Japanese child before and that he "turned into a performer," quickly becoming popular among other pupils (Morrison 35). For Ishiguro, Guildford — a southern middle-class residential suburb where he grew up — symbolised Britain where the citizens were ready to

show their compassion and munificence to strangers like him, and the fact that he nostalgically associated his racism-free idyllic childhood in Guildford with his idealised view of Britain at large made him shocked to find that Britain as he had known it was rapidly transforming itself into a racist and exclusive country that dared to stop the free movement of people between the Continent and the UK. It is scarcely surprising that Leavers' victory over Remainers, by no matter how narrow a margin, vexed him so much.

It is worth recalling, though, that far back in 1960 Ishiguro's family — his parents, young Kazuo and his elder sister — did *not* necessarily come to Britain for economic need. His father Shizuo used to be a researcher at the Nagasaki Meteorological Observatory and then was invited to work for the National Institute of Oceanography in England, thereby belonging in the world of professional elites. Ishiguro's experience as the son of a visiting scientific researcher must have been quite different from the experiences of those whom he called outsiders in need, that is, economic migrants, refugees, and asylum-seekers in Britain. This brief background history about Ishiguro's family indicates that Ishiguro wrote the essay in question not so much from the perspective of a migrant as from the perspective of an observer (see his locution "who has observed") with a privileged upper-middle-class background who innocently enjoyed the magnanimity of the English. An observer in England from the start, he has been distinct from a majority of other migrants in terms of economic and social status. Ishiguro has been, first and foremost, an observer taking his distance both from the British in general and from migrants to Britain, his distance being writ large in the stance he takes as an outsider extolling the "essentially decent heart" of Britain associated with his nostalgia-infused memories of his childhood in the English suburb. While never ceasing to show a feeling of nostalgia for the magnanimity of British people, he chooses to remain detached from Britain as an outsider. Then how can we explain this stance

of Ishiguro's? From what perspective does he say what he says? One of the conceptional candidates with which to explain this sense of detachment would presumably derive from a much larger and global context of elite migration: cosmopolitanism.

Indeed, so many scholars have been interested in his cosmopolitanism until today (see, for example, Aso 3, 17; Robbins 437; Sim 139; Stanton 23; Walkowitz, *Cosmopolitan Style* 109–130; Waugh 19–20). They attempt in their own way to correlate Ishiguro's works of fiction with contemporary cosmopolitanism widely discussed in the contexts of philosophy, sociology, and literary criticism. The range of their examinations of Ishiguro's cosmopolitanism varies from a brief reference to "cosmopolitan fraternity" (Waugh 20) in *The Unconsoled* (1995) to reading Ryder, the protagonist of the novel, as a metaphor for Britain's ambivalent attitude towards the EU (Stanton 4), though *The Unconsoled* depicts "a multiplicity or diversity of belongings" (Stanton 2). For Bruce Robbins, *The Unconsoled*, apparently anti-cosmopolitan in terms of its focus on family relationships, is actually a novel which is critical of our common sense that family should be prioritised over work and that nation should be privileged over foreign countries and which hence advocates cosmopolitanism (437).

When We Were Orphans (2000), published five years after *The Unconsoled*, "explores," argues Wai-chew Sim, "what transcultural or transnational fellow feeling might entail" between characters of different nationals, Japanese and British (139). Erika Aso regards Ishiguro as a cosmopolitan writer, for Ishiguro's *A Pale View of Hills* (1982), challenging Japanese and Nagasaki myths, calls into question concepts such as home, nation, and belonging, thereby stressing the meaninglessness of wars (3, 17). Rebecca L. Walkowitz, in her book *Cosmopolitan Style: Modernism beyond the Nation* (2006), addresses the cosmopolitan styles of some representative modernist writers and more recent ones including Ishiguro and Salman

Rushdie. According to Walkowitz, Ishiguro's oeuvre is cosmopolitan as it deals with the migration of characters across borders, describing the interrelationship of private (daily-life) and public (international) issues (111). Walkowitz acutely observes, furthermore, that what she calls "critical cosmopolitanism" operates in Ishiguro's works, especially in his early novels, where a critical doubt is constantly being cast on absolute allegiance to any particular causes, and readers as well as the protagonists are necessarily confronted with treasonous self-reflection on their allegiance (109–110). All these previous studies on Ishiguro's cosmopolitanism are largely focussed on the cosmopolitan *aspects* of his novels. What concerns me here is something deeper: what *assumption* works in his cosmopolitan novels? If that assumption really is cosmopolitan, where and in what way has it been shaped in his particular case?

The present paper is going to revisit and explore Ishiguro's cosmopolitanism by placing it in two different contexts: firstly, in the context of the ongoing literary discussions of contemporary cosmopolitanism; secondly, in the biographical context of Ishiguro's family history. Ishiguro's cosmopolitan stance evidently echoes Salman Rushdie's and Zadie Smith's cosmopolitan mongrelisation, but it is simultaneously leaning on Caryl Phillips's and Colm Tóibín's in-betweenness — I have in mind Phillips' *The Final Passage* (1985) and *A Distant Shore* (2003) and Tóibín's *Brooklyn* (2009). Moreover, Ishiguro's cosmopolitanism involves a particular sense of detachment and distance from any specific cultures at hand. Rebecca Suter has recently claimed in *Two-World Literature: Kazuo Ishiguro's Early Novels* (2020) that in his early novels Ishiguro constantly provides two-world visions, which cannot be reduced to any single dominant worldview and which "transcend the limitations of the kind of 'one-world thinking'" (126). While admitting that Ishiguro is a cosmopolitan writer, Suter places more of an emphasis on his "double perspective" (126).

In my view, his "double perspective" as well as his cosmopolitan stance has been formed in part by his childhood experience as an outsider in Britain and partly by his ancestors' (his grandfather's and his father's) experiences of living in the early twentieth-century cosmopolitan and multicultural Shanghai. My argument hereafter is largely predicated on what Mica Nava calls "transgenerational cosmopolitanism" (135). Nava's autobiographical account in the last chapter of *Visceral Cosmopolitanism: Gender, Culture and the Normalisation of Difference* (2007) about her childhood and her family history — she was "the only 'foreigner' in [her] class at the small progressive primary school" in England (Nava 145) — refers to multiple shades of races and nationalities in her family: hence, she argues that visceral cosmopolitanism runs in her family. Ishiguro's family is not so varied in race (his grandparents and parents were Japanese, his wife Scottish, and his daughter Scottish-Japanese) as Nava's is, and unlike Nava's family whose "inclusive dispositions" have been transmitted across generations (135), Ishiguro's family tends to be more detached towards the culture(s) at hand. Nonetheless, as we will see, a similar kind of transgenerational cosmopolitanism runs in Ishiguro's family too.

This paper examines a few representative texts on contemporary cosmopolitanism in order to see how the concept is relevant to Ishiguro and his fictions, *When We Were Orphans* in particular, and then looks into the historical circumstances of Shanghai in the early twentieth century and several English novels set in Shanghai of the same period to reveal their common identity-related characteristics. Also, drawing on Kyoko Hirai's biography of Ishiguro's family, *Kazuo Ishiguro's Nagasaki* (2018), we are to take a glimpse into their intercultural experiences in cosmopolitan Shanghai. My contention will be then that Ishiguro's cosmopolitan worldview has not just been shaped by his distinct childhood experience as a privileged outsider in England but also formed and transmitted to him

through three generations by his ancestors who experienced first-hand the bustle of predominantly cosmopolitan Shanghai in the early twentieth century.

Contemporary Cosmopolitanism and Novels on Mongrelisation

One of the most frequently cited philosophical explorations of contemporary cosmopolitanism is Kwame Anthony Appiah's *Cosmopolitanism: Ethics in a World of Strangers* (2006). According to Appiah, cosmopolitanism demands attempts to understand different points of view from one's own. Stressing, over and over again, that people do not always reach an agreement or consensus on issues (44, 57, 71, 78, 85), Appiah asserts nonetheless that difference is by default the very assumption from which cosmopolitans start to think. This argument is shared by Stuart Hall, a well-known cultural theorist, who writes that "the traces of difference [. . .] make its life important" (30), and in a similar vein David A. Hollinger declares that "[f]or cosmopolitans, the diversity of humankind is a fact" (231). By far more important is, however, the fact that *despite* difference and diversity people are able to "live together" (71) and "live in harmony" (78), according to Appiah. Steven Vertovec and Robin Cohen, editors of *Conceiving Cosmopolitanism* (2002), formulate two fundamental cosmopolitan questions as follows: "Can we ever live peacefully with one another? What do we share, collectively, as human beings?" ("Introduction" 1). The cosmopolitans' endorsement of different points of view and diversity of human beings is not exclusively found in philosophical arguments but in literary criticism as well. Bianca Leggett points to some positive aspect of the contemporary cosmopolitan British fiction which "depicts the 'multiplicity' of connections beyond the nation" (20), by means of which she conjectures that "the possibility of better

worlds," "greater openness, understanding and generosity to both one's immediate community and the world beyond it" would possibly be realised (25). The openness and generosity are exactly what Ishiguro firmly believes lies in the heart of the British.

The cultural relevance of contemporary literature to cosmopolitanism as a worldview is an argument taken up by Appiah, too, who makes an optimistic remark on the feasibility of cross-cultural dialogues between artists and audience through literature and the arts in general. To assume difference in views as a default requires the recognition of "human variety" (Appiah 104), and to recognise the human variety would be a crucial step towards what he calls "[c]onversations across boundaries of identity" (85) or "cross-cultural conversations" (97). One of the best ways of exploring cross-cultural conversations comes, Appiah proposes, through our "imaginative engagement" with a work of art or literature which "speaks from some place other than [our] own" (85). The cross-cultural dialogues initiated by artists moving across national boundaries have very much "enriched and altered the cultural repertories of many people" (Vertovec and Cohen, "Introduction" 3–4).

The cross-cultural conversations by way of our imaginative engagement with migrant literature have undeniably enriched the cultural repertories of Britain. A selective overview of the recent history of British migrant fictions, some of which are generally categorised as post-colonial literature, from the second half of the twentieth century to the twenty-first century proves it is the case. The novels of Buchi Emecheta, V. S. Naipaul, Salman Rushdie, Kazuo Ishiguro, Hanif Kureishi, Andrea Levy, Caryl Phillips, Monica Ali, Nadeem Aslam, and Zadie Smith, among others, describe the communities as well as the private lives of migrants in Britain from their perspectives. Let us look at a few examples. Buchi Emecheta's *Second Class Citizens* (1974) and V. S. Naipaul's *The Enigma of Arrival*

(1987) explore how the migrants attempt to acclimatise themselves to England in the middle decades of the twentieth century, presumably reflecting the authors' own experiences. There are also rather tragic novels like Ishiguro's *A Pale View of Hills* (1982) and Caryl Phillips's *The Final Passage* (1985), both of which depict how the protagonists' migration to England in the mid-twentieth century led to the loss of a member of their families — Etsuko, a Japanese woman, loses her eldest daughter to suicide, and Leila, from an island from the West Indies, brings her husband and their small child to England, yet the husband leaves her for someone else, possibly a white English woman. The overall tragic tone of these migrant novels was substituted, though not entirely, by the provoking yet festive mood of Salman Rushdie's *The Satanic Verses* (1988), a novel which represented a significant turning point in the history of contemporary British migrant fictions. In *Imaginary Homelands* (1991), a collection of Rushdie's literary essays, which cosmopolitans frequently refer to (Appiah 112; Held 58; Waldron qtd. in Hall 26), Rushdie offers the famous proclamation that *The Satanic Verses*, the publication of which resulted in Khomeini's issuing the fatwa against him, "is a migrant's-eye view of the world" and "celebrates hybridity, impurity, intermingling [. . .] rejoices in mongrelization and fears the absolutism of the Pure. *Mélange*, hotchpotch, a bit of this and a bit of that is *how newness enters the world*. [. . .] It is a love-song to our mongrel selves" (Rushdie, *Imaginary Homelands* 394, italics in original). Hybridity, mixture, and mongrelisation permeate contemporary Britain, which in turn makes it possible for us to get more imaginatively engaged with what Appiah calls cross-cultural conversations with works of fiction than ever before, although mixed responses to Rushdie's *The Satanic Verses* betrayed sheer difficulty with which for people with different religions to engage in such fruitful dialogues.

Rushdie's idea of migrants' mongrelisation had a powerful impact on

subsequent novels such as Zadie Smith's *White Teeth* and Ishiguro's *When We Were Orphans*, both published in 2000. *White Teeth* is a novel brimmed with racially and culturally mongrel characters. One of the main protagonists of *White Teeth*, Irie, has both English and Jamaican roots, and her unnamed daughter, referred to at the end of the novel, is more of a mongrel, fathered in blood by either of the Bangladeshi twins, Millat or Magid, and raised by Irie and her Jewish lover Joshua, who himself is "a cross-pollination between a lapsed-Catholic horticulturalist feminist [his mother] and an intellectual Jew [his father]" (Smith 309). Irie's daughter is thus the embodiment of the most mongrel self in the novel: a mixture of black, white, and brown with Jamaican, English, and Bangladeshi roots, interlaced by a Jewish tradition. Mongrelisation is also one of the significant motifs in Ishiguro's *When We Were Orphans*, but it is not so openly endorsed as in Smith's *White Teeth*. In the rest of this section, let us focus on *When We Were Orphans* and how it deals with cosmopolitan mongrelisation.

When Christopher Banks as a child asks Uncle Philip, a young colleague of his father's, for advice on his own English identity in Shanghai at the beginning of the twentieth century, Uncle Philip gives him advice like this:

> Well, it's true, out here [in Shanghai], you're growing up with a lot of different sorts around you. Chinese, French, Germans, Americans, what have you. It'd be no wonder if you grew up a bit of mongrel. [. . .] But that's no bad thing. You know what I think, Puffin? I think it would be no bad thing if boys like you *all* grew up with a bit of everything. We might all treat each other a good deal better then. Be less of these wars for one thing. [. . .] More a mixture. So why not become a mongrel? It's healthy. (*WWWO* 76, italics in original)

There is no doubt that Uncle Philip's discourse endorses mongrelisation. However, the reader here is expected to be extra-cautious about the way in which mongrelisation is innocently proclaimed. Uncle Philip as a character proves highly dubious, for he turns out to be a traitor for Christopher, helping the latter's mother to be taken as a concubine by a Chinese warlord. In the scene above Christopher is not convinced enough by that argument of Uncle Philip's about mongrelisation, for he has been given another piece of advice on his English identity by Akira, his Japanese friend — that his not being an Englishman enough causes silence between his English parents. In the same scene Uncle Philip comes around to Akira's view by saying that "People need to feel they belong. To a nation, to a race." (*WWWO* 76–77). Thus, Uncle Philip ends up offering Christopher two mutually exclusive ideas: cosmopolitan mongrelisation and racial nationalism. These ideas are never allowed in the novel to be reconciled with each other.

The implications of cosmopolitan mongrelisation and racial nationalism in the novel are worthy of a more thorough examination. The irony of the novel is that while the main characters are extremely obsessed with their own national identities, their childhood is totally immersed in the multicultural cosmopolitanism of Shanghai in the early twentieth century. Christopher and Akira strive to construct their identities on the basis of their nations, but cannot help feeling that they never belong to their nations, Britain and Japan, respectively. Akira, a typical Japanese boy of that period, proudly celebrates his Japanese blood, but when he returns to his hometown Nagasaki he is "mercilessly ostracised for his 'foreignness'" by his Japanese schoolmates, his teachers, and even his relatives. His "manners, his attitudes, his speech, a hundred other things had marked him out as *different*" (*WWWO* 89, italics added). So back in Shanghai Akira declares to his English friend that he will never want to go back to Japan

(*WWWO* 99).

Christopher Banks is a more complicated case than Akira, for the former always pretends that he succeeded in mixing well with boys at school in England to which he as an orphan had been taken back after his parents' successive disappearances in Shanghai. His pretension concerning the accuracy of his childhood memory is subtly belied by his encounters with two of his old schoolfriends saying to him that he used to be "such an odd bird" (*WWWO* 5) and a "miserable loner" (*WWWO* 183) at school. Christopher gets quickly frustrated at these allegations and says to himself (and to the reader) that "my own memory is that I blended perfectly into English school life" (*WWWO* 7). But elsewhere he divulges the fact that he became "the butt of some harmless banter" (*WWWO* 79) among English boys in Shanghai in Akira's absence, and yet here too he is very careful to add that those English boys were "all essentially decent sorts intending no real malice" (*WWWO* 79). Christopher's defence of the English boys and the way he uses the phrase *essentially decent sorts* ring a bell and send one back to Ishiguro's statement in his essay in the *Financial Times* — that Britain has an "essentially decent heart." It is noteworthy that both Christopher Banks and Kazuo Ishiguro emphasise the essential decency of the British, correlating it with their own nostalgia-infused childhood memories. But *When We Were Orphans* and Britain after Brexit imply that their image of England or Britain is entirely predicated on strong wishful thinking on their part, on their desire for what England or Britain should be like at least for them.

Christopher's acute sense of failure to belong to England is revealed when he returns to Shanghai as a renowned detective and confesses to a Japanese soldier that "[a]ll these years I've lived in England, I've never really felt at home there. The International Settlement. That will always be my home" (*WWWO* 256). The Japanese soldier, apparently grown-up

Akira, says to him in turn that Shanghai is "like my home village" (*WWWO* 255). However, for them both, the International Settlement is to be a "fragile" place (*WWWO* 256). Christopher ultimately loses his "home village" of the Shanghai International Settlement and then adopts London as his "home" instead at the end of the novel (*WWWO* 313). This means that neither England nor Japan as a country gives them the true feeling of belonging they seek for in their childhood. Torn between their comfort associated with the multicultural conditions of cosmopolitan Shanghai and their childhood obsession with their nationalistic belongings, Akira and Christopher in their adulthood attempt to regain the former. The first half of *When We Were Orphans* provides Akira and Christopher with a cosmopolitan space in which the two kids live in harmony together (although, as we will see, there is a nationalistic rivalry between them), while its second half offers a completely disastrous situation where cosmopolitan Shanghai is irredeemably shattered by different countries at war with one another. While *When We Were Orphans* deals with both cosmopolitan mongrelisation and racial nationalism, these ideologies as such fail to prosper in the novel, a stark contrast to Smith's *White Teeth*, where mongrelisation is hilariously welcomed as reflecting the reality of contemporary Britain. Ishiguro's cosmopolitanism veers away from racial and cultural mongrelisation to in-betweenness or lack of a solid sense of belonging.

Shanghai's Cosmopolitanism and Shanghai-based English Novels

Shanghai at the beginning of the twentieth century when Christopher and Akira grew up was semi-colonised by European countries, the US, and Japan. Wai-chew Sim makes a perspicacious observation that the rivalry relationship between the two children, Christopher and Akira, represents

the "geopolitical jostling for power and influence" between Britain and Japan in Shanghai, casting a shadow on the narrative of *When We Were Orphans* in which these boys — one English and the other Japanese — sneak into a Chinese servant's room in Akira's house in order to steal a bottle, an act which amounts, Sim reads, to their invasion not only of the servant's privacy but also of China's political space. From this imperialistic implication of this small episode Sim directs our attention to "multinational cooperation and collaboration" between Britain and Japan, partially reflected in the two pieces of advice given to Christopher regarding his own identity by Uncle Philip (English) and Akira (Japanese) (Sim 71).

These contradictory representations of Shanghai of the early twentieth century both as the imperialistic victim of the Powers and as the multiculturally thriving cosmopolitan city are observed by Isabella Jackson in *Shaping Modern Shanghai* (2018). Jackson delineates the history of the semi-colonialised modern Shanghai, referring to the large Western-style brick buildings constructed along the Bund as "the transnational colonial presence in Shanghai and China more widely" (2). But she also notes that the "diversity of the International Settlement was celebrated" by the Shanghai Municipal Council "as evidence of the desirably cosmopolitan community" (7). While "not all nationals in Shanghai were equally able to access its cosmopolitanism," Jackson reminds her readers that Shanghai in those days was nonetheless a "truly global city" (35). As a matter of fact, Shanghai in the first half of the twentieth century embraced "more than fifty national groups" (Kong 293). Jeffrey N. Wasserstrom claims that even present-day Shanghai is reconstructing its own past as "a cosmopolitan hub" (120).

There are contradictory views about the extent to which these multifarious Shanghai-landers might have culturally and racially merged into one another. Yasuko Enomoto, for instance, maintains that, for all

Shanghai's cosmopolitan atmosphere, people from different countries were living more rather than less enclosed within their own communities (Enomoto 18–19). The reluctance with which they blended with different nationals from different countries in Shanghai is observed by Edgar Snow in *Far Easter Front*: "But in Shanghai no racial merging could be witnessed. It can be said to have been a slightly strange phenomenon. Here [in the International Settlement] the British have remained British for generations and the Americans are 'one hundred percent' American" (Snow 125, retranslated from the Japanese translation). However, Jianhui Liu, a Chinese researcher, offers a completely different perspective about Shanghai by arguing that "due to the interpenetration between the four spaces [i.e. the old British settlement, the French concession, the Chinese area, and the old American settlement] one could see the crossing and merging of different cultures, rarely detected in other cities, which produced a very cosmopolitan 'chaos'" in Shanghai (Liu 27, my translation). According to Liu, Shanghai used to be a place embodying "freedom," where "people did not belong to any particular country" (Liu 30, my translation).

The last point — Shanghai-landers did not belong by and large to any particular country in the International Settlement — may reverberate with the sense of being an exile acutely felt by the protagonist of a novel set in Shanghai of that same period. Christopher New's *Shanghai* (1985) depicts a middle-class English man, who lands in Shanghai at the beginning of the twentieth century as a customs inspector and then climbs up the ladder of success, becoming eventually a member of the Shanghai Municipal Council. In spite of his well-regarded social status John Denton the protagonist constantly feels he is a stranger in Shanghai. His Jewish friend's tale about "elvers," glass eels, which swim away from where they were hatched across the Pacific to unknown areas of the sea where "they mate, they live, they lay their eggs and then they die" (New 237), metaphorically sums up

Denton's own life. He perennially feels himself "in between" in whatever place he is: "he belonged neither to the world of the *taipans* nor to the world of the Chinese. Like the city itself, neither one thing nor the other" (New 455). His particular sense of not belonging to any specific world is repeated elsewhere in the novel: "If ever he went back there [his home country England], he'd be an exile; it would be foreign to him — more foreign even than when he last returned. And yet he was an exile in Shanghai too" (New 589).

The foreignness one feels towards one's home country is a sort of feeling shared by Christopher Banks in *When We Were Orphans*. For Christopher, born and bred until he was ten in Shanghai, England remains "a foreign land" (*WWWO* 28), although he "returns" to it as an orphan after the disappearances of his parents in Shanghai. England is also "strange" and "inconceivable" for a young English boy, Jim, protagonist of J. G. Ballard's *Empire of the Sun* (1984), temporally orphaned in Shanghai in the midst of WWII (Ballard 13). The sense of in-betweenness or no-belongingness can be found in a more recent mid-war Shanghai-based novel, Keiko Itoh's *My Shanghai, 1942–1946: A Novel* (2016). The novel consists of diary entries written by the protagonist, a Japanese woman arriving in the wartime Shanghai, and the story itself is based on the memories of Shanghai passed down to the author by her own mother. The novel depicts the remains of "cosmopolitan Shanghai" in the 1940s (Itoh 90), although it has been invaded by Japanese soldiers, leading to the protagonist Eiko's "torn allegiances" between Japan and Britain (Itoh 160). Eiko was born and brought up in England and after marrying her Japanese husband moved to Shanghai in the midst of the War. Her "international background" enables her to write her secret diary in English (Itoh 195) and to observe Japan's defeat with "a sense of detachment" (Itoh 316). All these novels explore the sense of in-betweenness or no-belongingness associated with their cultural identity in

cosmopolitan Shanghai of the early twentieth century.

Although "cosmopolitan" Shanghai vanished in 1945, the sense of in-betweenness this city evoked in people living there in the early twentieth century — although all the examples above are from works of fiction — is a sense shared even now in the present-day smaller, more globalised and more migrant world by cultural "orphans" who lost their homes a long while ago which continue being alive only in their childhood memories. Appiah, to whom we have referred earlier as one of the eminent contemporary cosmopolitans, makes a poignant remark, however briefly, on his own personal exile: "I live long way away from the home of my earliest memories. Like many, I return there from time to time, to visit family and friends. And, again like many, when I am there I feel both that I do and that I don't belong" (Appiah 90–91).

The Ishiguros in Cosmopolitan Shanghai

In an interview Ishiguro refers to his fascination with the cosmopolitan Shanghai of the 1920s and 1930s: "I've always been fascinated with that city as it was when my family lived there — what you could call the Old Shanghai [. . .]. It was a very cosmopolitan, decadent city, a kind of prototype for the international cities we have now like New York or London" (Rothenberg). In *Kazuo Ishiguro's Nagasaki* (2018), written in Japanese, Kyoko Hirai provides a detailed account of Ishiguro's family history including the fact that his father Shizuo and his grandfather Masaaki lived in Shanghai in the first half of the twentieth century.

According to Hirai, Ishiguro's grandfather, Masaaki, was born in Shiga Prefecture in Japan in 1884. In 1905, the second year of the Russo-Japanese War, Masaaki at the age of 21 moved to Shanghai and entered Tōa Dōbun Shoin, an elite vocational school for young Japanese men, established in

Shanghai in 1901 (Hirai 30). The school was founded to promote coexistence and coprosperity between China and Japan, and there the students learned a variety of subjects including business and Chinese. Masaaki, on graduating from Tōa Dōbun Shoin, began to work for a Japanese company in China and in his late thirties was headhunted by the Shanghai branch of Toyoda Cotton Mills (related to the present Toyota Motor Corporation) and worked there up until the early 1930s (Hirai 34). Toyoda Cotton Mills imported raw material mainly from the US as well as from China and India and produced cotton thread cloth in Shanghai. Masaaki became one of the two managing directors of Toyoda Cotton Mills, apparently dealing with American businessmen (Azuma 59).

His son Shizuo — Ishiguro's father — was born in Japan in 1920 and spent his first seven years in Shanghai, and thereafter moved with his mother and sisters to Nagasaki leaving their father behind and returning occasionally to Shanghai on his school holidays. Kazuo Ishiguro Papers, archived at the Harry Ransom Center, the University of Texas, Austen, contain some of Shizuo's letters for Kazuo. In one of them Shizuo wrote that their house in Shanghai was located on "Youeng Road" (ie. Yu Yuen Road) near Jessfield Park lying to the west of the International Settlement (see Kazuo Ishiguro Papers, "Dear Kazuo"). Itoh's *Shanghai* describes the factories of Toyoda Cotton Mills located to the north of Jessfield Park (81). Shizuo recalled nostalgically how often he as a young child would go to Jessfield Park where he sat on a stone horse, whose texture he remembered even now. Shizuo also recalled in the letter that his father Masaaki had wanted him to enrol in the British public school nearby, but that the growing political instability in Shanghai in the mid-1920s thwarted his plan. In the conversation with Hirai, Shizuo recollected some of his childhood memories about Shanghai. For example, the house they lived in was so huge that it accommodated a military unit of about twenty English

soldiers from Lincolnshire, who guarded the International Settlement (Hirai 32). Shizuo told his son another episode from the last days of his childhood in Shanghai: before leaving Shanghai he was taken by Masaaki with a gun to meet a Chinese servant of theirs dying from cancer (Hunnewell 50). After the conversation with Shizuo in the late 1990s Ishiguro himself wrote down his memos meticulously and even drew a rough plan of the house in Shanghai — its first floor renovated in traditional Japanese style with *tatamis* and *fusumas* fitted in — on sheets of paper (Kazuo Ishiguro Papers, "Notes: SHANGHAI After Photographs Conversation with DADDY (Shizuo) 4th May '97").

In an interview by a Japanese essayist, Ishiguro emphasises that his father "was raised in the international community of Shanghai" (Agawa 145). He gives another interviewer a caricatural view of his father: "My father wasn't typically Japanese at all because he grew up in Shanghai. He had a Chinese characteristic, which was that when something bad happened, he smiled" (Hunnewell 27). Shizuo's career showed the trajectory of his international career movement: he did his research in the US in the 1950s and moved to Britain in 1960. Shizuo's experience of doing his research abroad might well have paved the way for his decision to move to England with his family. It is possible to make a further conjecture that Shizuo's childhood experience of cosmopolitan Shanghai and his being raised among the English, the American, the Chinese, and many other nationals provided him with many opportunities of gaining intimate familiarity with foreign cultures as such and at the same time taking his distance from them. Ishiguro often refers to the fact that when they came to England in 1960 his parents would hardly adopt English customs at all: "I grew up in this rather odd way where inside my home I had these Japanese parents who wanted to keep Japanese values" (Wachtel 23). Indeed, he says he learned from his father "how to deal with one's life, how to view one's life

with detachment" as well as how "to see something familiar from a little way away. To see it with a slightly cold look, as if one came from another planet" (Fukuoka 28, my translation). Looking back on his childhood days Ishiguro reminisces "a certain kind of distance" he felt towards his surroundings (Wachtel 23): "I wasn't brought up not to respect English customs, but there was this distance" (Morrison 35). Ishiguro links this particular sense of distance to the fact that he eventually became a writer:

> It has to do with my being raised looking at Britain through the eyes of my Japanese parents, with my being raised at a little distance from the society. I regarded what all my friends think either good or evil as just English natives' customs. It meant that I observed Britain with detachment. I suppose it helped my becoming a writer. (Ōno 210–11, my translation)

He speculates that the detachment with which his family looked to their surroundings came from the circumstances in which his family came to Britain; that is to say, they intended to *stay* in England only temporarily: "We have never as such emigrated to England. We didn't actually land in England in 1960 saying, now this is going to be our home, so let's adopt these customs; we were just *visiting*" (Wachtel 23, italics added).

Barbara Ohno recognises in the Ishiguros a sense of freedom from any cultural expectations they must have had back in Japan (138). Rachel Cooke remarks on so strange an impression she had when she met Ishiguro for the first time for her interview: "Kazuo Ishiguro might well be the most peculiar writer I've ever interviewed. [. . .] It is as if he has just beamed down from another planet and must explain everything to you — the Earthling — as if it were news." His parents', particularly Shizuo's, detached attitude towards foreign customs and cultures may have been

shaped far back in his childhood in Shanghai, where the cosmopolitan atmosphere — where multifarious cultures coexisted with people intermingling with, but culturally independent from, each other — allowed the Ishiguros to see them in their deep-set detached manner.

The sense of distance and detachment mentioned by Ishiguro, the sense which runs transgenerationally in the Ishiguros, brings us all the way back again to what cultural theorists call contemporary cosmopolitanism. Stuart Hall introduces Jeremy Waldron's definition of cosmopolitanism, which "means the ability to stand outside of having one's life written and scripted by any one community, whether that is a faith or tradition or religion or culture" (Hall 26). Cosmopolitans' ability to stand outside is emphasised by David Held, a theorist of globalisation, too: cultural cosmopolitanism is "*the ability to stand outside a singular location (the location of one's birth, land, upbringing, conversion) and to mediate traditions*" (Held 58, italics in original). In his fictions Ishiguro draws on and even manipulates various geographical spaces from England and Japan to China, Eastern Europe, and America, demonstrating his cosmopolitan ability to refrain from being committed to any particular cultures and instead to make use of them for his fictions from his detached perspective, or from what Suter calls his "double perspective" (126). This ability to stand outside — an important characteristic of contemporary cosmopolitanism — has been nourished in Ishiguro in his early life with his Japanese parents but it also, it may safely be said, came from his ancestors' foreign experiences in cosmopolitan Shanghai.

In the early twentieth-century cosmopolitan Shanghai many different nationals came and lived together in the imperial context though in a somewhat strange harmony, frequently with their national interests in tension and perennially with their cultures being independent from *or* merging into one another. Shanghai as a local but at the same time a global

city reminds us of Leggett's argument that another contemporary cosmopolitan writer, Caryl Phillips, born in the Caribbean island of St Kitts and raised in England and now living in various cities across the globe, identifies himself with "his home city — Leeds — over his home country" (32). Phillips' identification with the local rather than the national correlates with Christopher's and Akira's identification with Shanghai as his "home village" (*WWWO* 256) as well as with Christopher's decision to accept London as his "home" in the end (*WWWO* 313). Also, just as Akira conceives Shanghai as "fragile" (*WWW* 256), Walkowitz claims that Caryl Phillips' "communities are made up of strangers whose affiliation is *fragile*, provisional, and often temporary" ("The Location of Literature" 541; italics added).

The fragility of Shanghai's International Settlement was evident considering its ultimate disappearance at the end of the Second World War — the disappearance presaged in Ishiguro's *When We Were Orphans* by the disappearances of Christopher's parents around 1910 and his subsequent departure literally from Shanghai and metaphorically from the protected and sheltered bubble of his early childhood. Despite its disappearance, cosmopolitan Shanghai and its atmosphere must have impregnated the Ishiguros. Although it "remains utopian and illusory," as Shao-Pin Luo writes, "an international hybrid space holds the only hope we have in this world, in order to live side by side, in harmony" (qtd. Sim 140). The Ishiguros' experiences of cosmopolitan Shanghai in the early twentieth century and their life in England since 1960 onwards have nourished transgenerational cosmopolitanism in them.

Conclusion

More than three decades back Ishiguro called himself "a kind of

homeless writer." In the conversation with Kenzaburo Oe, held in 1989, Ishiguro looked back on when he had become a writer: "I had no obvious social role because I wasn't a very English Englishman, and I wasn't a very Japanese Japanese either" (see Oe 58). We should note that Ishiguro spoke in the past tense. We do not know if this self-description applies to Ishiguro now. But if it did, we would be able to say that his sense of neither-Japanese-nor-English-ness, or his sense of *in-betweenness* (or we could even say his *both-ness* given what Suter regards as his double perspective), or his cultural detachment comes very much close to what cosmopolitans call the ability to *stand outside*. I have argued that Ishiguro's detached cosmopolitan view of the world derives both from the circumstances in which he was raised as an observer/outsider in England and from his father and grandfather's intercultural experiences in cosmopolitan Shanghai in the first half of the twentieth century. Transgenerational cosmopolitanism runs deep in the Ishiguros.

Furthermore, Ishiguro's transgenerational cosmopolitanism is what lies behind his anger at the racial and cultural exclusivism he believes Brexit implicates. His transgenerationally formulated cosmopolitanism is right there in his appeal to decency and fair-mindedness on the part of the British and in his urge for Britain to show compassion to outsiders in need. Ishiguro's call for compassion and decency on the part of Britain in the context of the twenty-first century is echoed by Bruce Robbins' argument for sympathy and decency that he reads into Ishiguro's *The Unconsoled*. Robbins argues that "Ryder's long-suffering desire to please [strangers rather than his perhaps-family] would belong to a stretching of the human sensibility to accommodate the unaccustomed rhythms and ranges of sympathy that are demanded of us all in the oft-described age of global flows" (Robbins 435). *The Unconsoled* gives us the message, claims Robbins, that "in order to cohabit with less indecency in a world of immigrants,

refugees, and strangers, [. . .] we need a broader and more inclusive civility" (Robbins 439–40). This is what Britain ultimately decided not to do in 2016. Ishiguro's almost uncontrollable anger towards the result of the EU referendum is subtly reminiscent of Ryder's anger and frustration caused by his incessant failure to fulfil his duties, himself being harried by the importunities of people in the town he *visits*: "As I went on gazing out at the square, I found myself becoming increasingly angry. [. . .] Then my anger became mingled with a sense of despair and for a while I felt close to tears" (*Unconsoled* 413).

*This is a revised version of my paper, titled "The Ishiguros, Shanghai and Cosmopolitanism," presented at the international conference "Twenty-First Century Perspectives on Kazuo Ishiguro" organised by Dr Sebastian Groes at the University of Wolverhampton on 1 February 2020. I would like to give thanks to Dr Groes and the audience for their comments. The present study is part of my project "Contemporary British Fiction" supported by Hokkai-Gakuen University's Academic Research Grant for 2021.

Works Cited

Agawa, Sachiko. "Agawa Sachiko No Kono Hito Ni Aitai — Kazuo Ishiguro [Sachiko Agawa Wants to Meet This Person: Kazuo Ishiguro]." *Shukan Bunshun*, 8 Nov. 2001, pp. 144–48.

Appiah, Kwame Anthony. *Cosmopolitanism: Ethics in a World of Strangers*. Penguin Books, 2007.

Aso, Erika. "Kazuo Ishiguro's Cosmopolitanism: Landscapes of the Atomic Bomb in *A Pale View of the Hills* and *Never Let Me Go*." *Journal of College of Literature, Aoyama Gakuin University*, vol. 52, 2010, pp. 57–76.

Azuma, Kazuo. *Sōsēki No Toyota To Shanghai — Sono Shirarezaru Rekishi* [*Toyota at Its Early Period and Shanghai: Its Unknown History*]. Jiji Tsushin Shuppankyoku, 2009.

Ballard, J. G. *Empire of the Sun: A Novel*. Simon & Schuster Paperbacks, 2005.

Cooke, Rachel. "Kazuo Ishiguro Is Never Letting Go." *Evening Standard*, 10 Apr.

2012. https://www.standard.co.uk/lifestyle/kazuo-ishiguro-is-never-letting-go-6562993.html. Accessed 25 Jan. 2021.

Enomoto, Yasuko. *Shanghai* [*Shanghai*]. Chuo Koron Shinsha, 2009.

Fukuoka, Shin-Ichi. *Doteki Heiko Dialogue* [*Dynamic Equillibrium Dialogue*]. Kirakusha, 2014.

Hall, Stuart. "Political Belonging in a World of Multiple Identities." Vertovec and Cohen, pp. 25–31.

Held, David. "Culture and Political Community: National, Global, and Cosmopolitan." Vertovec and Cohen, pp. 48–58.

Hirai, Kyoko. *Kazuo Ishiguro No Nagasaki* [*Kazuo Ishiguro's Nagasaki*]. Nagasaki Bunken Sha, 2018.

Hollinger, David A. "Not Universalists, Not Pluralists: The New Cosmopolitans Find Their Own Way." Vertovec and Cohen, pp. 227–39.

Hunnewell, Susannah. "Kazuo Ishiguro: The Art of Fiction No. 196." *The Paris Review*, vol. 184, 2008, pp. 23–54.

Ishiguro, Kazuo. "Kazuo Ishiguro on His Fears for Britain after Brexit." *Financial Times*, 1 July 2016. https://www.ft.com/content/7877a0a6-3e11-11e6-9f2c-36b487ebd80a. Accessed 5 Oct. 2020.

————. *The Unconsoled*. Faber and Faber, 1995.

————. *When We Were Orphans*. Faber and Faber, 2005.

Itoh, Keiko. *My Shanghai, 1942–1946: A Novel*. Renaissance Books, 2016.

Jackson, Isabella. *Shaping Modern Shanghai: Colonialism in China's Global City*. Cambridge UP, 2018.

Kazuo Ishiguro Papers. Harry Ransom Center. The University of Texas at Austin.

————. "Dear Kazuo" (Shizuo's letter to Kazuo, 3–11–1998) Box 86.

————. "Notes: SHANGHAI After Photographs Conversation with DADDY (Shizuo) 4th MAY '97." Box 26, Folder 3.

Kong, Belinda. "Shanghai Biopolitans: Wartime Colonial Cosmopolis in Eileen Chang's *Love in a Fallen City* and J. G. Ballard's *Empire of the Sun*." *Journal of Narrative Theory*, vol. 39, no. 3, Fall 2009, pp. 280–304, 417.

Leggett, Bianca. "The British Cosmopolitan Novel: A Survey." *Twentieth-First-Century British Fiction*. Edited by Bianca Leggett and Tony Venezia. Gylphi, 2015, pp. 17–36.

Liu, Jianhui. *Mato Shanghai: Nihon Chishikijin No "Kindai" Taiken* [*Shanghai: Japanese Intellectuals' "Modern" Experiences*]. Chikuma Gakugei Bunko, 2010.

Mason, David. *Race and Ethnicity in Modern Britain*. 2nd edition. Oxford UP, 2000.

Morrison, Blake. "It's a Long Way from Nagasaki." *Observer*, 29 October 1989, p. 35.

Nava, Mica. *Visceral Cosmopolitanism: Gender, Culture and the Normalisation of Difference*. Bloomsbury, 2007.

New, Christopher. *Shanghai*. Asia 2000 Ltd, 1985.

Oe, Kenzaburo. "The Novelist in Today's World: A Conversation" (1989). *Conversations with Kazuo Ishiguro*, edited by Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong, UP of Mississippi, 2008, pp. 52–65.

Ohno, Barbara. "Who is the Unconsoled? A Profile of Novelist Kazuo Ishiguro." *Mars Hill Review*, vol. 5, 1996, pp. 137–42.

Ōno, Kazuki. "Interview Kazuo Ishiguro: *Never Let Me Go* and Haruki Murakami." *Bungakukai*, no. 8, 2006, pp. 130–46.

Panayi, Panikos. *An Immigration History of Britain: Multicultural Racism Since 1800*. Routledge, 2014.

Phillips, Caryl. *The Final Passage*. Vintage Books, 1985.

Robbins, Bruce. "Very Busy Just Now: Globalization and Harriedness in Ishiguro's *The Unconsoled*." *Comparative Literature*, vol. 53, no. 4, Fall 2001, pp. 426–41.

Rothenberg, Jennie. "Myths and Metaphors." *Atlantic Online* 8 Apr. 2005. http://www.bookpage.com/0009bp/kazuo_ishiguro.html. Accessed 24 Dec. 2006.

Rushdie, Satanic. *Imaginary Homelands: Essays and Criticism 1981–1991*. Penguin Books, 1992.

Sim, Wai-chew. *Kazuo Ishiguro*. Routledge, 2010.

Smith, Zadie. *White Teeth*. Penguin Books, 2001.

Snow, Edgar. *Kyokuto Sensen* [*Far Eastern Front*], translated by Yoshihisa Kajitani, Chikuma Shobo, 1973.

Stanton, Katherine. *Cosmopolitan Fictions: Ethics, Politics, and Global Change in the Works of Kazuo Ishiguro, Michael Ondaatje, Jamaica Kincaid, and J. M. Coetzee*. Routledge, 2009.

Suter, Rebecca. *Two-World Literature: Kazuo Ishiguro's Early Novels*. University of Hawai'i Press, 2020.

Vertovec, Steven, and Robin Cohen. "Introduction: Conceiving Cosmopolitanism." Vertovec and Cohen, pp. 1–22.

Vertovec, Steven, and Robin Cohen, editors. *Conceiving Cosmopolitanism: Theory, Context, and Practice*. Oxford UP, 2002.

Wachtel, Eleanor. *More Writers & Company: New Conversations with CBC Radio's*. Vintage Canada, 1997.

Walkowitz, Rebecca L. "The Location of Literature: The Transnational Book and the Migrant Writer." *Immigrant Fictions: Contemporary Literature in an Age of Globalization*, edited by Rebecca L. Walkowitz, *Contemporary Literature*, vol. 47, no. 4, Winter 2006, The University of Wisconsin Press, pp. 527–45.

————. *Cosmopolitan Style: Modernism Beyond the Nation*. Columbia UP, 2006.

Wasserstrom, Jeffrey N. *Global Shanghai, 1850-2010: A History in Fragments*. Routledge, 2009.

Waugh, Patricia. "Kazuo Ishiguro's Not-Too-Late Modernism." *Kazuo Ishiguro: New Critical Visions of the Novels*, edited by Sebastian Groes and Barry Lewis. Palgrave Macmillan, 2011, pp. 13–30.

ロシア語における品詞分類の変遷と数詞の誕生

鈴　木　理　奈

1．はじめに

数量表現はあらゆる言語に存在するものである。しかし品詞考察の観点から，数を示す語はすべての言語で一様な品詞分類がなされているわけではなく，数詞の品詞カテゴリーを持つ言語もあれば，持たない言語もあるといえよう。また，数詞の持つ性質から，一つの言語の中においても，数を示す語は複数のカテゴリーに領域を有する事がありえる。

ロシア語における数詞の扱いは多様かつ複雑であり，現代ロシア語において *один, два, три* などの個数詞は数詞，*тысяча, миллион* などのいくつかの個数詞は名詞，また *первый, второй* などの順序数詞は形容詞に分類[1]されている。С.И. Ожегов, Н.Ю. Шведова のロシア語詳解辞典「Толковый словарь русского языка」によると，“数詞は，数量または数量的特徴や，対象物の数的順序を示す語（名詞または形容詞）。個数詞（数量を示す数詞：*два, пять, десять* など）。順序数詞（数量関係的特徴を示す数詞：*второй, пятый, десятый* など）。”[2] と記されている。

ロシア語文法において，このような数詞が独立した品詞分類をされるようになったのは比較的近年の事である。また，ロシア語文法の歴史を遡っ

---

[1] *Ожегов С.И. и Шведова Н.Ю.* Толковый словарь русского языка. 4-е изд., дополненное. М., 2001. С.445, С.152, С.811, С.499, С.107, С.356, С.818

[2] *Ожегов С.И. и Шведова Н.Ю.* Толковый словарь русского языка. 4-е изд., дополненное. М., 2001. С.885

てみると，かつては現在の品詞分類とは異なるものであった事が確認できる。本稿では，各時代における歴史的文法書を辿り，ロシア語の品詞分類の変遷に併せて，品詞としての数詞の出現に至る過程の考察を行いたい。

2．18 世紀の文法研究

ロシア語における品詞分類は時代とともに大きな変遷がみられ，中でも数詞は様々な位置付けをされてきた。現代ロシア語における一般的な解釈による分類では，品詞は「名詞」,「形容詞」,「数詞」,「代名詞」,「動詞」,「副詞」,「前置詞」,「接続詞」,「助詞」,「感嘆詞」の 10 個[3] とされている。数詞は独立した品詞の扱いとなっているが，そこに至るまでの過程には紆余曲折があり，ロシア語文法における数詞の研究については様々な見解も生じた。

最初の本格的なロシア語文法書となる М.В. Ломоносов 著「Российская грамматика」(1755 г.) では，すべての語は 8 個の品詞に分類できるとした上で,「名詞」,「代名詞」,「動詞」,「形動詞」,「副詞」,「前置詞」,「接続詞」,「感嘆詞」が挙げられている[4]。М.В. Ломоносов の文法書において名詞 имя は，実名詞 имя существительное を主としてそこに形容詞 имя прилагательное を含むという見方がされており，数詞 имя числительное はその名詞 имя 内に置かれている。つまり数詞は個別の品詞カテゴリーとしては分類されていなかったわけであるが，М.В. Ломоносов の考えによると，数詞は名詞 имя の品詞分類に含まれる[5] として数詞の存在自体は認めており，その性

---

[3] Подробно см. Русская грамматика: В 2 т./ Гл. ред. Н.Ю. Шведова. М., 1980. Т1, С.455

[4] Подробно см. *Ломоносов М.В.* Российская грамматика. СПб., 1755–1757 гг. С.26

[5] Подробно см. *Ломоносов М.В.* Российская грамматика. СПб., 1755–1757 гг. С.211–212

質などについては名詞の部において，個別の章で考察を行っている。数詞は名詞などと似通った性質も見て取れる為，名詞 имя の括りに扱われる事は納得できうるものではある。ただ一方で，数詞には *вдвое, трижды* などの副詞的な語もありえる為，必ずしも名詞 имя においてすべてが網羅できるとは限らないともいえるであろう。

М.В. Ломоносов は文法書の中で，“数詞には *один, пять, одиннадцать* などの非派生的数詞と，*первый, пятый, одиннадцатый* などの派生的数詞が存在し，またそれぞれに単純数詞と複合数詞の形がある”[6] と記している。現代ロシア語において数詞は，意味的および構成的要素により分類できると考えられ，一般的に意味的には，個数詞 *пять* など，順序数詞 *пятый* など，集合数詞 *пятеро* など，分数詞 *одна пятая* など，また構成的には，単純数詞 *пять, пятый* など，複合数詞 *пятнадцать* など，合成数詞 *пятьдесят один* など，が挙げられる。М.В. Ломоносов の時代においては，個数詞，順序数詞などによる数詞の種類分けが，非派生的数詞，派生的数詞として大別され，それに相当するものとなっている。ただし М.В. Ломоносов の分類を見ると，非派生的数詞は *пять, пятнадцать, пятьдесят* などの個数詞で，派生的数詞は順序数詞 *третий* などの他に，集合数詞 *трое* などや，分数詞 *полтретья* なども含まれるものとなっており，現代ロシア語における分類よりも広義的な大分類の形が取られている。また，非派生的数詞つまり個数詞の *один, два, три, четыре* の格変化について М.В. Ломоносов は，“*два, три, четыре* の数詞は形容詞の複数形，*один* の数詞は形容詞の単数形，その他の数詞は名詞の女性単数形のように格変化する”[7] と指摘し，一部の個数詞は格変化形が他とは異なり一様ではない事にも言及している。

現代ロシア語の品詞分類と比較してみると，上記のように当時の М.В. Ломоносов の分類では実名詞 имя существительное，形容詞 имя

---

[6] *Ломоносов М.В.* Российская грамматика. СПб., 1755–1757 гг. С.101

[7] *Ломоносов М.В.* Российская грамматика. СПб., 1755–1757 гг. С.102

прилагательное，数詞 имя числительное を名詞 имя の括りとして纏めており，数詞 имя числительное は実名詞 имя существительное を中心とした名詞 имя の品詞カテゴリーに含まれていた事が分かる。

3．19 世紀前半の文法研究

19 世紀初めには，帝国科学アカデミーによって「Российская грамматика」(1802 г.) が出版され，この文法書の中で，“ロシア語を構成するすべての言葉は「名詞」，「代名詞」，「動詞」，「形動詞」，「副詞」，「前置詞」，「接続詞」，「感嘆詞」の 8 つの品詞に分類される”[8] と記されており，品詞体系は М.В. Ломоносов の見解を基本的に踏襲する形が取られている。各々の品詞は個別の章で考察されているが，形動詞 причастие の章には副動詞 деепричастие も加えられている。また名詞 имя は，実名詞 имя существительное，形容詞 имя прилагательное，数詞 имя числительное を総称する品詞[9] として，これらすべては一つの枠内に収められているが，数詞を始めとするそれぞれは個々の章に分けられて，性質，形態，格変化などについて考察が行われている。しかしやはり，数詞の概念は存在するものの，ここでも数詞は独立品詞としての分類はなされていない。

帝国科学アカデミーの「Российская грамматика」によると，“数詞には，*первый, второй* などの形容詞と *один, два* などの名詞があり”[10]，また数詞の特徴によって“個数詞，順列数詞，複雑性を示す数詞，分数”[11] の 4 つに分

---

[8] Подробно см. Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею. СПб., 1802. С.39

[9] Подробно см. Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею. СПб., 1802. С.42–43

[10] Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею. СПб., 1802. С.131–132

[11] Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею. СПб., 1802. С.132

けられ，“順列数詞は形容詞のように，個数詞は名詞のように格変化する”[12]と指摘されている。数詞の意味的要素による分類に関しては前述のように，現代ロシア語では個数詞，順序数詞，集合数詞，分数となっており，上の分類の形とは若干違いが見られる。集合数詞は *двое, трое* などの語によるものであるが，ここで言う“複雑性を示す数詞とは，*тройной, тройственный* など乗数的に事物の数量を示すもの”[13]とされており，それとは意味合いが異なる。また，М.В. Ломоносов の時代には，非派生的数詞，派生的数詞と呼ばれる語によりなされた意味的な数詞の種類分けは，個数詞 количественные числительные，順列数詞 порядочные числительные へと変わり，現代ロシア語の用語名に近付いた所がある。ただし，現代ロシア語で порядковые числительные と呼ばれる順序数詞は，この時には“列”，“順序”の意味を語根とする語による порядочные числительные と言われており，現在とまた少し異なる名称が用いられている。

帝国科学アカデミーによる文法書の刊行後，Н.И. Греч は著書「Практическая русская грамматика」（1827 г.）および「Начальные правила русского языка」（1828 г.）の中で，品詞を「名詞」，「形容詞」，「代名詞」，「動詞」，「形動詞」，「副詞（および副動詞）」，「前置詞」，「接続詞」，「感嘆詞」の 9 つに分類し[14, 15]，また「Начальные правила русского языка」は改訂版 10 版目以降から書名が変更されたが，それに続く著書「Краткая русская грамматика」（1857 г.）でも同様に 9 つの品詞に分けて[16] それぞれの考察を

---

[12] Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею. СПб., 1802. С.134

[13] Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею. СПб., 1802. С.133

[14] Подробно см. *Греч Н.И.* Практическая русская грамматика. 2-е изд., исправленное. СПб., 1834. С.23

[15] Подробно см. *Греч Н.И.* Начальные правила русской грамматики. 9-е изд., исправленное. СПб., 1842. С.4

[16] Подробно см. *Греч Н.И.* Краткая русская грамматика. 10-е изд.,

行っている。Н.И. Греч による品詞分類はそれ以前の文法書とは異なる箇所が見られ，それまでにあった名詞 имя の品詞から実名詞 имя существительное と形容詞 имя прилагательное が分けられて，９品詞の体系になっている。しかしながら，“数詞は名詞および形容詞の２つの章に追加”[17, 18] として，形容詞の章内において付随する個別の区分で扱われており，名詞 имя からの分離は実名詞 имя существительное と形容詞 имя прилагательное のみとなっている。また数詞の性質について Н.И. Греч は，“数詞には対象物の数を表す個数詞と，対象物の順を表す順列数詞がある”[19] として，いくつかの数詞を例に上げながらその格変化にも着目し，“数詞には名詞または形容詞があり，*сорок, сто, миллион* などは名詞，*один, два, первый* などは形容詞である”[20] と述べている。Н.И. Греч の文法研究においては，名詞および形容詞が個々の品詞に分類されるなど，現代ロシア語の品詞分類に一部近付いた部分があるものの，数詞の扱いや解釈については基本的に М.В. Ломоносов や帝国科学アカデミーの文法書と大きく変わらず，名詞類の範疇に留められている。

一方，А.Х. Востоков は「Сокращённая русская грамматика」(1831 г.) の中で，“ロシア語のすべての言葉は「名詞」，「形容詞」，「代名詞」，「動詞」，「副詞」，「前置詞」，「接続詞」，「感嘆詞」の８つの分類から成る”[21] と述べている。М.В. Ломоносов や Н.И. Греч と異なり，ここでは形動詞が個別の品

исправленное и дополненное. СПб., 1857. С.4

17 *Греч Н.И.* Краткая русская грамматика. 10-е изд., исправленное и дополненное. СПб., 1857. С.32

18 *Греч Н.И.* Начальные правила русской грамматики. 9-е изд., исправленное. СПб., 1842. С.31

19 *Греч Н.И.* Краткая русская грамматика. 10-е изд., исправленное и дополненное. СПб., 1857. С.32

20 *Греч Н.И.* Краткая русская грамматика. 10-е изд., исправленное и дополненное. СПб., 1857. С.33

21 *Востоков А.Х.* Сокращённая русская грамматика. СПб., 1831. С.7

詞から外されており，また М.В. Ломоносов と比較すると，А.Х. Востоков は Н.И. Греч と同様に，名詞と形容詞を個々に分けている事が確認できる。А.Х. Востоков は形容詞をさらに指標によってグループ分けしており，著書の初版では“質，物主，数量の 3 つの分類”[22] に，改訂版（1837 г.）では“質，物主，数量，活動の 4 つの分類”[23] に，改訂版（1852 г.）では“質，物主，関係，数量，活動の 5 つの分類”[24] に見直されているが，いずれにせよ数詞を形容詞の章内の節において考察している。その上で，“対象物の数量的意味を示す数詞は，*один, два, сто* などの個数詞と，*первый, второй, сотый* などの順列数詞に分けられ”[25, 26, 27]，“格変化の側面から *один, два, три, четыре* の個数詞は他の形容詞と，*пять, шесть, семь* などの個数詞は名詞と近似性がある”[28, 29, 30] と指摘しており，名詞と似通った数詞の性質についても部分的に言及している。

このように，19 世紀前半の時代においても数詞はまだ独立した品詞としての扱いはなされていなかったわけであるが，数詞は品詞的に名詞でも形容詞でもあるとの指摘がされる一方で，19 世紀前半における文法研究の特徴として見られるのは，名詞と形容詞を分離させた事で数詞は大きく形容詞の品詞カテゴリーに入れて分類する見解が出てきた点である。

---

22 *Востоков А.Х.* Сокращённая русская грамматика. СПб., 1831. С.26–27

23 *Востоков А.Х.* Сокращённая русская грамматика. 4-е изд., СПб., 1837. С.25

24 *Востоков А.Х.* Сокращённая русская грамматика: вновь пересмотренная сочинителем и короче изложенная: со второго издания. М., 1852. С.15

25 *Востоков А.Х.* Сокращённая русская грамматика. СПб., 1831. С.34

26 *Востоков А.Х.* Сокращённая русская грамматика. 4-е изд., СПб., 1837. С.31

27 *Востоков А.Х.* Сокращённая русская грамматика: вновь пересмотренная сочинителем и короче изложенная: со второго издания. М., 1852. С.18–19

28 *Востоков А.Х.* Сокращённая русская грамматика. СПб., 1831. С.41

29 *Востоков А.Х.* Сокращённая русская грамматика. 4-е изд., СПб., 1837. С.37

30 *Востоков А.Х.* Сокращённая русская грамматика: вновь пересмотренная сочинителем и короче изложенная: со второго издания. М., 1852. С.22–23

А.Х. Востоков は *пять* 以上の個数詞と名詞との近似性[31] を挙げながらも *один, два, три, четыре* の個数詞の形態的特徴に意識を向け，数詞を形容詞として分類しているが，名詞的性質を併せ持つ数詞を形容詞の枠内に収めるには若干難しい部分も見受けられる。

4．19 世紀半ば～後半の文法研究

そして遂に，И.И. Давыдовは帝国科学アカデミーから出版した文法書「Грамматика русского языка」（1849 г.）において，数詞を他の品詞から分離させ，独立した品詞として分類を行った。本研究による調べでは，これがロシア語文法において初めての品詞としての数詞の登場であると認められる。

И.И. Давыдов は，品詞を「動詞」,「名詞」,「形容詞」,「代名詞」,「数詞」,「前置詞」,「接続詞」,「副詞」の 8 つに分類[32] し，それぞれの性質について各章で個別に分析を行っている。数詞は独立品詞の一つとして品詞体系が形成される一方，それ以前の品詞分類に見られた感嘆詞についてИ.И. Давыдов は，“感嘆詞はすべての言語に共通し同様に存在しながらも，文中において必要不可欠な要素を構成するものではない為，品詞には含まれない”[33] との見解を示している。名詞については，имя と имя существительное の用語が併用されており，品詞分類では имя，章立てでは имя существительное となっているが，ここでは同義的な捉え方がなされ

---

[31] Подробно см. *Востоков А.Х.* Русская грамматика Александра Востокова, по начертанию его же Сокращённой грамматики, полнее изложенная: Изд 10-е, исправленное., СПб., 1859. С.57

[32] Подробно см. *Давыдов И.И.* Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.39-40

[33] Подробно см. *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.40

ている[34]。また数詞に関する記述では，Н.И. Греч や А.Х. Востоков の文法書と比較すると，数詞の意味，構造，格変化，文中の語の配置などに関してより広い考察が展開されており，さらに И.И. Давыдов の研究においては，ロシア語においてだけでなく，スラヴ語，ギリシア語，ラテン語などインド・ヨーロッパ語族の他言語との数詞の比較や，言語的語源の考察を行うなどといった特徴も見られる。

数詞の章において И.И. Давыдов はまず初めに，“すべての従属的品詞の中において，数詞は意味的に代名詞により近い”[35] と述べている。И.И. Давыдов によると，“代名詞は事物を指示的，帰属的，制限的に定める意味合いを持つとされ，定義が入り乱れて代名詞の分離や，形容詞および数詞との混同といった不一致が起きている”[36] との指摘がなされている。現代ロシア語において“代名詞は，対象物またはその指標を示し，対応する名詞，形容詞，数詞，副詞を代用する語”[37] と定義されており，一部の代名詞 *сколько, столько* などは数詞との関連性[38] が認められるのは周知の事実である。一方で，И.И. Давыдов は数詞と代名詞の異なる点についても挙げ，“数詞は代名詞 *я, ты, кто* などのような名詞的な形において存在自体を表わすのではなく，*три яблока, десять деревьев* などのような形容詞的な形において定義される対象物の数量関係を示す”[39] と記しており，代名詞との

---

[34] Подробно см. *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.39-40, 70

[35] *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.153

[36] *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.131

[37] *Ожегов С.И. и Шведова Н.Ю.* Толковый словарь русского языка. 4-е изд., дополненное. М., 2001. С.352

[38] *Ожегов С.И. и Шведова Н.Ю.* Толковый словарь русского языка. 4-е изд., дополненное. М., 2001. С.724, С.770

[39] *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения.

限定的な近似を指して言及している事が伺える。このような数詞と代名詞との近似性に関する指摘は，それまでの文法研究にはなかった新しい見解である。

И.И. Давыдов は数詞の性質について詳しく分析しており，“数詞には対象物の定量を表す定数詞 *три, четыре, пять* などや，不可分的多数を表す不定数詞 *многие, немногие* などがあり，さらに定数詞には対象物の数を表す個数詞 *один, три, десять* などや，任意の対象物が次の対象物へと続く順を表す順序数詞 *первый, третий, десятый* などがある”[40] と指摘している。興味深い事に И.И. Давыдов はこれらの数詞を，現代ロシア語と同じ形にあたる количественные числительные 個数詞，порядковые числительные 順序数詞と名付けている。順序数詞に関してはそれまで順列数詞 порядочные числительные と呼ばれていた所，これに端を発し，個数詞，順序数詞と用語の呼び名が変わり，これが現代ロシア語においても定着して行ったと見られる。

さらに数詞の形態に関して И.И. Давыдов は，“数詞は名詞 *десяток* など，形容詞 *десятый* など，副詞 *трижды* などの形により成る”[41] と指摘している。また“ロシア語における数詞の格変化は，名詞や形容詞から何らかの逸脱を伴いつつ借用され，個数詞は名詞に，順序数詞は形容詞に従う”[42] と述べながら，ただし“個数詞 *один, одна, одно* については，一部 *одна* の複数形で異なる部分はあるものの代名詞 *сам* と同じように格変化をし”[43]，個

СПб., 1849. С.154

[40] *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.155

[41] *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.155

[42] *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.159

[43] Подробно см. *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.159

数詞 *два, три, четыре* などは特定の格変化形を持つとして，それぞれの数詞の格変化の違いについても言及している。この *одна* の変化形の指摘に関して補足すると，現代ロシア語では複数形に性は持たないとされているが，当時のロシア語文法においては男性形 *один* および中性形 *одно* と，女性形 *одна* のそれぞれに複数形の型が存在し，双方は *одни*，*однъ* と綴り字に *и*，*ѣ* の異なりがあった事を示すものである[44, 45]。

特筆すべき点として，И.И. Давыдов は“一般的に文法書において数詞は形容詞の中に入れられ関連付けされているが，数詞は形容詞に帰属されるものではない事は明らかである”[46] と，当時の文法書での慣例的な数詞の分類扱いについて異論を呈し，さらに“数詞は従属的要素の中でも特別な言語的要素を成すものである”[47]，と極めて重要な指摘をしている。

また，И.И. Давыдов は後に出版した著書「Опыт общесравнительной грамматики русского языка」(1852 г.) の中で自身の考えを発展させているが，品詞の分類や数詞の考察に関しては，先行著書の「Грамматика русского языка」から特に大きな変更点は無く，基本的に同じ内容に 3 か所ほど補足が加えられる形となっている[48]。

上述のように，И.И. Давыдов は数詞を独立した品詞として扱う分類を行い，品詞分類体系に関しても現代ロシア語により近いものとなっている。

---

[44] Подробно см. *Греч Н.И.* Краткая русская грамматика. 10-е изд., исправленное и дополненное. СПб., 1857. С.34

[45] Подробно см. *Востоков А.Х.* Сокращённая русская грамматика: вновь пересмотренная сочинителем и короче изложенная: со второго издания. М., 1852. С.23

[46] *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.160

[47] *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.160

[48] Подробно см. *Давыдов И.И.* Опыт общесравнительной русской грамматики. СПб., 1852.

また，数詞の性質についても多面的で詳細な考察を行っており，数詞およびロシア語文法の研究の発展に貢献した功績は大きいといえるであろう。

И.И. Давыдов の文法書が発表された後には，数詞を独立した品詞として分類を行う文法書が他にも散見されるようになる。Ф.И. Буслаев は「Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособье для преподавателей」(1858 г.) の中で，“ロシア語の品詞は 9 個あり，「動詞」，「代名詞」，「名詞」，「形容詞」，「数詞」，「副詞」，「前置詞」，「接続詞」，「感嘆詞」が挙げられる”[49] と記しており，数詞は独立した品詞として分類されている。

Ф.И. Буслаев の考えによると，“数詞は意味的および構成的要素に分類でき，意味的要素には *пять, десять* などの個数詞と，*пятый, десятый* などの順序数詞があり，さらに個数詞には *двое, пятеро* などの集合数詞や *полтора* などの分数詞も属するとされ，また構成的要素には *три, пять* などの非派生的数詞，*третий, пятый* などの派生的数詞，*одиннадцать, двадцать один* などの複合数詞があり，非派生的数詞には *три, пять* などの個数詞，派生的数詞には *третий, пятый* などの順序数詞，そして個数詞の中でも *трое, пятеро* などの集合数詞は派生的数詞に属する”[50] とされる。Ф.И. Буслаев は意味と構成の双方の視点から数詞の種類分けを試みているが，現代ロシア語と比較するとその分類にはやや違いも見られる。とりわけ構成的分類に関して，現代ロシア語においては前述のように，単純数詞 *два, второй, двое* など，複合数詞 *девятьсот, восьмидесятый* など，合成数詞 *сто один, двести второй, одна пятая* などにより成るとされるが，Ф.И. Буслаев の構成的分類では非派生的数詞，派生的数詞，複合数詞となり，またそれに該当する数詞として“個数詞は非派生的数詞に，順序数

---

[49] *Буслаев Ф.И.* Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособье для преподавателей. Ч1−2. М., 1858. Ч2, С.44

[50] *Буслаев Ф.И.* Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособье для преподавателей. Ч1−2. М., 1858. Ч1, С.129

詞および分数詞は派生的数詞に属する”[51] と記されており，それぞれの構成的性質の解釈は異なるものとなっている。さらに Ф.И. Буслаев は数詞の形態的特徴について，“すべての順序数詞 *первый, второй* などは形容詞の形，ある個数詞 *пять, сто* などは名詞の形を取り，またある個数詞 *один* は代名詞と関連し形成されており”[52] “*один* は代名詞，*пять, сто* などは名詞，*пятый* などは形容詞の形で格変化をする”[53] と述べ，前述の И.И. Давыдов と同様に，数詞 *один* の代名詞との関わりを指摘している。数詞 *один* については，文法書において複数の見方が示されているが，形容詞と同様の格変化という考えに加え，代名詞と同様の格変化という考えも見受けられる。なお，С.И. Ожегов, Н.Ю. Шведова の「Толковый словарь русского языка」によると，意味的な用法における *один* は，数詞，形容詞，代名詞[54] の性質を持つとされている。

また Ф.И. Буслаев のこのような数詞の見解については，後続の著書「Историческая грамматика русского языка」（1863 г.）においても，基本的に変わらずほぼ同内容による記述となっている[55]。

その後に出版された А.А. Потебня による「Из записок по русской грамматике」（1874 г.）では，主に思考と言語の相関関係という側面からの独創的な考察が展開されており，それまでとやや異なる切り口の文法理論となっている。А.А. Потебня は伝統的な文法用語を用いた品詞分類の列

---

[51] *Буслаев Ф.И.* Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособье для преподавателей. Ч1−2. М., 1858. Ч1, С.129

[52] *Буслаев Ф.И.* Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособье для преподавателей. Ч1−2. М., 1858. Ч1, С.129

[53] *Буслаев Ф.И.* Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособье для преподавателей. Ч1−2. М., 1858. Ч1, С.232

[54] *Ожегов С.И. и Шведова Н.Ю.* Толковый словарь русского языка. 4−е изд., дополненное. М., 2001. С.445

[55] Подробно см. *Буслаев Ф.И.* Историческая грамматика русского языка. 2−е и зд., переделанное. Ч1−2. М., 1863.

挙という記し方はしていないが，「名詞」，「形容詞」，「数詞」，「代名詞」，「限定詞」，「動詞」，「接続詞」，「前置詞」の項目に分けて各章でそれぞれの考察がされており[56, 57]，数詞も個別の扱いがなされている。この中における限定詞 член は，А.А. Потебня の考えによると，指示代名詞より広義の用法を持つ語となる[58]。数詞に関する記述では，“既にスラヴ語の古い文献において個数詞は形容詞と名詞の 2 つの部類に分けられていた”[59] とあり，それらの異なる格変化形などに触れられている。また，А.А. Потебня の著書には Ф.И. Буслаев の引用も多く認められており，品詞分類についても一部見解の違いはあるが Ф.И. Буслаев など既存の見解を発展させている事は伺え，数詞を個別の品詞とみなす考え方は既に行き渡り始めた段階にあるものと見受けられる。

19 世紀の時代はロシア語文法研究が盛んになり，詳細な記述による文法研究書が複数刊行され始めた時期でもある。それに伴い品詞分類に関する研究も進み，Н.И. Греч, А.Х. Востоков, И.И. Давыдов など著名な言語学者達によって様々な見解が生み出されたが，それぞれ異なる考えが示されるなど，この時代にはまだ定まったロシア語の品詞体系は確立していなかった事が伺える。また，数詞の品詞分類の扱いについても文法書によって様々であり，同時期に異なる見解が混在していた事も見て取れる。19 世紀前半に Н.И. Греч, А.Х. Востоков によって執筆された文法書はその後も幾度か改版され，中には加筆や修正の見直しが入れられているものもあるが，19 世紀半ばに刊行された改訂版においても，品詞分類や数詞に関する見解

---

[56] Подробно см. *Потебня А.А.* Из записок по русской грамматике: В 4 т. М., 1985. Т4, Вып.1. С.285–287

[57] Подробно см. *Потебня А.А.* Из записок по русской грамматике: В 4 т. М., 1977. Т 4, Вып.2. С.7–286

[58] Подробно см. *Потебня А.А.* Из записок по русской грамматике: В 4 т. М., 1985. Т 4, Вып.1. С.171–181

[59] Подробно см. *Потебня А.А.* Из записок по русской грамматике: В 4 т. М., 1985. Т4, Вып.1. С.122

は全く変わっておらず，数詞は他品詞の中に含められた扱いが取られている。しかしそのような中で，19 世紀半ばには И.И. Давыдов が数詞を独立した品詞として分類を行っており，これは現代ロシア語における品詞分類が示す論理的体系に近付く大きな前進であったといえよう。И.И. Давыдов の見解はその後 Ф.И. Буслаев などの研究において継がれていき，数詞は個別の品詞とする見方が広く行き渡るようになっていったと考えられる。

5．結び

ロシア語文法における品詞分類とりわけ数詞の分野に関しては，未だ十分な研究がなされておらず，品詞としての数詞の成り立ちについても明確に示されていない所がある。言語における重要な概念の一つでもある数詞の品詞化に至る過程の解明は緊急の課題であり，その為，本研究ではロシア語の数詞の品詞が誕生した時を明らかにすべく，歴史的文法書を元に辿る取り組みを行った。ロシア語において数詞の存在は古くから認識されていたが，言語の品詞体系を成す独立品詞として数詞を位置付ける記述は，19 世紀半ばの И.И. Давыдов の文法書において初めて確認できた[60]。

18 世紀の М.В. Ломоносов によるロシア語における最初の本格的な文法書の出版に始まり，19 世紀の文法研究が活発化するまでの芽吹きから開花の時期を経て，数詞は独立品詞化されるに至り，19 世紀半ばはロシア語文法研究の過渡期ともいえ，並行的に様々な数詞の扱いが混在した時期もあったが，19 世紀後半にかけては徐々に整備され，品詞としての数詞の認識が浸透して行った様子が見受けられる。ロシア語における数詞は名詞，形容詞，副詞的な性質を持ち合わせ，また数詞によっては格変化形が異な

[60] 本研究では，ロシア国立図書館（Российская государственная библиотека）に重ねて足を運び，各年代における複数の歴史的文法書や文献を調べて推進させた。

るという形態的な複雑性も見られる事などから，歴史的文法書の中においても数詞の品詞分類には多様な見解が現れ，独立品詞としての数詞の誕生に辿り着くまでには暫しの時を要した。

ロシア語の品詞分類体系はこれにより確定したというわけではなく，この後 20 世紀に入りさらに文法研究が栄えていく最盛期において，幾多の文法書が刊行され，さらに研究手法も多様化し多面的な考察が行われる中で，品詞体系の研究にも広がりを見せ，より様々な見解が示されるようにもなる。今後においてはそれら 20 世紀以降の文法書を辿り，ロシア語の品詞分類の変遷に伴う数詞の誕生から定着に至るまでの過程の考察を行い，続編にて別途報告したい。

謝辞

本研究を遂行するにあたり，恩師であるモスクワ国立大学大学院 M.B. Всеволодова 教授には，多くの貴重なご助言をいただきました。深厚なるご指導を賜りました故 M.B. Всеволодова 教授に心より感謝申し上げます。

また本稿執筆において，北海道大学および北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センターの所蔵図書を共同利用させていただきました事に御礼申し上げます。

中宮賢子を看取った説話をとりあげ、院政期における天皇の神秘性の希薄化を論じていた（益田勝美「日知りの裔の物語」〈同『火山列島の思想』所収、筑摩書房、一九六八年〉）。

（40）佐藤弘夫　注（10）論稿。佐藤氏は中世への移行期におけるコスモロジーの転換を指摘しており、それにより一つの世界に共存していた人とカミが二つの世界に振り分けられ、天皇は高度な宗教的権威を担う存在からは峻別されて現世内の存在と規定されたとする（佐藤弘夫『アマテラスの変貌』法藏館、二〇〇〇年。同「中世「仏教」文明の形成と君主権」〈大橋一章ほか編『「仏教」文明の受容と君主権の構築』所収、勉誠出版、二〇一二年〉）。

（41）堀裕「平安新仏教と東アジア」（大津透ほか編『岩波講座日本歴史』〈古代4〉所収、岩波書店、二〇一五年）。

（42）佐藤弘夫　注（10）論稿。

（43）上島享「中世王権の創出と院政」（大津透ほか編　注（1）の書所収）。

（44）天喜元年七月「東大寺茜部荘司住人等解」（『平安遺文』九巻、七〇二号）。

（45）速水侑『日本仏教史』〈古代〉吉川弘文館、一九八六年。

（26）本郷真紹「内供奉十禅師の成立と天台宗」（同『律令国家仏教の研究』所収、法藏館、二〇〇五年、初出一九八五年）。

（27）『増鏡』四。『増鏡』は、岩佐正ほか校注『神皇正統記　増鏡』〈日本古典文学大系八七〉（岩波書店、一九六五年）を使用。

（28）大隅和雄「総論―因果と輪廻をめぐる日本人の宗教意識」（同編『因果と輪廻』〈大系仏教と日本人4〉所収、春秋社、一九八六年）。

（29）佐藤弘夫氏は、中世に天皇の前世譚が展開していることを、「十善の帝王説」が知れ渡っていたことの表れとしている（佐藤弘夫　注（10）論稿）。

（30）『大正新脩大蔵経』二四、一四八五頁上。

（31）『扶桑略記』天慶四年三月条所引。成立年代については、竹居明男「『道賢上人冥途記』・『日蔵夢記』備考」（『人文学』一七六、二〇〇四年一二月）参照。

（32）河音能平　注（2）の書。

（33）『宝物集』二。

（34）吉原浩人　注（2）論稿。

（35）『楞厳院二十五三昧結集過去帳』は、念仏結社である二十五三昧会の会衆がほぼ没年順に記されており、伝が付されている会衆についてはその往生の様子などについても記されているため、一種の往生伝ともされる。しかし、そこの花山伝では、「御臨終之事難レ知。和光同塵、形迹不定、示二現善悪一。凡情叵レ測。大権方便、不レ可二軽議一者也」と、花山を仮にこの世に化現した権者としているようにみえる（吉原浩人　注（2）論稿）。

（36）国東文麿「今昔物語集の構成」（同『今昔物語集成立考』〈増補版〉所収、早稲田大学出版部、一九七八年、初出一九六二年）。

（37）吉原浩人　注（2）論稿。

（38）佐藤弘夫　注（10）論稿。

（39）石井進「院政時代」（『講座日本史』第二巻所収、東京大学出版会、一九七〇年）。なお天皇の脱神秘化に関しては、益田勝美氏が『長秋記』や『侍中群用』から、鳥羽天皇以降に天皇が宝剣と共寝しなくなったことや、『古事談』の白河上皇が内裏で

後には知識人や為政者たちが太子の後身であることを自ら強調したり世間からそう思われたりすることが盛んになるとする（追塩千尋「古代・中世における太子信仰の性格」〈同『日本中世の説話と仏教』所収、和泉書院、一九九九年、初出一九七三年〉）。

（15）③については、『三法絵』下「東大寺千花会」や『今昔』一一―一三にみられるような、陸奥国の黄金出土と石山寺創建説話の一種だと思われる。

（16）『続日本紀』天平一五年一〇月一五日条。

（17）三橋正「日本宗教史上における院政期の位置―中世的宗教の形成―」（同『平安時代の信仰と宗教儀礼』所収、続群書類従完成会、二〇〇〇年、初出一九九六年）。

（18）説話集以外にも、『伴氏系図』の善男の項に「家伝説曰」とする類話があり、院政期ではないが、日法の『聖人之御法門聴聞分集』にも前世の僧が「清能」と名付けられて語られている。

（19）『古事談』は、川端善明・荒木浩校注『古事談　続古事談』〈新日本古典文学大系四一〉（岩波書店、二〇〇五年）を使用。

（20）類聚本『江談抄』は、山根對助ほか校注『江談抄　中外抄　富家語』〈新日本古典文学大系三二〉（岩波書店、一九九七年）を使用。

（21）三巻本は、『続群書類従』三二所収の『康頼宝物集』を使用。

（22）第二種七巻本『宝物集』は、小泉弘ほか校注『宝物集　閑居友　比良山古人霊託』〈新日本古典文学大系四〇〉（岩波書店、一九九三年）を使用。

（23）『宝物集』の伝本については、小泉弘編『宝物集　中世古写本三種』（古典文庫、一九七一年）、小泉弘ほか校注　注（22）の書の「宝物集　解説」、山田昭全「『宝物集』七巻本の成立」（同『山田昭全著集』第二巻所収、おうふう、二〇一五年、初出一九九四年）を参照。

（24）川端善明・荒木浩校注　注（19）の書、一七八頁、注四。

（25）追塩千尋「清和上皇の諸寺歴覧について」（『北海学園大学人文論集』六五、二〇一八年八月）。

新研究』所収、桜楓社、一九八四年、初出一九六八年）、朝枝善輝「日本霊異記にみられる聖君問答の意義」（『龍谷大学仏教文化研究所紀要』一六、一九七七年六月）、長谷部将司「私撰史書としての『霊異記』」（根本誠二・サムエル・C・モース編『奈良仏教と在地社会』所収、岩田書院、二〇〇四年）などで論じられている。当時の社会的背景との関係からは、勝浦令子「称徳天皇の「仏教と王権」」（同『日本古代の僧尼と社会』所収、吉川弘文館、二〇〇〇年、初出一九九七年）、秋吉正博「高僧の桓武天皇皇子転生」（『奈良仏教と在地社会』所収、岩田書院、二〇〇四年）、久禮旦雄「『日本霊異記』における僧侶転生譚とその背景」（京都仏教説話研究会編『説話の中の僧たち』所収、新典社、二〇一六年）などで論じられている。

（9）阿部泰郎「唱導と王権」（水原一編『伝承の古層』所収、桜楓社、一九九一年）、同「熊野詣考」（国際日本文化研究センター編『日本文化と宗教』国際日本文化研究センター、一九九六年）、中前正志「熊野の髑髏と柳」（『国文学解釈と教材の研究』四四―八、一九九九年七月）など。

（10）佐藤弘夫氏は、中世に聖武、清和、花山、後白河、四条の前世説話が存在していたことを指摘している（佐藤弘夫「中世の天皇と仏教」（同『神・仏・王権の中世』所収、法藏館、一九九八年、初出一九九四年））。

（11）鈴木景二「律令国家と神祇・仏教」（大津透ほか編『岩波講座日本歴史』〈古代3〉所収、岩波書店、二〇一四年）。

（12）平安末期に形成された、菩提僊那・行基・聖武・良弁という東大寺建立に関わった四人をそれぞれ、普賢・文殊・観音・弥勒菩薩の化身とする概念。久野修義氏によれば、東大寺が一二世紀半ばに生み出した、俗界の政治権力の力と仏教世界の論理双方の粉飾による、中世寺院としての所領支配の実現への志向や焼き打ちからの復興の中で登場したものだという（久野修義「中世東大寺と聖武天皇」（『仏教史学研究』三四―一、一九九一年七月））。

（13）仏教説話では転生の原因を過去世における業とするのが一般的である。しかし『霊異記』上―五において、太子は聖武への転生を予言して聖武となったとされるのだが、その予言は大部屋栖野古が見た死後の世界において行われており、太子在世時のことではない。そのため単なる転生というよりも、太子という仏菩薩に近い存在が現世に化身として現れたという意味ではないだろうか。この点は改めて検討したい。

（14）追塩千尋氏は、このような「太子後身説」の萌芽は九世紀からみられ、『霊異記』上―五はその早い例であるとする。また、

直面した寺社勢力が唱えはじめた相互依存の主張を政治権力側も受け入れていた[45]という、言説の主体と客体の関係があった。同じく仏教思想が関わる天皇の前世説話についても、何かしらの政治的社会的機能を狙ったものであったのか、それがどのように受け止められたのか、などということは今後の課題になり得ると考えている。

注

（1）古代の天皇については、山尾幸久「古代天皇制の成立」（後藤靖編『天皇制と民衆』所収、東京大学出版会、一九七六年）、大津透ほか編『古代天皇制を考える』講談社、二〇〇一年など参照。

（2）醍醐天皇の堕地獄については、村山修一『本地垂迹』（吉川弘文館、一九七四年）、村上学「日蔵の地獄巡り」（『国文学解釈と鑑賞』五五―八、一九九〇年八月）、義江彰夫『神仏習合』（岩波書店、一九九六年）、山本五月「『道賢上人冥途記』に見る道真像」（『国文学解釈と鑑賞』六七―四、二〇〇二年四月）、河音能平『天神信仰の成立』（塙書房、二〇〇三年）など。天皇の往生については、西口順子「天皇の往生」おぼえがき」（同『平安時代の寺院と民衆』所収、法藏館、二〇〇四年、初出一九八八年）、吉原浩人「日本往生極楽記と院政期往生伝」（本田義憲ほか編『説話集の世界』Ⅰ〈古代〉勉誠社、一九九二年）、田中徳定「白河上皇の往生」（『駒沢国文』三一、一九九四年二月）など。

（3）『霊異記』下―三九、『日本文徳天皇実録』嘉祥三年五月五日条。

（4）『三僧記類聚』七（『大日本史料』承平元年七月一九日条所引）。

（5）『古事談』六。

（6）『雑談集』一〇、『吉口伝』など。

（7）『選択伝弘決疑鈔裏書』、『増鏡』四。

（8）『霊異記』下―三九の内容分析は、小泉道「石鎚山の寂仙の話をめぐって」（『愛媛大学法文学部論集文学科篇』一、一九九八年）に詳しい。『霊異記』の編纂の問題においては、原田行造「日本霊異記最終末部の構想と景戒の意図」（同『日本霊異記の

あると思う。

そこで本稿で検討した前世説話を利用したい。一二世紀にみられる天皇の前世説話では、前世が特別な人物ではなく、執着心が転生の契機とされたり、前世の徳によって天皇となった現世においても来世を案ずることが語られていた。そして、同じ一二世紀は天皇の往生や罪業についても明確に語られる時代であった。

本稿では天皇の前世、往生、罪業に関する説話が展開する一二世紀こそ、脱神秘化等の天皇の宗教的権威の変化が確実となった時期と考える。そのことを示す一つの事象として、従来指摘されてきた天皇の往生や罪に対する言説などと共に、院政期の天皇前世説話の存在を意義付けたい。

おわりに

天皇の前世説話は、鎌倉時代以降にも、宇多、花山、後白河、四条についての説話が展開する。しかし前世説話に限定したことではなく、鎌倉時代以降、種々の天皇への言説が展開したといえるだろう。例えば『古事談』には、「王道后宮」という天皇家を主題とする巻を先頭に配置し、そこでは冒頭の称徳天皇説話のような憚りのない説話が収められている。また、在位中の天皇や院そのものが超越的な力によって失脚に追い込まれるといった説もみられるようになる(42)。それは、天皇個人をどのように語ったとしても、天皇という地位の権威には影響しない(43)という状態になっていたためであろう。本稿の検討によれば、その画期は一二世紀ということになる。

以上、本稿では、院政期にみられる天皇の前世説話を主題として、その内容分析と存在意義の検討を行った。しかしながら、古代から中世への移行期における国家・天皇と仏教の関係については、「方今王法仏法相双、譬如二車二輪鳥二翼一」(44)という文言で表現されるような政治権力と寺社勢力の関係が唱えられており、律令制の崩壊に伴う経済的危機に

が構想されたということは、天皇の罪業や往生、そして本稿で注目した前世への語りなど、種々の天皇説話の展開との関係でも注目すべきであろう。

一二世紀を中心とする、前世説話を含めた天皇への様々な言説の展開には、どのような歴史的背景があったのだろうか。吉原浩人氏は、天皇の往生伝の出現と院政期の天皇観の変化について軌を一にする現象とし、院政期から天皇の往生や罪障への明確な語りが可能となったことを指摘している[37]。

確かに、中世移行期に天皇権威が変化したことは諸研究が指摘している。その中でも、本稿に関わるものとして注目すべきは、天皇の脱神秘化や「神から人へ」といった変化を重視する視点である。

脱神秘化や「神から人へ」などという図式は、天皇の宗教的権威の変化を論じる際の一つの視点となっているが、早くからこのような視点で天皇権威の変化について述べたのは、佐藤弘夫氏によれば、石井進氏であったとされる[38]。石井氏は院政期に院や天皇個人のタブーからの解放がはじまったとして、天皇や院への仮借ない批判がみられることを指摘し、「神から人」へと転化したという論を明示している[39]。また、佐藤弘夫氏においては、中世社会への移行過程で天皇の地位の脱神秘化が進行し、神の範疇を離れて一個の人間として把握されるようになり、中世の天皇はより高次の存在によって規定される二次的権威となったとしている[40]。堀裕氏も佐藤氏の論を承けて、九世紀以降の護持僧などによる天皇の身体への仏教の影響を指摘し、それが聖なる肉体を持つことを要求される天皇と、個人として生に苦悩する天皇を徐々に分離させたとしている[41]。

石井氏や佐藤氏などの研究に従えば、吉原氏の指摘するとおり、中世移行期に天皇の宗教的権威が変化したことで、天皇個人に対する様々な語りが可能となり、天皇の往生・罪・前世に関する言説が展開したといえよう。では、天皇の宗教的権威が変化した中世移行期とは具体的にはいつなのか。先にあげた研究では、堀氏が九世紀を権威変化の開始時期としているが、佐藤氏と石井氏は具体的な年代は示されておらず、なおその画期となる時期については検討の余地が

した、大江匡房の『続本朝往生伝』は、往生人の没年の最下限と匡房の没年から考えれば、一一〇一年から一一一一年とみられる。往生伝ではないが、同時期の『中右記』嘉承三年（一一〇八）正月二七日条にも堀河天皇往生の記事がある。また、一二世紀半ばの成立とされる『七大寺巡礼私記』にも「古老伝云」として、称徳天皇が兜率天に往生したことが記されている。

これら以前にも、天皇の往生に関する記事はあった。早くにはまたも『三実』の清和の崩伝であるが、その臨終の時の様子が、「命二近侍僧等一、誦二金剛輪陀羅尼一。正向二西方一、結跏趺坐、手作二結定印一、而崩。宸儀不レ動、儼然若レ生。念珠猶懸、在二於御手一」とされ、これは一二世紀の『後拾遺往生伝』の清和伝にもほぼ同文で存在する。臨終に誦されたのは陀羅尼であるが、これを諸行往生的な行為と理解すれば、西方を向き臨終したとあるので、阿弥陀仏の極楽浄土への往生を願ったと理解できる。しかし、『続本朝往生伝』の一条天皇と後三条天皇の伝と比べれば、往生したかどうかを明確にはしていない感がある。一条は「あに浄刹に往生したまはざらむや」、後三条は「これ仙院の往生の相なり」と語られており、それぞれ往生したことが明確にされている。

ただ『三実』の清和の崩伝は、『往生要集』や、『日本往生極楽記』をはじめとする往生伝類の成立以前の時代であるので、その往生が明確に語られなかった要因を天皇であったことだけには求めることはできないだろう。清和の崩伝の後には、一一世紀前半の『楞厳院二十五三昧結集過去帳』にも、花山天皇が往生したことを匂わせる記述があるが、そこでも花山の死後の往生については明確に語られていないとされる[35]。やはり、天皇の往生は一二世紀初頭から明確に語られ始めたというべきだろう。

説話の問題でいえば、一二世紀前半の説話集である『今昔』においても、欠巻となっている巻二一は、本来天皇を中心とした巻が予定されていたという[36]。それまで説話において天皇は、「〇〇天皇の時代」といった形で扱われることが通例で、天皇自身について語られることはほぼなかったといえる。それが、院政期の説話集において天皇を主題とする巻

也。

といい、堕地獄の要因として主となる五つの罪を挙げている。まず父の宇多法皇に対しての罪二つが挙げられ、険路を歩かせて心を苦しめ困らせた罪と、地面に座らせて涙を流させた罪である。三つ目は賢臣（菅原道真）を罪無く流罪とした罪、四つ目は永く天皇の位を貪った罪、五つ目は醍醐自身の怨敵（道真）によって他者が害された罪である。これらの罪が本となって醍醐は地獄に堕ちたというのだから、この説話では、天皇といえども現世において仏教的な罪をつくれば、因果と輪廻の理法によって容赦なく悪果を受ける存在であることが語られている。

また、天皇の罪業という問題に関しては、早くは先にも触れた『三実』元慶四年一二月四日条の清和上皇崩伝に「六時苦修。焦毀如レ削、断二除業累一。禅念遽劇、恒厭二此身一」とあり、清和が自身の悪業の積み重ね（「業累」）を意識していたかのような記述がある。

ただし醍醐の堕地獄説に関していえば、天慶四年（九四一）当時の諸記録には、朝廷が醍醐の堕地獄に対する救済策を打ち出した形跡はない[32]とされており、天皇が地獄に堕ちるということは、それが語られ始めた当初から普遍的な思想であったとは言い切れないだろう。しかしその後、一二世紀以降には『宝物集』や『十訓抄』にも醍醐の堕地獄説話がみられ、『道賢上人冥途記』では大半を占めていた道真に関する記述は削られた形になっている。そこで醍醐は、地獄を訪れた日蔵に「冥途には罪なきをもつてあるじとす。上人われをうやまふ事なかれ[33]」と告げており、一衆生として地獄で苦しむ姿が語られている。醍醐の堕地獄説話の説話集への展開を考えれば、天皇の罪業について語られることが一般的になるのは、一二世紀以降といえるのではないだろうか。

また、一二世紀は天皇の往生も語られる時代であった。吉原浩人氏によれば、『続本朝往生伝』以降、院政期から天皇の往生や罪障を論ずることが可能となり、また、『後拾遺往生伝』では、清和天皇伝が下巻の冒頭に配置されていることから、天皇が他の人間と同列に扱われ、天皇の往生を論ずることが一般化していたという[34]。天皇の往生伝を最初に収録

（三五）

具足一切煩悩集無量善業亦退亦出。若値善知識学仏法、若一劫二劫方入住位[30]。

とあり、前世に十善を上品に行えば鉄輪王、中品に行えば粟散王、下品に行えば人中の王となるとする。しかし、一切の煩悩と無量の善業を有しており、その行いによっては退ともなるし、出を得ることがある。もし善知識に出会えば、仏法を学んで一劫二劫という時間のうちに菩薩の住位に入るとする。つまり仏教の世界では、王は前世の功徳によって現世でその地位についているが、その現世での行いによっては異なる果報を受け得るとされており、あくまで輪廻の中の一衆生とされていることがわかる。

ここまでの検討によれば、院政期にみられる天皇の前世説話では、前世の功徳のみが強調されるわけではないことがみられた。そこでは、前世が決して特別な人物ではなく、転生のきっかけは「悪心」を抱いたこととされたり、現世では天皇となりながらも来世を案じていることなどが語られており、前世説話にみられる天皇像は、『菩薩瓔珞本業經』にみられる十善の思想と合致したものではないだろうか。検討した前世説話において、天皇は輪廻の中の一衆生として語られていると考える。次章では院政期に前世説話が展開している意義について検討したい。

三、天皇への言説の展開

前章までにみた前世説話が存在する意義を検討するために、院政期は、天皇の前世のみでなく来世や罪業の問題までも語られていたことについて、先行研究を利用しつつ触れておきたい。一一世紀の成立とされる『道賢上人冥途記』[31]では、醍醐天皇が地獄で苦を受けているとされている。そこで醍醐は堕地獄の理由を

我父法王令二険路歩行心神困苦一。其罪一也。予居二高殿一、令下聖父坐二下地一焦心落涙上。其罪二也。賢臣無レ辜誤流。其罪三也。久貪二国位一得レ怨害レ法。其罪四也。令三自怨敵害二他衆生一。其罪五也。是五為レ本。余罪枝葉無量

に当る職務で天台僧との関係が密接であった[26]。僧正は、仏教界を統括する僧綱の最上位である。いずれもの説話も、善男により望んだ職や地位に就くことを阻まれている。内供奉十禅師を望んだことに注目すれば、その職務内容から推測するに、僧としてある程度の験力を有する人物に設定されていると思われる。また、善男には任命を阻まれたが、「深草天皇は補せしめんと欲ひたまふ」とあり、天皇からは容認されている。阻まれた理由は、単なる僧の力量不足とはされていないといえるだろう。このため、聖武の『扶桑』・『要録』説話と同様にその名も分からない人物にはされているものの、清和の前世は並みの僧とはされていないと考える。

しかし、この僧が天皇に転生する願を起こした契機は、善男に対する「悪心」（「怨」・「悪念」）を発したことであった。そして、法華経の功徳による善男への復讐を誓い、清和となってその宿願を果たしたのであった。清和の前世説話からは、一二世紀において、天皇となった理由について「悪心」による執着心をもその一要因として語ることが可能となっていたことが分かる。そして後に僧においては、天皇に生まれることを「すみやかに成仏すべかりしを、よしなき妄念を起こして、一度人界の生をうけ、帝王の位にいたりて」[27]として、速やかに成仏すべきだったところを、「つまらない執着心」を起こしたがために、再び人間世界に生まれて天皇になってしまった、と表現されるに至るのである。一二世紀以降には、仏教的には好ましくない執着心が天皇となった理由として明確に語られるようになっていた。

ここで仏教において、王として生まれていることはどのように意味付けられているかを確認すれば、正法をもって衆生を導く王を転輪聖王（金輪聖王）と讃え、その王は前世で十善（殺生、盗み、邪淫、嘘、両舌、悪口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見の十悪をしないこと）の行いをしたため、その功徳によりこの世で王となったと説明される[28]。この思想が日本においても、天皇を「金輪聖王」や「十善の君」とすることに繋がっており、天皇の前世説話もこのような十善の思想が根本となっていると考えられる[29]。『菩薩瓔珞本業經』下・「釈義品」には、

是人復行十善、若一劫二劫三劫修十信、受六天果報。上善有三品。上品鉄輪王化一天下、中品粟散王、下品人中王、

大納言を伊豆の国へながしつかはす。

となっており、前世の僧は法華経を三千部読んだ僧とされ、時代は文徳天皇の時代だという。内供奉十禅師職を望んだが、善男に任命を阻止され、怨みを発したことが転生の契機となっている。七巻本においてもこの直後に、「さて後に、丹波国水の尾と云ふ所にこもりゐて、難行苦行し給ひき。悪念をもて廻向する、猶し、たがふ事なし。いはんや、往生極楽のために廻向せん人、たがふ事あるべからず」という清和の修行の様が語られる。

また、第一種七巻本（元禄本）にも清和の前世説話がみられるが、内容は三巻本をベースとして、前世の僧の要求を「内供奉」、大臣を「大臣大納言伴善男」とするように、細部には第二種七巻本の要素もみられるものとなっている。

これらの清和の前世説話を生んだ要因は何であろうか。『古事談』の新日本古典文学大系本の注によれば、「まずは、源信、次いで良房という清和に近い者は対立し、これが、清和が善男を悪み、前生に敵であった説話を生んだ」[24]とされる。このような清和と善男をとりまく人間関係が一つの要因であろう。また、善男が流罪となった際の事情も要因であったと考える。『三実』の元慶四年一二月四日条によれば、応天門の変の罪に問われた善男父子は承伏しなかったが、「天皇執二持刑理一、終不二実仮一。善男父子、及他相坐者数人皆従二配流一」として、清和の裁断によって、応天門の変の嫌疑をかけられた善男父子以下の者たちは、流罪に従ったという。そのため、清和の善男への裁断を称えて「聖仁者必勇。蓋是之謂歟」としている。この文中の「勇」には、清和の裁断は衆目が一致して納得したものではなかったことの意が含まれている[25]との解釈に従って、善男が流罪に処されたことの理由を、前世からの因縁として理解する者がいたのではないかと推測する。他には、清和が三人の兄を超えて幼年で即位したという特殊な即位事情も、前世説話が作られたことに関わっていると考える。

清和の前世に設定された人物については、『江談抄』説話では内供奉十禅師を望んだ僧、『宝物集』では、三巻本は僧正を望んだ西坂本の貴僧、七巻本は内供奉を望んだ沙門とする。内供奉十禅師とは、内裏に供奉し天皇などの身体護持

又人王五十四代仁明天王ノ御時ニヤ、叡山ノ西坂本ニ貴僧有リキ。法華経三千部ヲ読誦シ奉リタリケルカ。御門ニモイミシキ御覚ヘ有リケレハ、何事ニテモ有レ、所望申サンコトヲ叶ヘント仰有リケルニ、此僧申ケルハ、我ヲ僧正ニナサセ給ヘト申ケリ。御門既ニナサセ給ヘキニテ有リケルヲ、大（臣脱カ）ノ申サレケルハ、僧正ナントハサスカニイミシキ人ノ公達コソ成給ヘキニテ候ヘ。彼僧ハ雖貴ト、凡下ノ者也トテ申止テケリ。是ヲ彼僧口惜キ事ニ思イケレハ、我速ニヒ死（セ）ント云誓ヲ起シテ云、我年来法華経ヲ読誦シ奉ル事既ニ三千部也。此経一千部ノ力ニ依、日本国ノ王ト生。今一千部ノ力ニ依テハ、彼大臣ノ未タ此世ニアラン時怨ヲ成ン。今一千部ハ我終ニ仏道ヲ成ント願ヲ起ツシテ、此三ニ分テ廻向シテ終ニ死ケリ。其後我朝ノ国王ト生レタリキ。清和天王是也キ。又彼大臣ノ年八十有余ノ人ニテ有ケルカ、先世ノ宿意也ケレハ、御キソク悪キコトニテ、伊豆ノ国へ流シ遣ニケリ。或説ニハ菅根ノ大臣トイヘリ。

とあって、清和の前世は西坂本の貴僧で、仁明天皇に目をかけられており、僧正の位を望んだものの、「大臣」に阻まれたという。それに対する怨みを契機として願をたて、法華経の功徳を廻向して清和に転生したとする。

この直後に「又其後御門未タ若クヲワシマシケレトモ、道心ヲ発シ御出家有テ、水尾ト云処ニ籠リ居サセ給ヌ。イミシク行ナヒスマサセ給ヒケリ」と、出家後に水尾で清和が修行した様が語られる。『日本三代実録』（以下『三実』）元慶四年一二月四日条の清和の崩伝には、譲位後の修行の様子が語られているため、前世説話の後の記述は、清和の在世時の活動が反映された記述であろう。

一方、七巻本『宝物集』七では、

文徳天皇の御時、法花経三千部よみたる沙門、内供奉を申。大納言伴善男、是をうけずして申とめつ。沙門、悪念をおこして、「三千部の経を三つにわけて、一千部をもては国王とむまれ、一千部が力をもては伴大納言を罰し、一千部が力にて難行苦行して、後世の資粮にせん」とちかひてうせぬ。願力たがふ事なし。清和天皇とむまれて、伴

（三一）

清和の前世説話は、説話集では『江談抄』、『宝物集』、『古事談』[19]にみられ、いずれも同話・類話関係にある。内容としては、『江談抄』と『古事談』の説話がほぼ同文で、『宝物集』の説話がそれと比べて多少異なる要素がみられる。まずは、時代的に先行する『江談抄』(一二世紀初頭成立、一一一一年が下限)の前世説話を引用する。なお、古本系である醍醐寺三宝院本(『水言鈔』)と類聚本[20]にみられる説話はほぼ同文であるので、『江談抄』説話は特に断らない限り次に引用する類聚本の文によることとする。『江談抄』三には、

清和太上天皇、先身は僧為り。件の僧、内供奉十禅師を望む。深草天皇は補せしめんと欲ひたまふ。しかるに善男奏してもつて停む。件の僧、悪心を発し法華経三千部を読み奉る。願に云はく、「千部の功力をもつて、当生によろしく帝王と為るべし。千部の功力をもつて、善男のためにその妨げを成すべし。残りの千部の功力をもつて、まさに妄執を蕩して苦を離れ道を得べし」と。この僧、命終して幾程もなく、清和天皇誕生したまふ。童稚の齢為りといへども、先世の宿縁に依り、事に触れて善男を悪ましめたまふ。善男その気色を見て修験の僧を語らひ得て、如意輪法を修せしむ。よりてすなはち寵を成せり。しかれども宿業の答ふるところ、事に坐して罪に至る。

というように、清和の前世は内供奉十禅師を望んだ僧で、その補任を伴善男に阻まれたことに「悪心」を起こし、法華経読誦の功徳によって転生したとする。先述のとおり、この説話は鎌倉時代初期の説話集である『古事談』二にもほぼ同文でみられる。

次に『宝物集』(一一七九年以後数年間での成立)の前世説話を確認する。『江談抄』説話と『宝物集』説話の内容を比べると、基本的な構成は同じだが変化している部分もある。また、前世説話の後には清和の仏道修行の様が語られる。ただ、『宝物集』は周知の通り伝本によってその内容や構成が大きく異なり、著者平康頼が最初に書いたのは一巻本とされる。康頼は、片仮名古活字三巻本[21]、第二種七巻本[22](以下、特に断らない限り七巻本は第二種を指す)の順に増補したとされる[23]。清和の前世説話も伝本により相違がみられる。三巻本『宝物集』下には、

輪廻の中にとりこめられた存在として語られていると考える。そこで聖武は、前世に修行者の報恩の願によって現世に天皇となっているものの、天皇でありながら来世の不安を感じ、良弁の助言により東大寺と大仏の建立を行っている。実際の「大仏造立の詔」では、「朕以二薄徳一恭承二大位一。志存二兼済一勤撫二人物一。雖三率土之浜已霑二仁恕一。而普天之下。未レ洽二法恩一。誠欲下頼二三宝之威霊一。乾坤相泰。脩二万代之福業一。動植咸栄上」[16]として、あらゆるものを救うために人にも物にもつとめて慈しみをかけてきたが、未だに天下にあまねく仏法の恩がゆきわたっていないので、仏教の力によって、天地の安泰と万代の事業の成就や天下の衆生の繁栄のために大仏造立を行うとある。しかし話の中ではあるが、『扶桑』説話や『要録』説話では、大仏造立の理由に関して、詔にみられるような護国のためということは語られていない。そこにあるのは、天皇個人の来世に資するためであったということだけである。院政期は、天皇も上皇（院）となった後には私的な来世信仰を基礎として出家していた[17]。天皇が一人の人間として来世を案ずる姿には、院政期の天皇と仏教の関係も反映されていると考える。

なお、聖武と良弁の前世を震旦の船師と修行者とする説は、一二世紀半ばの『七大寺巡礼私記』と鎌倉時代初期の『僧綱補任抄出』などにもみられることを指摘しておく。内容的には、『扶桑』説話と『七大寺巡礼私記』の所伝、『要録』説話と『僧綱補任抄出』の所伝が近いように思われるが、これらの伝承関係の検討は今後の課題としたい。

二、清和天皇の前世説話

前章では、一二世紀にみられる聖武天皇の前世説話について検討した。本節では、それとほぼ同時期にみられる清和天皇（八五〇―八〇、在位八五八―七六）の前世説話[18]を検討する。清和に関しても後述の通り、在世中の仏教との関係が注目される天皇である。

至二舎衛国一。無二其功銭一空経二年月一徒歎息矣。渡子云、①不レ得二功銭一速可レ渡。只修二善根一可レ祈二後生一。語了渡二舎衛国一。由レ之為レ報二彼恩一、可レ成二人王一之由、所二祈請一也。所以天皇受二生於此国一。良弁又依二本縁一同生二日本一。②若王運尽後可レ招二悪趣生一。爰天皇勅二僧正一云、若爾後生将二何如一。良弁奏云、修二固功徳一可レ免二当苦一。因レ之建二立東大寺一奉レ鋳二大仏一。而此国無レ金歎レ不二塗銭一。③天皇夢見二高僧一。来告云、水辺勝地立レ寺、修レ法自然出来。即由二夢告一立レ寺。修法之間、従二陸奥国一貢二黄金一。即寺者石山也。勅遣二行基良弁一所二創建一也。

ここでも、聖武と良弁の前世の設定や両者の因縁は『扶桑』説話と同じといえる。『扶桑』と『要録』はほぼ同時期の史料であるため、両説話の継承関係などはにわかに判断し難い。しかし、内容的には『要録』説話の方が膨張している。『扶桑』説話にみられない要素は、①船師の語り、②聖武と良弁の問答、③石山寺創建と陸奥国からの黄金献上の四つである。(15)

ここで特に注目したいのは、前世を語る説話に続く②の問答である。これは、もしも王としての運命が尽きれば悪趣に生まれることを招くだろう、とされたことに対して、聖武が自身の来世について良弁に問い、良弁が「固く功徳を修して苦を免れるのがよい」と回答したものである。「悪趣」というのは、六道の地獄・餓鬼・畜生のことで、中でも特に地獄のことをいうことがある。後述の通り、ほぼ同時期に醍醐天皇の堕地獄説話が展開することを考えれば、地獄のことを指していてもおかしくはない。ここでは、王としての運命が尽きれば人道よりも下位の世界に転ずる可能性が指摘されている。そしてこの説話では、良弁の「修二固功徳一可レ免二当苦一」という助言に基づいて、聖武は東大寺と大仏建立を行ったとしているのである。先の『扶桑』説話にも「良弁奏曰。草二創大仏一。応レ資二後世一」とあって、対応する部分があるが、『要録』説話では、より明確に聖武が来世を案じたことが語られている。

二つの聖武の前世説話では、前世の人物設定や聖武が来世を案じる姿がみられることから、天皇も一人の人間として

世伝云、天皇夢見、師僧良弁者、先生震旦修行者也。為レ求二仏教一向二舎衛国一、欲レ渡二流沙一。依レ无二功銭一、数月逗留。天皇者、是先身流沙之船師也。不レ顧二功銭一、済二渡於求法僧一已畢。尓時、求法沙門為レ報二船師温情一発願。其今日済渡之力、来世可レ生二国王之身一。由二其宿願一、今生二日本国王一。良弁奏曰、草二創大仏一、応レ資二後世一。天皇依レ教、建二東大寺一云々。

という内容で、ここでは聖武の前世を震旦（古代中国の別称）の流沙の船師としている。その船師は良弁の前世の修行者を無銭で渡し、その恩に報いた修行者の発願によって聖武に転生したとする。最後には良弁の奏上によって大仏と東大寺が建立されたことが記されている。

聖武と良弁は、ともに平安時代末に東大寺の「四聖」[12]の一人とされた。両者は説話においても、その関係が語られることが多く、特に『霊異記』中―二一や『今昔物語集』（以下『今昔』）一七―四九などでは、良弁の本尊としていた執金剛神像の霊験を聖武が感じて出家を許可したことが語られている。『霊異記』の説話では、良弁の四事（衣、飲食、臥具、医薬）に不足がないように修行を支援したとされており、これらが発展して、両者には前世からの因縁があったとする説話が形成されたと考える。

次に聖武の前世とされる人物について注目したい。この『扶桑』説話以前には、『霊異記』上―五に聖徳太子が聖武に転生したという記述[13]がある。『扶桑』と同じく一二世紀前半の成立とされる『東大寺要録』（以下『要録』）二にも、「私云」として「聖武天皇者、聖徳太子之後身。救世観音之垂迹也」とあり、聖徳太子の生まれ変わりという説がみられる。この太子が聖武の前身であるという説[14]に関しては改めて検討を要するが、先の『扶桑』説話では聖武の前世は「流沙之船師」とされており、言うまでもなく聖徳太子と比べるとより一般的な人物となっていることが分かる。

『扶桑』説話は『要録』二に類話がみられる。

又口伝云、良弁僧正奏二聖武天皇一云、皇帝者前生之時、流沙渡子也。良弁其時為二修行僧一。而修行僧将レ渡二流沙一

天皇の前世や来世に関する説話について、従来主に注目されてきたのは、天皇の罪業や往生についての説話であった。[2]一方で前世説話は、管見の限り、聖武天皇、嵯峨天皇、[3]清和天皇、宇多天皇、[4]花山天皇、[5]後白河天皇、[6]四条天皇[7]の七人の説話を見出しおり、ある程度の展開がみられているが、これらの説話は先行研究において、個別の問題の中で扱われることがほとんどであった。その中では『日本霊異記』（以下『霊異記』）下―三九の嵯峨の説話を扱った研究が多く、『霊異記』の編纂の問題や当時の社会的背景との関係においてとりあげられている。[8]また、後白河の前世説話も、三十三間堂創建説話の研究においてとりあげられている。[9]しかしながら、前世説話自体の内容を掘り下げた研究は少なく、複数人の前世説話を扱った研究もほとんどない。[10]

そのため本稿では、前世説話が複数展開している院政期に注目し、この時期にみられる前世説話の内容を分析した上で、同時期に天皇の往生や仏教的な罪に関する言説がみられることとも関係させつつ、院政期の天皇前世説話の存在意義を検討したい。

一、聖武天皇の前世説話

まずは、聖武天皇（七〇一―五六、在位七二四―四九）の前世説話をとりあげたい。ここであえて聖武と仏教の関係を確認しておけば、その即位後に、政治的混乱、疫病流行や凶作などに見舞われた後、国分寺の建立による国土の外護、盧舎那大仏造像による秩序安定化が目指され、仏教による救済を求めた。[11]また、盧舎那大仏に対して自らを「三宝乃奴」と称し（『続日本紀』天平勝宝元年四月一日条）、「沙弥勝満」とも名乗った（『続日本紀』天平勝宝元年閏五月二〇日条）とされる。言うまでもなく仏教との関係が深い天皇であるが、その聖武には、一二世紀前半の成立とされる『扶桑略記』（以下『扶桑』）の天平一五年一〇月一五日条に、次のような前世説話が存在する。それは、

院政期の天皇前世説話について

伊藤翔太

はじめに

「天皇前世説話」とは、文字通り天皇の前世の人物について語られる説話を指す。ここでいう「前世」とは、仏教における輪廻の思想に関わるものである。その思想を確認しておくと、仏教ではすべての衆生は輪廻思想にもとづき、天・人・畜生・餓鬼・地獄の五道、ないしはそこに阿修羅を加えた六道という迷いの世界で生死を繰り返すとされる。そこでは、この世に生まれる以前の世を前世といい、また、現在の世を現世、その死後次に生まれる世を来世という。中世では天皇に関しても因果と輪廻の法則とは無関係ではなく、前世の人物や来世の問題について語られている。

しかし、天皇を輪廻内の存在とする語りは、その存在を相対化するような言説であるように思われる。そもそも天皇は、この世に天孫降臨した存在とされ、神の子孫であることにより天皇となり得ていた。[1] また、律令体制において法を超越し、権威と権力を併せもった究極的権威とも位置付けられるような存在であった。だとすれば、仏教の輪廻の世界にとりこめるような天皇の前世や来世に関する語りは、律令制確立以前の天皇に対しては存在し得なかったものではないだろうか。本稿はこのような問題意識から、天皇の前世説話をとりあげたものである。

（二五）

九七七年十一月号『文学』）予言的聖書的な文体と同時に政治性や批判力の特徴として詩（「未刊篇」）から「（ダックドツク　ダクン）ダック　ドツク　ダクン／チエン　ダンデン／ピー……／フー……／ボドー……／弁当がぬくもる／工場の正午は／鉄の先端で光が眠る」「屠殺」では「屠殺所に、／死んでゆく牛はモーと啼いた。／六月の野の赫く、／地平に雲が浮いてゐた」などは示唆的であろう。

〈註15〉　佐々木幹郎「『山羊の歌』―子守歌的なるもの」『中原中也』（筑摩書房一九八八年四月）

A Study of Teaching demonstration in "Circus"
by Nakahara Chuya
—Criticality and Lullaby hidden Theme about
Nostalgia and Broken heat—

従来、中原中也は「宗教性」「道化師」や「童話」などに隠され、その批判生や政治性の主張が疎んじられてきた傾向が強い。それらの点を今回再考する意味でも価値があったのではないかと私は考察する。「サーカス」の主題もこの第三（主題）第四（主題）にあると捉えたいというのが、私論というべき私の結論である。

注

〈註1〉 緑川祐介「高等学校国語教科書の分析と提案その五―『国語総合』教科書の『現代詩』・『古文の散文』教材ウィ中心に」（『月刊国語教育』２００６年10月号）

〈註2〉 黒田三郎『詩の作り方』（明治書院　昭和五十年）による。

〈註3〉 井坂洋子「詩の神話」（『国語教室』大修館一九九八年64号 may）

〈註4〉 斎藤喜博『授業入門』（国土社二〇〇六年）

〈註5〉 千田洋幸「教室のなかの詩」（『月刊国語教室』二〇〇一年二月号）千田氏の論点はテクスト論においてテクストの特権的な意味や意図があらかじめ存在し、言葉とは、それを伝達するための媒体に過ぎないという誤謬を強く批判する。

〈註6〉 「対談　中原中也の魅力―佐々木幹郎と吉田凞生」（『国文学　解釈と鑑賞』一九八九年九月号、至文堂）

〈註7〉 林浩平「中也詩神話にさからって―口語定数律の不快―」『国語科通信』角川一九九七年九九号。

〈註8〉 荒川洋治は詩「美代子、石を投げなさい」『坑夫トッチルは電気をつけた』（彼方社）で指摘。詩の冒頭は「宮澤賢治論が／ばかに多い　腐る程多い／研究には都合がいいそれだけのことだ／（略）美代子、あれは詩人だ。石を投げなさい」最初と最後の部分を掲載。彼は、なぜ教科書に賢治だけ掲載するのかと批判する。

〈註9〉 中村稔「中原中也と大岡昇平」（『中原中也私論』思潮社）

〈註10〉 江藤淳『小林秀雄』

〈註11〉 吉田凞生「［評釈］＝『朝の歌』」（『国文学　解釈と鑑賞』〈註5〉と同じ）

〈註12〉 村上護『中原中也の詩と生涯』（講談社一九七九年）

〈註13〉 竹内清己「中也詩の物語要素―《まして―ました》のバリエイション―」（『国語教室99』一九九七年年角川書店）

〈註14〉 イヴ＝マリ・アリュー「中原中也―その政治性」（一

と考える。しかし、これで満足すべきではなく、さらに深い主題探究となると様々な「発問」や「仕掛け」が施されるべきであろう。この一例が「失恋」である。

第二（主題）の「失恋」がイメージとして生徒から発っせられた場合、その理由や根拠を「グループワーク」で論議することは、作品の「主体的対話的深い学び」を追究するための格好の「言語活動」になるであろう。しかし、「失恋」というよりも「揶揄」「皮肉」「道化」的な表現に溢れたこの作品から何を学びとるのかが重要視させることも忘れてはならない。

大岡昇平が「不幸」と感じた理由は、天才詩人として「詩集」さえ発刊できず辛苦にまみえ、恋人長谷川泰子にさえ逃げられ、最も信頼すべき小林秀雄に奪われる「不幸」は、「口惜しい男」（中也の書簡）そのものであるからであろう。その小林とは、中也にとってどんな人物だったのか。興味深いことを吉田と佐々木との対談[註6]で披露している。

佐々木幹郎はこんな評価を下している。大岡昇平の分子と分母はバランスが取れ、東京のダンディズム。中也の分母は、大岡昇平と同じだが、分子がかなり大きい。したがってその分子の大きさで世の中（「対人圏」）と関わるが故にトラブルが多く、昇平にとって「邪悪」と捉えてしまう。

しかし、小林は、勝手に過分数になったり、様々対応できる人で、中也にも歯が立たなかった大人物。中也の詩を初めて評価したのが彼であり、「中原は、言わば人生に衝突する様に、詩にも衝突した詩人であつた。彼は詩人といふより寧ろ告白者だ」（「中原中也の思い出」）と語る。「恋愛」説を効果的に活用するとすれば、その時代背景や小林秀雄、長谷川泰子との関係性を含めての論議となるが、主題からの距離感を私は抱いてしまう。留意しながらの授業展開による「含み」という点で、取り扱いは、慎重にすべき所だと私は考察する。

それ以上に小林秀雄が指摘する「告白者」の目こそが、第三（主題）の「政治性」を主張するのであり、さらに第四（主題）の子守歌説によって、近代詩や詩人界を批判するものと考えられる。が、どうであろうか。私の偏った深みであろうか、意見を乞いたい。

の解釈に対して、私は大いに賛同したい。この「サーカス」からは、「汚れ木綿の屋蓋」こそが、近代日本の「理窟＝詩壇」（ロープに引っ張られて、「緊張」した幕面を見ている！）と読み取れるし、また、「観客」は、読者や批評家が口をアングリ開け、鰯の如く、体勢になびく姿を中也は「落下傘奴のノルタルジア」と意味深い〈暗喩〉により揶揄するのであろう。その時、声高に批判などせず、「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」という子守歌は、心底まで響きながら心を癒し、道化役者としての中也をクローズアップさせ、感動を与える詩ではないか。

近代日本の「理窟」や「屋根」（「天蓋」）に類する言辞が、「未刊詩篇」の「（假定はないぞよ）」という詩で叙述され、中也自身の世界観を膨らませて興味深い。次に掲載する。特に私が記した太字に注目して欲しい。

「假定ないぞよ！／先天的概念もないぞよ！／何にもない所から組み立てて行つて／先天的観念にも合致したね／**理窟が面倒になつたさ／屋根みたいなものさ**／意識した親切は持たないがね～」

こんな未刊詩集に注目する必要が中也にはあると私は確信するのだが、どうだろうか。

以上が「模擬授業」における私の「講評」及び主題論の提示である。

7　結びに変えて（私論である「サーカス」の主題論をめぐって）

以上今まで長々と論じてきたが、ここで、私の結論を述べたい。その内容は、6章の主題の「講評」《第一～第四》について「私論を」絡めながら、私の主題論（四点）を論じていきたい。

「模擬授業」で取り扱う場合、第一の主題（「指導書」）で対応すべきである。「過去の困難の来歴を回顧し、不安定な精神のありようをサーカス小屋のブランコの揺れとして表し、永劫の時間の流れにあってノスタルジアにとらわれた自分をサーカス小屋の落下傘にイメージに託し、自嘲的に歌うということ」という内容把握は、ほぼ中也の主題を網羅しており、賢明な授業展開が導かれる

（二一）

に類似する内容なので、「失恋」説では、無理があると思われる。ここで興味深いのが、「ありまして―ありました」という措辞からの発想で、「予言的聖書」による関連づけである。次に挙げる。

《第三は》、詩の冒頭の「予言的聖書文体」による、抒情を退ける「政治＝批判の力」のメッセージ性である。これを主張したのは、フランスの日本文学研究者、イヴ＝マリ・アリューである。[註14]彼は、日本の読者（研究者）が自国語の理解度が深い故に、叙情性や七五調、そしてオノマトペに拘束され、冒頭の予言的詩的言語や最終連の「闇」「が現代文明」や「社会条件」に対する批判力への《拡大》を軽視し、天才詩人の本質的な特徴を見失っていないかと警鐘を鳴らす。その例として詩「北の海」の中心テーマが「詩人と世間との深い不調和を現わす空を呪う彼のイメージ」に注目すべきだと彼は補足する。

永遠の呪いを繰り返す中也にとって、人魚の伝説が生きる海（愛ある世界）が想われ、その童話的であると同時に「北欧の伝奇的世界」は、聖書の予言的言辞に繋がる「神秘的な世界観」を私たちに開示させる「詩」であるという主張に私も同意したい。

また、中也を河上徹太郎は「中原はわが詩人中まれにみる宗教的詩人」（「中原中也―人と作品―」）と述べる。さらに「観念としてではなく、イメージそのものに宗教的なものの見方が入った詩人は、近代日本では中原が典型的なもの、或は極論すれば、嚆矢であり、唯一である」（「詩人との邂逅」）と語る。この「予言的宗教」の要素は、より注目されて然るべきと考える。

《第四は》は、佐々木幹郎の主張する「文字によって記録され得ない〈うた〉の構造からの子守歌的なもの」[註15]が主題とする提起するものである。耳の奥に浸透する強烈なオノマトペ、「ゆあーん」は、近代史の中でも見えにくい（**見えるともないブランコ**）「位置」を象徴し、「緊張した詩情」（萩原朔太郎）へ向けて走る、日本近代詩特有の《病》の中での、ノスタルジアの感傷と見做される要素があるが、そうではない。「非言語」たる文化の中で身体的感覚を含んだ言葉の幅として深奥に刻まれる、あたかも「頭倒さに手を垂れて」いる近代に対する「子守歌」たる〈うた〉＝喪失の感情の原郷、の呼び戻しという幹郎

こんな意見が出され、授業者の思惑たる❷「失恋」説が出され、論議も深まり、様々な主題論があると本授業はまとめられた。この様な多様性に基づく「読み取り」を模擬授業では、許容しながらも、さらに深める「主題探究」が必要だと考え、研究者や「指導書」に準拠しながら、「模擬授業」での三点について私なりの「講評」をここで叙述して置きたい。

主題の大まかな「講評」では以下の四点が上げられよう。私の見解を整理して叙述する。

《第一に》「指導書」（M教科書）に指摘される主題、「過去の困難の来歴を回顧し、不安定な精神のありようをサーカス小屋のブランコの揺れとして表し、永劫の時間の流れにあってノスタルジアにとらわれた自分をサーカス小屋の落下傘にイメージに託し、自嘲的に歌うということ」。これは、グループワークで学生たちが議論しつつ、探究した❶❸との主題に重なり、討議の主題は、的を得たものであると評価したい。ただ、学生たちの討議では、「ノスタルジア」の意が論究されず、極めて残念で会った。この郷愁（ノスタルジア）が、何に対して中也自身がそう思い巡らしたのかを考察することが主題と直結するからである。

《第二は》、「模擬授業」で授業者が提起した、「屋外は真っ闇　闇の闇」で「夜は劫々と更けまする」と揺れる「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」の心情とは、中也の「失恋」に傷心の極みが「落下傘奴のノルタルジア」に託されているという心情であるとする主題。

この詩が「朝の歌」と同時に発表され、しかも「朝の歌」は中也十九歳の創作で、小林秀雄に初めて見せた作品、この一年前中也十八歳の時に、恋人長谷川泰子が中也のもとを去り、小林の所に行っているので「失恋」という関連付けは、十分に説得力がある。しかし、詩の中に「失恋」をクローズアップさせる他の要素（詩的言語）は皆無。傷心のノスタルジアは、「失恋」の心情に符号せず、より以前の故郷山口を連想させたり、また、中也自身が金沢で見たサーカス団の淡い郷愁を思い出させないだろうか。「疾風」は「傷心」に接するが、「幾時代」の「戦争」や「冬は疾風」と両表記され、大きな事件出来事

（一九）

一方、「屋内」説は、「四字下げ」は屋外の異空間ではなく、主題提起のための「異空間たる作者の語り」と捉え、ブランコ自体を落下傘〈奴〉に例え、パラシュートで着地する説を取る。〈奴＝め〉は、ブランコ自体が皮肉や揶揄の対象たる「主題」のノスタルジアでそれが、最後に、余韻を全体に波及させる効果として「ゆあーんゆよーん　ゆやゆよん」と反響させるのだという主張は、ブランコによるパラシュート着地説の不可解さ以外は、説得力ある説であるが、どう解釈すべきか。問題点はまだ解決していない。

この前者の「屋外」説は、阪本越郎が主張するもので、「その闇の中に、小屋が落下傘の形をして郷愁のように開いている」（『日本の詩歌鑑賞』）などとし、また教科書の「指導書」もこの説に依拠し、解説を施している。

後者は、竹内清己である。[註13] 彼は、「最終連の屋外は、屋外の闇を屋内のブランコ競技に取り込んだ表現と取りたいがどうだろうか」と主張する。私の帰結は、やはり「屋外」説に賛同したいと傾いている。

6　詩「サーカス」の主題探究と各研究者による「主題」論

この「サーカス」の詩は、一九二九年十月号『生活者』に「朝の歌」「春の夜」など「詩六篇」と共に初出されたが、その当時は「無題」で発表している。これは、当初この作品の「主題」を中也自身がサーカス（曲馬団）と考えておらず、別の「主題」が隠されていると推察される。

「模擬授業」では小人数の「グループワーク」を実施し、作品の主題を探究した。その主題の例として討論の中で三点挙げられた（中心は傍線）。

❶過去の良き思い出を回想しつつ今は悲嘆するしかない心情
❷失恋の苦さに対して明るいサーカス小屋のブランコの曲芸に夢を託す心情
❸サーカスが終了しても触れ動く暗闇の深さに思いを寄せる心情

「けだるい心の揺れ、ものうい気分のたゆたい、そして、幼年時へのやるせないノスタルジーといった、この詩の主題的概念を音象として集約し際立たせる」とまとめている。私もこの見解には、賛辞を送りたい。

私論を付加すれば、この「オノマトペ」は、中原中也の独創的な詩的言語であり、「ゆ•れる」の〈ゆ〉を基調となし、「ゆさゆさ・ゆらゆら・ゆらーり」を連想させるこの「音律」。その行き着く先に「ゆやん」「ゆよん」であるべきところに「や」の「y」音を消去しつつ、「あ」だけ残存させて「ゆ•あーん」「ゆよーん」と長音化させた中也の音律は、幼児語化を含む天才的才能ではないだろうか。「ゆやゆよん」は、「y」音を戻し、「ゆや」と「ゆよ」を連続させることによって、ブランコが不規則に揺れ戻される反動を一瞬に表現する音律は、鼻音（n）効果が相乗的な効果を醸し出す、正に「神秘的」なるオノマトペということができるであろう。この音律の不思議さは、宮沢賢治のオノマトペと類似し、近代詩に新たな扉を開かせたと私は考えるのだが、どうであろうか。ご意見を乞いたい。

（6）最終連の舞台は、「屋外」か、「屋内」なのか

最終連の四字下げの部分が、「屋外」「屋内」で意見の相違があり、特に注目すべきだ。これを「模擬授業」では、参加学生にグループワークで実践しても興味深い「授業展開」ができる問題である。なぜなら「主題把握」に直結する謎を孕み、是非挑戦して欲しかったと思う「授業実践」からである。

「屋外＝野外」説から見ていこう。一般的に「四字下げ」であるので異次元の「場」を暗示している故に舞台は「屋外」と見るのが妥当であろう。「屋外は真っ闇　闇の闇」と屋外を強調する。さらに詩では「夜は劫々と更けます」となっているので「落下傘」は、俯瞰的な視野から、サーカスのテント小屋で問題なしと言い切れない、最後の「ゆあーん」の存在である。これは、ブランコが突然表れ、主題たるオノマトペで閉じている詩。屋外説を否定することも充分可能であるが、「屋外」説の論者は、オノマトペそのものを現場の描写ではなく、屋外へと響く余韻と解釈を施すのであるが、しかし、問題は依然残ると私は考える。

（一七）

での一と殷盛り」を最も「底付け」に位置するという配慮だが、しかし、次の〈第四連〉〈第五連〉〈第七連〉は、全て三番目で冒頭に「二字上げ」を行い元に戻しつつ、V字の波型を形成しながら、主題たる「ブランコ」や「ゆあーん」を強調する詩の編集を行なっている。これは、ブランコの《揺れ》というオノマトペの「意図」を企んだ「仕掛け」だと痛感するのだが、どうだろうか。

〈第八連〉は、敢えて4行全部を「4字下げ」で揃えて、サーカス小屋の外部が「地の底＝異次元」を暗示させる効果は、中也の心憎い「意図」を思わせる。こんなところまで読み取る「模擬授業」を試みて欲しいと切に願っている。では次にブランコの揺れ、オノマトペの考察を行おう。

(5) オノマトペの謎「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」とは

このオノマトペについて具体的な解釈を試みた、二人の研究者がいる。一人は、佐藤房義で、「ゆあーん」＝「釣り下がったブランコが前方の方へと揺れる」、「ゆよーん」＝「戻ってゆくさま」、「ゆやゆよん」＝「ブランコをこいだ時の力か、または別のブランコに飛び移るか、別なブランコから垂れ下がった手に飛びついてきたのかのいずれかであろう」（『現代詩鑑賞講座8』角川書店）と解き明かす。

もう一人の北川透も『詩論の現在　詩の近代を越えるもの―透谷・朔太郎・中也など』（思潮社）の中で「『サーカス』考」でオノマトペの謎を解明している。なぜ、この作品において「オノマトペ」が主題的位置を占めるのか。

それは、音象効果の分解でそれを試みる。四度繰り返される〈ゆ〉が聴覚的イメージを喚起され「緩やかでゆっくり」心が揺れるごとく、三度の〈ん〉が鼻音化の中で幼児語（のオトマトペ＝ねんね・あんよ・まんま）を呼び起こす効果であると主張する。それは、童謡風な「語り」となる点において、佐々木幹郎の提唱する「子守唄」説と重なっていることはいうまでもない。

また、北川透は最後に「オノマトペ自体単独では意味を為さないが、〈繰り返し〉を言葉の主題となしている」。

は目論んだのであろうか。

「模擬授業」では、指導書の記述に従い、「視覚的にブランコが揺れる動態を行の上げ下げで表す効果」と導いたが、授業者（6講義目）は、ここである読みの新しい「試み」を行っていた。各「行頭」の文字を順に線で繋げていくと、全詩が一つの「波」の形が浮かび上がる。それは、ブランコの軌跡というのは、当然としても、その波の中に《**幾時代がありまして**》の三回連続で強調される意外な「発見＝驚き」を見出す。

それは、「**見えるともないブランコ**」だから、その「幾時代」に隠匿された実景とともに「幾時代」の「茶色い戦争」と「冬は疾風」という「幻影」を蜃気楼の如く、浮き出す効果があるのではないだろうかと、授業者が解釈した「読み」に、私は思わず感嘆してしまった。圧巻である。

その次に、第三連の三番目の行についてである。行頭から順次下げられ、底に相当する「四字下げの」詩的言語は、「今夜此処での一般盛り」という〈祝祭〉が表出される「仕掛け」は、中也の目論んだ、ある「意図」が私たちの前に導かれる。このブランコの揺れは、〈心の揺れ〉、すなわち、〈女性失恋の痛手〉ということも想像できると、「読みの多様性」を強調した授業者の「教材研究」には、大きな成果の一つと評価したい。しかし、これは授業者の「深読み」ではないだろうか。その「失恋」は、詩の中のどんな箇所から探れるのかと再度考察すれば、何も見出せず、一試案として軽視（「流す」）するしかないだろうと思われる。

「字下げ」の仕掛けとして、「幾時代」のクローズアップ以外、どんな「法則性」があるのかを探る必要があったのだが、それは、「模擬授業」では取り組めなかった。これもまた、きわめて残念である。

この詩の構成は各連が、「2／2／3／3／3／2／3／4（行）」の八連構成となっている。

各2行の〈第一連・第二連・第六連〉場合、最初の行は、冒頭に対して、次の行が全て「二字下げ」という法則になっている。

各3行連の場合は注意が必要だ。〈第三連〉では、2・3番目が順に「二字下げ」でリフレインたる「今夜此処

（一五）

では、次に格助詞「と」で表現される「比喩」（古語）の巧さを考察しよう。

この「格助詞」の「と」は、「模擬授業」では、全く触れられず、流されてしまった。「白い灯が／安値いリボンと息を吐き」「咽喉が鳴ります蠑螈と」「落下傘奴のノルタルジアと」の三箇所を同時に処理する方法が、「比喩表現」の指導であった。この三度の繰り返しは、主題に直結する技巧であり、それを大事に取り扱いたいと考える。

「白い灯」は、「ブランコ乗りの動作は、揺れる白い灯が動線として光りの帯となるリボンの、息を吐くように見える様」を表現し、「蠑螈と」は「観客にとって皆喉が乾き牡蠣殻を擦ったような嫌な音を発すること」、「ノスタルジアと」は、「（隠喩表現によって）サーカス小屋自体が落下傘のような形と揶揄しつつ、故郷を恋し懐かしむような心情に浸る思い」となる。隠喩表現では、「観客様はみな鰯」がある。観客が全員、ブランコに夢中で鰯の群れの同一動作と同じように左右に触れ動く様を嘲笑している表現となるであろう。

最後に「見えるともないブランコ」は、まだ解明できない。語り手の席が舞台から離れているため「遠くからの視覚＝心理的現象たる感情」という理解は可能であるが、ブランコ自体が、作者を含めての「詩人の世界」と捉えれば、その「対人圏」も曖昧さとも推察できよう。捉え方は様々である。（このブランコ問題について二点、一つ目は、次節（4）「行の字下げ問題」と絡めていきたい。もう一点、6章で考察する「主題の問題」と絡めて論じたい。）

（4）各「行」の字下げ問題とその「波型」や「V字型」の神秘

「サーカス」のように多種多様に「字下げ」を行っている詩は、この詩集では唯一であり、この意図に注目すべきだ。しかし、全て揃えた「二字下げ」を行っている詩は、「朝の歌」「臨終」「帰郷」「盲目の秋」など実に多い。また、交互に「二字下げ」の詩も「朝の歌」等、かなり多い。

ただ「サーカス」の詩の場合、どんな効果を中也自身

れを聞き返しても答えが出ない場合）、どんな創意工夫やヒントを施すかという問題意識を植えさせている。教師のヒントとしては、「色」「戦争」というキーワードからの連想として発問させる配慮が必要となろう。この準備は必要不可欠である。

この「茶色い戦争」は、研究者でも三説ある。①阪本越郎の「明治時代の日清・日露の戦役あたりをいい、そこに日本軍隊のカーキ色の軍服の連想」（『日本の詩歌鑑賞23』）。②加藤周一は「変色した写真のセピア色」（『新編中原中也全集』「第一巻月報」）とする。③吉田凞生の「遠い過去を起点とする時間の流れ」（『鑑賞日本現代文学20』）である。前述した「模擬授業」の提起と二つは重なるが、「黄砂」と「時間の流れ」で差異があり、興味深い問題提起となっていると考えられる。

しかし、この隠喩たる「茶色い戦争」という「詩的言語」以上に《ありまして～ありました》という丁寧・謙譲表現の過去・完了隠された「措辞」[註13]を問題にする授業者や生徒が全くいなかったのは、きわめて残念である。

同様な「措辞」の詩は、「一つのメルヘン」に冒頭「小石ばかりの、河原があって、／（略）さらさらと射してゐるのでありました」がある。「一つのメルヘン」では、その「措辞」は死と再生の物語の重要な主題となるキーワード。この特徴的な「措辞」については、「サーカス」でも同様と考察し、再度後で論じることする。

二度の繰り返しである「一と殷盛（さか）り」も重要であるが、教科書の脚注に「盛んな一時のこと」とあるため、注目する者は皆無、残念である。中也は「殷盛（いんせい）＝盛んなこと」という難解な「詩的言語」を敢えてここでなぜ選定したのか。「茶色い戦争」との類似から中国殷文明を際立たせ、「昔の巨人の姿」（『山羊の歌』「少年時」）というイメージを投影させたのであろうか。私は、観客＝読者であり、「鰯」は傷みやすい魚の代名詞ということで、「飽きやすく離れやすい読者」、「蠣殻」は「ギスギスした世間体や詩人の世界」。そこで揺れ動く中也の心情を暗示させ、「一と殷盛り」とは、一時期賑わっていた詩の世界（文壇）だが、「今夜此処」でだけという限界性を揶揄しているとも充分、解釈できる重要事項であろう。

（一三）

歌詩人の如く、汎神論的自然に自分の孤独を遊ばせることなく、「芸術とは、自然の模倣ではない、神の模倣である」（前掲の書簡と同じ）と手紙で告白する。神の前の従順な羊たらんとしたのであろうか。それが『山羊の歌』となって発刊されたのは何故か。

大岡昇平は「同じ羊でも戦闘的な『山羊』と自分想像することを好」み、それが由来と記す（『中原中也全集1』解説）。また、〈山羊〉は中原中也の仇名であり、彼は耳が立ち、顎の細いことが特徴としていたという高森文夫の証言もある[注12]。中原家では山羊を飼い、朝ごとにその声を聞いたという弟中原思郎の回想（『別冊國文學　中原中也必携』）も参考になろう。

詩では「羊の歌　Ⅰ祈り」の「死の時には私は仰向かんことを！／この小さな顎が、小さい上にも小さくならんことを！／それよ、私は私が感じ得なかつたことのために、／罰されて、死は来たるものと思ふゆゑ。／あゝ、その時私の仰向感ことを！／せめてその時、私も、すべて感ずる者であらんことを！」という中で「小さな顎」である自分を宗教的な言辞で語る。これは、神に選ばれし『羊の歌』が神から選ばれた人間の歌」だとすれば、「『羊の歌』とは、挫折した『羊』、すなわち神の代行者たり得なかった詩人の自責の歌である」（吉田凞生『鑑賞日本現代文学20中原中也』傍線は筆者）という指摘とも重なり、あまりにその意味は深い。

こんな内容にも「模擬授業」では簡潔に触れる配慮があればと考えるが、詩集全般にも触れられなかったことが残念である。

（3）中也の難解たる「詩的言語」の諸問題

先ず詩の語句の意味問題として「模擬授業」で取り上げたのが、「黄色い戦争」である。

授業者は、充分教材研究を行い、次の三点の「考え」を生徒に提示していた。①「セピア色の写真（日清・日露戦争）」②「中国の黄砂」③「軍服の色」に基づく戦争一般なイメージである。また、詩の第一連と第二連とを関連付けて「戦争の厳しい冬で暗示した過酷な出来事（それが疾風）」と考察し、考えさせる授業展開であった。もし、生徒に対して「茶色い戦争」とは何かと発問した時、（そ

業論」は講義では触れていない。）

模擬授業では、「語句の意味は？」「その表現はなぜ」「その心情は」とあくまで「なぜなぜ」で発問を繰り返す授業展開であり、詩人の主題に迫るためには深刻な《壁》が立ちはだかるはずだ。「音読指導」の徹底を実施したのだから、そのことを基底として、次に「詩」の「語感」（詩の韻律における「位相」や「共鳴」）を理解させるという目的のもと、キーワードに隠された作者の「詩語の選択という動機付け」や「主題に関わる心情＝心の叫び」を《なぜ》の発問ではなく、「語感」の形象で読み取らせる創意工夫が必要であったと考える。それが課題であると私は、痛感した。

付加すれば、作者の経歴はある程度触れられていたが、詩集の『山羊の歌』について両「模擬授業」とも全く説明がなかった点が課題として残るであろう。この詩集についてこれから若干触れておきたい。

（2）詩集『山羊の歌』の、「山羊」と「羊」が暗示するもの

『山羊の歌』は、昭和七年編集を終え、母から貰った三百円で印刷にかかったが、資金不足で頓挫し、翌年芝書店、江川書房、建設社を経て文圃堂で漸く引き受けて貰い、装幀を高村光太郎に依頼し、昭和九年十二月に刊行された。中也生前の唯一の詩集である。「初期詩篇」「少年時」「みちこ」「秋」そして「羊の歌」からなる五つのパートを構成し、最後の「羊の歌」は、詩集名の由来となったことは想像に難くないが、〈山羊〉の詩はなく、〈羊〉と名付けたれた最終詩篇は、「自叙伝」の体をなす詩集と位置付ければ、この「述志＝最後に志を述べることで詩集全体にまとめを与えるもの」（大岡昇平）と考えられる。

中原中也は、理想とする詩人ヴェレーヌと同じ「羊」年生まれであることを誇りしたが、「羊」は自分自身であり、神に罰せられるトラウマに遭遇しては、神の救済者を待望し「宗教」に憑かれる。そして、彼は「短歌詩人はせいぜい汎神論までしかいかない」（「河上に呈する詩論」と題した書簡、昭和四年6／27）と明言し、その短

（一一）

・音読し、リズム感や比喩の巧さの把握
・サーカス小屋の情景把握
・詩の主題や心情を把握

B「単元指導計画1時間配当」（5講義）
・作者の経歴と作品テーマを考察
・各連の音読・読み取り
・作者の心情理解

C「本時の指導目標」（5講義）
・中也の経歴と作品テーマを考察
・各連の音読や読み取りを行う
・作者の心情・主題把握

D「本時の指導計画」（5講義）
〈本時の導入＝1～8の順〉
本時の学習目標を提示
作者の生い立ちや著書の確認
〈本時の展開〉
1音読や字下げの確認
2サーカス小屋の情景把握
3「黄色い戦争」の謎
4「見えるともないブランコ」謎
5「ゆあーんゆよーん～」の謎
6「安値いリボンと息を吐き」
7「観音様はみな鰯」の謎
8「落下傘」と小屋の外の謎
〈本時のまとめ〉
作者の心情と詩の主題を考察

・中也の独特表現技法の把握
・比喩表現から心情把握

B（6講義＝2時間配当）
1作者の動機を把握し独特な表現から心情を読取
2前時を受け心情の把握

C（6講義）
・詩の音読と独特表現の鑑賞
・各連の詳細な技法の理解
・全体の雰囲気を把握し、その根拠を探究する

D（6講義）
〈本時の導入1～6〉
作者の幼少期・青年期の把握
青年期の経歴から詩の動機が発生
〈本時の展開〉
1本文の音読
2「波打つ構成」「五七調」の考察
3比喩表現（オノマトペと心情）
4サーカス小屋の描写は何の暗示か
5「空中ブランコ」「落下傘」の謎
6最後「主題」のグループワーク
（指導の留意点で詩と「失恋」との関連に気付かせたい）
〈本時のまとめ〉
サーカス小屋の内外の描写が映し出す詩の主題を考察する

以上こんな「模擬授業」を両者はそれぞれ実施したが、詩の読解について「音読の指導」を徹底的に行うように指示したので、それは充分達成されていたと評価したい。しかし、詩の授業において、中心となっているのが「語意」の指導が中心であった。佐藤春夫の記事で指摘した通り、「語意」以上に「語感」が重要視されるのに、それが実施されず大変残念である。（ただ、「語感」重視の「授

試みていることも忘れてはならない。

（2）中原中也の変幻自在の「詩的言語」たる豊潤さ

「詩的言語」では、宮沢賢治（『春と修羅』）同様に様々な「詩的言語」が独特に多用され、その豊潤さは、中也の詩の難解さと同時に神秘に満ちた中也の「詩界」を醸し出す。例えば「サーカス」の最も有名なオノマトペの「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」である。これは、「未刊詩篇」の詩「砂漠」の一節「陽炎は、甕なす砂に／ゆらゆれる」（一九四九年八月号「文芸」初出。草稿より）、と類似表現があるが、ここではオノマトペは使っていない。「サーカス」（昭和四年一九二九年十月号『生活者』）と同様に有名なオノマトペは、「春の夕暮れ」の中の隠喩「トタンがセンベイ食べて」以上に「ポトホトと野の中の伽藍は紅く」の擬態語「ポトホト」である。

本来なら二字連続のオノマトペである「ポトポト」または「ホトホト」であるべきところを、中也はあえて「ポトホト」と半濁音を一箇所に限定し、二回目は「ホト」に戻す効果は、謎めく「中原中也の世界」へと誘っていく。詩「言葉なき歌」で使用した「あれ」などは、格好の「詩的言語」と重なる論争的な「謎」であり、また、「サーカス」の中でも、「黄色い戦争」「安値（やす）いりぼん」「落下傘女」なども難解さとともにその神秘な詩的言語の世界に足を踏み入れてしまう。その詳細は、「ゆあーん」のオノマトペの謎も含めて次の「模擬授業」で解明したいと考える。

5　「サーカス」の「模擬授業」の実践過程とその課題

（1）模擬授業の「単元指導目的」や「単元指導計画」等

この「模擬授業」は5・6講義目に実施され、以下のようなA「単元指導目的」B「単元指導計画」C「本時の指導目標」D「本時の指導計画」であった。上下二段で5講義目と6講義目に分け掲載した。

A「単元指導目標」（5講義） ・中原中也の人と作品を学ぶ	A（6講義） ・詩の音読、韻律の把握

「喪失感」に加え、さらに二点補足しておきたい。それは③視覚的効果の詩編集（音楽性や身体的感覚）と④新たな「詩的言語」の豊潤さということである。その解析を試み、論を補完していきたい。

4　視覚的効果の詩編集という「詩的言語」豊潤さとは

(1) 視覚的効果の詩編集

③の「視覚的効果の詩編集」とは、詩の編集作業で行われた「読点排除の余白」「連ごとの行揃え」「V字型の段差による行変え」など多種多様な視覚効果の織りなす演出のことである。

「サーカス」の詩は、それを巧みに駆使して表現する。「サーカス」の詩以外でも、中原中也の詩には、各行の始まりをすべて均一に揃えず、微妙に一字、二字下げを行ったり、詩「曇天」の「ある朝　僕は　空の　中に」の如く余白の区切れ（文節毎）を入れたりと、多彩な「視覚的効果」を狙った詩の編集を行なっている。この中原中也のこの試みについて、吉田凞生が「朝の歌」を俎上に取り上げて、詳細に論究している。[註11] 興味深い解析である。

吉田は「朝の歌」における三作品、「初出」（昭和三年八月）と「再出」（昭和四年十月）、さらに「定稿」（昭和七年版※印刷社の建設社・隆章閣に断られ文圃堂から昭和九年十二月市販される）を比較しながら、その変遷を考察し、結論として、『山羊の歌』の後半部の詩「憔悴」「いのちの声」等の停滞感を改善すべく、行頭の句間の空白、つまり「間」を表現することで視覚的・音声的リズムを創出したのではないかと推察している。

特に「サーカス」の場合、各行頭の二字下りやその連続下り、「V字」の行頭は、『山羊の歌』の発刊を試み、その編集作業に徹し、様々な改変・編集を行なった時のものと考えられるが、その企みはきわめて顕著だ。

その「改行の創意工夫」は、まさに「ブランコ曲芸」の揺れを視覚的に演出し、詩のバリエーションの効果を図っている。この様な効果は、全ての詩に施したわけではなく、詩を厳選しながらもその演出を中也は意欲的に

非日常（中也の世界観）を演出する効果を生じさせると、対談で幹郎は語る。同様に、淵生は麻雀で友人の一人が「春日狂想」を口ずさんでいる姿が強烈に印象を刻んでいるとも語る。これらから、人それぞれに共通する内奥たる「琴線」に触れる何かが、中也の詩に存在するのだと私は考えるのだが、どうだろうか。

（2）生活を通底したる「放心」という「喪失感」

では、次に中原中也の②「喪失感」を見ていこう。

中也を「不幸」という視点で課題意識の先陣を切ったのは、大岡昇平である。前述した箇所の論点は二点、第一に「人間は誰でも中原のように不幸にならなければならないものなのか」第二に「彼の不幸な詩が今日これほど人々の共感を喚び醒ますのは何故であるか」ということであった。大岡昇平の叙述する「不幸」は、中也と同時世代の特有な疑問であり、中村稔が指摘するまでもなく、私もまた困惑を感じてしまう。[註9]

さらに中也を「無垢」（純粋）と評した江藤淳の見解[註10]にも、佐々木幹郎は対談で「不幸」と同様に違和感を感じると語る。彼は中也が早熟な女性関係を経験しつつ放蕩息子なるが故に、その精神構造を「放心」と指摘する。そこには、破壊衝動に近い考えを含み、大岡昇平はその中也の行動を「邪悪」と規定するのも当然と推察できる。多くの人々に言われた「無垢」と「邪悪」の両極を彷徨っていた精神を「放心」という言葉で架橋すれば、中也が「人生に衝突する様に、詩にも衝突した詩人」（「中原中也の思い出」）と小林秀雄が語る言葉の基軸が一層リアルに理解できるはずだ。

「放心」の精神構造がもたらす「対人圏」（中也の言辞）の中で怒りと口論の果てに生じる倦怠感と悲傷感に見舞われ、常に孤独であり、「喪失感」が支配していた。それを癒すのが天性の詩の創作であり、「物語」という原郷に憧れる「子守歌」の「口語自由詩」であった。それは、「物語」と〈うた〉が分裂する前の「原始人の物語」といえるものであったのだと佐々木幹郎は補完する。この指摘には私も基本的に賛同したい。

ここで中原中也の詩の特徴として①「口語自由詩」②

摘する論者は少なくない。その一人である河上徹太郎にこう言わしめた言葉がある。

凡そ詩というものは詩人にとって、「自己に反した」ものであるが、中原は矢張り彼独特の方法で彼自身に反した詩を書いた男だった。

(「中原中也の手紙」『文学界』昭和十三年十月号)

この問題は、埴谷雄高も『死霊』の中で「自同律の不快」と指摘しつつ、「口語かつ定数律」の詩を批判する上で「短歌・俳句」の残滓を用いることは、時代逆行の「詩論」と考える文学者たちに、私は注目したい。しかも、詩の「定数律」において、演歌の歌詞に多用されるとりわけ「七五調」は、特に大衆受けの「俗情」に陥れるものであり、純粋な「詩情」を損なうことは明らかであろう。

しかし、だからこそ、この「口語定数律」の詩は、ダダイズムと同時に「道化」化を基軸としての詩情の「音律」は、困難な時代を生きる中原自身や私たちも含めて心癒す「子守歌」に昇華する「詩」になり得るはずだと佐々木幹郎は敢えて強調する。中也には、〈散文〉という形式は相応しくなく、彼の詩が成立する場所は、人々が日常で使う、弛緩的な「口語体」の中しか存在しない。それこそが、一方に「道化」を誘いながら、他方に「皮肉」「宗教的な神」を織り交ぜ、〈うた〉を奏でるのであろう。私は、佐々木幹郎のこの達見に注目したい。

この中也の詩は、短歌の石川啄木や童話作家・詩人の宮沢賢治と類似する点があると、私は痛感する。啄木の歌は、専門家たる歌人に高い評価を受けないが、万人の圧倒的な支持を得る。賢治の詩なども荒川洋治は詩を通して「詩にあらず」と批判する。[註8] しかし、多くの賢治ファンが愛誦する詩となっている。これを確証する例として、佐々木幹郎と吉田凞生が対談で語っている論点が大変興味深い。特に映画の場面でも中原中也の詩「曇天」(演歌調な韻律)が引用され、妙に適応しているという。

大島渚の映画「日本春歌考」で主役が中原中也の詩「曇天」を呟くと、そのワンシーンが語感や韻律で膨らみ、俗的な言葉が身体感覚を通して映像が生かされ、日常に

は、その人の時代背景とともに、その人物との関わり合い方に依拠する。その人たちとは、おおよそ四世代の分類が可能となる。

〈第一に〉中原中也と同世代の大岡昇平、小林秀雄そして河上徹太郎がいる。〈次に〉中原の詩を心の支えとして学徒出陣した中村稔やいいだもも等が続く。〈第三に〉戦中生まれで、敗戦後中原の詩を読んだグループで、秋山駿や大岡信。〈最後に〉第四世代の「戦後詩」（『荒地』『櫂』等）と呼ばれて初めて詩を書いた作家たちである。

中原と同世代の人々は、中也の強烈な個性に掻き回され、三十歳で早逝した彼を「不幸」と評するのは十分理解ができ、大岡昇平などは、生涯に渡って「中原中也論」を執筆するキッカケとなった。

しかし、私たち授業者や講義を受ける現代の大学生は、「不幸論」に惑わされずに中原中也そのものの「作品論」から論ずるべきであるのは、当然として、彼の魅力が、彼の言わば〈悲しみ〉に満ちた「生い立ち」が影響していることも否定できない事実であろう。

では、大岡昇平のもう一つの課題意識の「中原中也の魅了する詩の理由」について深く論究して行きたい。中原中也と距離を置き、客観化できる第四世代たる詩人・評論家、佐々木幹郎の考えによれば、吉田凞生との対談において次の特徴二点をあげ「中也論」を論じている。[註6]

それは、①中原中也の〈うた〉の本質が「口語自由詩」であり、②中原中也の根底にある「喪失感」だと佐々木幹郎は、明快に強調する。これらを探究してみたい。

3　中原中也の特徴たる「口語自由詩」と「喪失感」

（1）中原中也の特徴たる「定数律」を含む「口語自由詩」の魅力

最初の①「口語自由詩」という特徴については、口語詩であるが、自由詩ではなく、「口語定数律」詩ではないのかという反論がある。[註7]文語定型の伝統的な短歌・俳句から、いかに「近代詩」を確立するのかという至上命題に対して、中原中也はその「定数律」という定型にいわば絶対的な自由である詩精神を委ねてしまったと陥穽を指

（五）

所」また「隠喩」として表現される、隠された「意味」を映像や描写の中で鑑賞する〈芸術〉たる営みである。この営みについて「教育とは芸術的創造」を主張したのが斎藤喜博であった。[註4]

したがって「物語」の形象を豊かに、また深く鑑賞（芸術的創造の内実化）すべき「過程」をなぜの「語意」中心に読解すれば、作品の真の価値を見失うであろうと、私は考えるのだがどうであろうか。このような国語教師（高校）の陥穽について、ある大学の教授からも同様の指摘がなされたことを私は忘れられない。

高校の国語教師は、なぜなぜと小説を読む傾向にある。大事なことは、小学校の先生のように形象豊かに「作品」を読み取るべきだ。

この指摘を行った東京学芸大学の千田洋幸は、国語教室の場では教師と生徒が共に「意味という病」に取り憑かれ、「意味と理解の帝国」化していると指摘し、警鐘を鳴らしていたことは、極めて示唆的であろう。[註5]

（四）

2　大岡昇平の中原中也に対する「人物像」理解における課題意識

では、かなり脱線したが、ここで「詩」と「作家論」に戻したい。

中原中也の詩を理解する大前提として、大岡昇平が立てた基本的な「課題意識」が糸口になるので、そこから論究したい。

中原の不幸は果たして人間という存在の根本的条件に根拠を持っているか。言い換えれば、人間誰でも中原のように不幸にならなければならないものか。おそらく答えは否定的であろうが、それなら彼の不幸な詩が、今日これほど人々の共感を喚び醒ますのは何故であるか。

（「中原中也伝―揺籃」一九四九・八、「文芸」初出。傍線は筆者。二つの課題提起。）

中原の「不幸」についてどう評価すべきかという問題

1 「詩の創作」の核心による「語感」と読者の「語意」という乖離

中原中也の人物像を論究する前に、詩人自身による「創作過程の核心」について、少し「私論」を述べたい。なぜなら、「詩」というものが評論や小説以上に難解であり、特に現代詩は理解できないと、人々から多くの声を聞くからである。詩（特に現代詩）は、どうして理解する前に困難な〈壁〉が存在するのか。それを見事に解説してくれたのが、詩人の佐藤春夫の朝日新聞記事「現代詩はなぜ難解か」であった。(註2)

「すべての詩人は、語感によって詩を書いている。それを読む人はいつも語意をたどって読もうとするためにわかりにくい」（傍線は筆者）

私たち読者（特に国語教師）は、常に「詩」の語意に従って、その意味を理解しようと努力するが、「語意」に縁取られた「現代詩」は、その理解を拒否しつつ、私たちの前に佇む。国語の授業でも全く同様に「語意」の把握を至上命題として主題把握を行ってしまい、特に現代詩の取り扱いでは、難解な詩を避け、教えやすい教材化だけの授業化など、「不幸な出会い」を生徒にさせてしまう。この「語意」の把握で詩を理解することの陥穽を、現代詩人の井坂洋子もまた「詩は説明を嫌う。（詩は）短歌や俳句の定型や約束事もなく、対象へ最も早く、自由に切り込んでいく。（略）説明を削りに削った、最低限のことばであるが、なぜ想像力のより大きな、強いはばたきをうむのか、（詩は）不思議な作物である」（括弧内の説明は筆者）と明言する。(註3) 説明を拒む詩を「語意」で〈なぜなぜ〉と読み解くことの限界性は、危険な問題を孕んでいた。

これは、詩だけでなく、小説の授業でも国語教師一般に見られる限界性でもある。その限界とは、「小説」の文脈をただ「なぜ」という語意に拘束され、謎解きのごとく小説を読み取る「授業」が蔓延し、その瑕疵が指摘されている点と重なる。。小説の本質とは、構造的な〈虚構〉という「物語」である故に描写された「背景」「時代」「場

也であった。「教科書採用」の資料を掲載する。

詩人別教科書（国語総合）掲載の数[註1]

1位	中原中也　15社	（「サーカス」5社「一つのメルヘン」「汚れちまつた悲〜」各2社「月夜の浜辺」1社等）
2位	高村光太郎　12社	（「道程」4社「ぼろぼろな駝鳥」「あどけない話」「レモン哀歌」「鯰」各1社等）
3位	茨木のり子　7社	（「六月」「わたしが一番きれい〜時」各2社等）
4位	谷川俊太郎　7社	（「二十億光年の孤独」5社「はる」1社等）
5位	石垣りん　6社	（「シジミ」3社「崖」3社）
6位	三好達治　6社	（「甍のうへ」4社「乳母車」「雪」各1社）
7位	萩原朔太郎　4社	（「およぐ人」「猫」「遺伝」「旅上」各1社）
8位	宮澤賢治　3社	（「永訣の朝」「岩手山」「高原」各1社）
9位	吉野弘・吉原幸子・室生犀星・田村隆一　各2社	

（二）

この統計は、二〇〇六年当時の高校の「国語総合」であるため、現在との乖離もあり、「現代文」も含めれば、若干異なる結果も想像されるが、傾向及び特徴は、凡そ把握できると思う。

中原中也は、教師サイドだけでなく、高校生にも非常に人気あり、教え易い傾向にある作品。しかし、作品自体には数々の「謎」が深く存在し、その「謎」を起点として発問を駆使すれば、興味深い授業が「成立」する。そのためには当然、中原中也の深淵なる謎の難解さを超越する必要があるのだが。

しかしながら、「作品論」以上に「作家論」として固執してしまえば、更なる数多くの難問が待ち構えている。今回は、「模擬授業」の取り扱いなので、「作品論」として論じるが、その前に、中原中也の詩人としての特徴を考察する前提として「詩」の難解性の構造を指摘しておきたい。

中原中也「サーカス」における「模擬授業」研究

――「郷愁」「失恋」たる主題に隠匿された「批判性」と「子守歌」――

荒木　美智雄

序（模擬授業、詩「サーカス」における「現在地」）

北海学園大学での講義「教育実習実践指導Ⅰ」（5講義目及び6講義目）を二〇一七年六月五日に行った。その時の「実践記録」及び「教材の研究」をまとめた「論考」である。模擬授業を一人五〇分で実施し、その後「講評」について参加学生たちと授業の振り返りを実施した。その時の「単元」教材は、「中原中也の詩〈サーカス〉」である。

詩は、模擬授業の場合、小説「羅生門」や評論「水の東西」などと比較すれば、作品自体が最適な長さであり、教える側からも、また教わる側からも教材化に適した一まとまりの「単元」となっていて、「模擬授業」としては、発問も出し易い教材である。

5・6講義目の特徴では、二人とも授業者の実践「模擬授業」の中で、示唆さに富む意見が多く出され、様々な問題点を明快に指摘していた点をあげたい。それを従来の詩「教材研究」論と充分に精査し、実践記録として纏めてみたいという思いに駆られ記すこととした。詩の「模擬授業」自体は、比較的に扱いやすいが、その取り上げる「作品」によって、「西脇順三郎」や「立原道造」など詩は、難解なものも多く存在する。高校の教科書にどんな詩人のどんな作品が取り扱われているのかを探ってみると、こんな結果（次頁）である。一番多い掲載は、やはり中原中

（一）